

JICA横浜 海外移住資料館

研究紀要

10

2015年度

〈特別寄稿〉

あるブラジル移民の軌跡 — 黒田又蔵氏の事例を手がかりとして

二宮 正人

論 文

ハワイ日系人の正月風景にみる移民文化 — 年越しの儀式の変容と継承 —

島田 法子

ハワイ日本人移民の教材づくりに関する海外スタディツアーの教育的意義
— 物語論的アプローチによる大学生の自己変容プロセスの分析を通して —森茂 岳雄
津山 直樹

研究ノート

和歌山県における移民をめぐる取り組みと今後の展望

東 悦子

南洋群島における日本人小学校の教育活動

— 南洋庁サイパン尋常小学校保護者会編『さいぱん』（1935年）をもとに —

小林 茂子

資料紹介

菅野武雄「最後の手記」（四） — 日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想 —

柳田 利夫

〈調査報告〉

海外移住資料館とハワイ日系社会との関係強化について
ハワイ日系社会関係促進調査（2015年10月15日-21日）の報告飯野 正子
玉林 洋介

はじめに

JICA 横浜 海外移住資料館は 2015 年 10 月に創立 13 周年を迎えました。この間、立地する横浜みなとみらい 21 地区の整備が進むとともに来館者も年々増加し、2014 年度は年間来館者総数が初めて 4 万人を越え、2015 年 9 月 11 日には開館以来、累計 40 万人目の来館者をお迎えすることができました。この記念すべき来館者は博物館の学芸業務を勉強する関西の大学生・大学院生の皆様であり、当資料館が社会教育機関としての役割をきちんと担っていることを実感し、嬉しく感じました。

さて、2014 年度の企画展として、2013 年度の沖縄展に引き続き、移民送出県である和歌山県と協力した企画展「連れもて行こら紀州から！― 世界にひろがる和歌山移民 ―」を開催致しました。各県とその県にルーツ持つ日系人・日系社会の関係性に焦点を当てた展示とその準備段階での意義等につきましては、本紀要にご寄稿頂いた和歌山大学の東悦子教授の「研究ノート」でも触れられておりますので、ご確認頂けましたら幸いです。

近年、ブラジルをはじめとする中南米地域への関心が高まるにつれ、国内の多くの自治体において、改めて日系社会とのつながりに注目が集まって来ております。各国の県人会の周年行事には各県知事と共に県内交流関係者に加え、商工会をはじめとする多くの県内ビジネス関係者の訪問が増えています。幅広い層の人の交流を通じた日系社会との絆の見直し・強化が進む中、進展する日系社会の理解の促進に関し、当資料館として、研究者の皆様の研究成果を活かしつつ、一層貢献すべく努力して参りたいと考えております。

資料館の企画展では、この他、海外在住の日本人研究者の研究成果に基づく、終戦 70 年企画展示「海を超えたヒロシマ・ナガサキ」を、また、地元の横浜市とカナダ・バンクーバー市との姉妹都市 50 周年を記念し、カナダの日系文化センター・日系博物館との協力の下、企画展「TAIKEN 体験 ― 日系カナダ人 未来へつなぐ道のり―」を開催し、多くの方々にご来館頂きました。

2015 年は日本とブラジルの修好 120 周年を記念する年でもあり、10 月下旬より、秋篠宮同妃両殿下がブラジルを御訪問されました。6 月にはその事前のご準備の一環として、両殿下はブラジルをはじめとする各国の日系社会成立の歴史について当館常設展示をご視察されるとともに、日ブラジル外交関係樹立 120 周年記念特別展示「移民画家 半田知雄の世界 (二宮家ブラジル移住 60 周年記念コレクション)」もご鑑賞されました。本特別展示は本紀要にも特別寄稿頂きましたサンパウロ大学の二宮正人教授からご寄贈頂いた半田知雄画伯の絵画 19 点を中心に展示したものです。

当資料館では、このように国内外における日本人及び日系人の移住に関する研究成果を踏まえ、タイムリーな話題に基づく企画展示を開催することで、広く人々の心に届く、より発信力の高い社会教育機関となることを目指しております。

当資料館の各種活動のためにも、日本国内の日系社会への関心の盛り上がりに伴うニーズ対応のためにも、研究者の皆様の研究活動と研究成果の積み重ねは極めて重要なものとなります。今回で第 10 号となる本『研究紀要』では、当資料館学術委員会の飯野正子委員長を中心に実施して頂いた、日本人の海外移住における大きな第一歩を踏み出した「ハワイ」に対する調査報告も掲載致しました。「温故知新」、当資料館では日本の移住史を振り返る調査研究プロジェクトも新たに開始しております。こうした研究成果を踏まえ、本『研究紀要』が研究者の皆様、読者の皆様の心に一層響き、更なる研究と知の地平を広げる一助となることを願っております。

最後になりますが、これまで本研究紀要の編集、及びご寄稿にご尽力頂いた学術委員の先生方をはじめとする数多くの執筆者の皆様、関係の皆様に対し、ここに改めて深く感謝申し上げます。

2016 年 2 月
独立行政法人 国際協力機構
横浜国際センター 海外移住資料館
館長 小 幡 俊 弘

『研究紀要』第10号（記念号）の発刊によせて

『研究紀要』第10号（記念号）が完成いたしましたので、お手元にお届けいたします。学術委員会が立ち上げました研究プロジェクトの成果の一部が、ここに掲載されております。海外移住資料館の目的である「海外移住と日系人社会に関する知識の普及」と「移住に関する資料・情報の整備と提供」を達成するための努力がこのような形で実りましたこと、そしてその成果をお届けできますことを、うれしく誇らしく思っております。

第1号が発刊されてから10年。学術委員および編集作業担当者一同、言葉では言い尽くせない感動を味わっております。本号を通じて、読者のみなさまにもこの感動が伝わることでしょう。本号には、第1号から第9号までの『研究紀要』の目次を一覧にして掲載しましたので、これまでの『研究紀要』の成長過程——それはすなわち移民研究の動向を示すもの——を確認していただけたと思います。その目次にある論文や研究ノートの多くは、学術委員会研究プロジェクトから生まれたものです。

現在進行中（平成27年度—29年度）の学術委員会研究プロジェクトは以下のとおりです。いずれのプロジェクトも、移民研究の基盤であると同時に将来の研究につながるテーマを扱っており、すでに調査、データ入力、研究会開催といった形で活発な活動が進んでおります。

- ①「移住資料ネットワーク化プロジェクトの充実と拡張（第二期）」
- ②「海外移住150年を振り返る：移動する人の視点からみる国際関係」
- ③「第二次世界大戦直後に日本に『送還』された日系カナダ人（約4000人）のその後」
- ④「在日ラテン系二世の多角的分析」

今号には、『研究紀要』発刊10周年を記念し、また日伯修好120周年を祝って、当資料館へのご貢献の大きい二宮正人氏（サンパウロ大学教授）による特別寄稿も掲載されています。さらに、「論文」「研究ノート」「資料紹介」という寄稿分類に「調査報告」が加わりました。『研究紀要』の幅が広がっていることと、当資料館の目指す国際連携が実現しつつあることをお知らせいただけますでしょう。

これまでの研究プロジェクトの成果は、『研究紀要』以外にも公表されています。10年間を振り返ってみますと、たとえば、戦争花嫁をテーマにした研究プロジェクトの成果が論文となって『研究紀要』（第3号と第5号）に掲載されており、それが企画展示「海を渡った花嫁物語」（2009年）となって公開されました。この展示には、皇后陛下の御行啓があり、光栄なことでした。

こうした形で海外移住資料館の活発な活動が国内外で示されることは、『研究紀要』とともに、海外移住資料館の目的達成につながるものであり、大変喜ばしく誇らしいことです。このような成果は今後さらに増えることでしょう。これからも、研究プロジェクトの成果が『研究紀要』へ、そして展示やイベントへと膨らみ、本資料館の目指すところが社会に伝えられることを願って、努力を続けたいと思います。次の10年間、そしてその後の当資料館の発展と世界への貢献が楽しみです。

この『研究紀要』が、読者および関係者のみなさまのご支援を得て成長し、海外移住資料館の活動の一端が、より多くの方に理解・認識していただけますよう、願っております。

飯 野 正 子
海外移住資料館学術委員会委員長
(津田塾大学名誉教授・前学長)

研究紀要

〈目 次〉

はじめに
『研究紀要』第10号(記念号)の発刊によせて

小幡 俊弘
飯野 正子

〈特別寄稿〉

あるブラジル移民の軌跡 — 黒田又蔵氏の事例を手がかりとして — 1
二宮 正人

論 文

ハワイ日系人の正月風景にみる移民文化 — 年越しの儀式の変容と継承 —
..... 11
島田 法子

ハワイ日本人移民の教材づくりに関する海外スタディツアーの教育的意義
— 物語論的アプローチによる大学生の自己変容プロセスの分析を通して—
..... 25
森茂 岳雄・津山 直樹

研究ノート

和歌山県における移民をめぐる取り組みと今後の展望 41
東 悦子

南洋群島における日本人小学校の教育活動
— 南洋庁サイパン尋常小学校保護者会編『さいぱん』(1935年)をもとに—
..... 63
小林 茂子

〈調査報告〉

海外移住資料館とハワイ日系社会との関係強化について
ハワイ日系社会関係促進調査(2015年10月15日-21日)の報告
..... 75
飯野 正子・玉林 洋介

学術研究プロジェクト一覧 87
『研究紀要』目次一覧 90

資料紹介

菅野武雄「最後の手記」(四)
— 日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想 — 95
柳田 利夫

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface

On Publishing the Journal of the JOMM

Toshihiro Obata

Masako Iino

Special contribution —————

Path of a Japanese immigrant to Brazil — Mr. Matazo Kuroda's case 1

Masato Ninomiya

Articles —————

**Immigrant Culture Seen in the New Year Celebration of Japanese People in Hawaii:
Changes and Continuity in the Immigrants' Seasonal Rituals** 11

Noriko Shimada

**Educational Significance of Overseas Study Tour Program for Making Teaching
Materials about Japanese Immigrants in Hawai'i: An Analysis of Self-Transformation
Process of University Students Utilizing Narrative Theory Approach** 25

Takeo Morimo • Naoki Tsuyama

Research Notes —————

**Various Projects Related to the History of Emigrants in Wakayama Prefecture and
the Future Developments** 41

Etsuko Higashi

**Educational Activities of Japanese Elementary Schools in Nan'yō Guntō
(the South Seas) : Focusing on "Saipan" edited by Parents Association in the
Saipan elementary school in 1935** 63

Shigeko Kobayashi

Research Report —————

*"Strengthening the Relationship between the Japanese Overseas Migration
Museum and Nikkei Communities in Hawaii" — Report on the Research Trip
Visiting Nikkei Communities in Hawaii (October 15-21, 2015)* — 75

Masako Iino • Yosuke Tamabayashi

Academic research projects List 87

Contents List 90

Review on Scholarly Materials —————

**"Last Notes" by Takeo Sugano (4): The Life and Thoughts of a Second-Generation
Japanese-American Who Has Become "Japanese" in Japan.** 95

Toshio Yanagida

〈特別寄稿〉

あるブラジル移民の軌跡
— 黒田又蔵氏の事例を手がかりとして —

二宮正人（サンパウロ大学・教授）

はじめに

私が黒田氏に初めてお目にかかったのは1968年のことであった。当時私はサンパウロ大学法学部2年生、同文学部日本語学科1年生であり、ボーイスカウトのグループを率いて、サンパウロ州北西部のボツポランガ市及びフェルナンドポリス市を訪問していた。両市はサンパウロ市から約550キロの地点にあり、現在では夜行寝台バスで約8時間の快適な旅であるが、当時はサンパウロ州有鉄道アララクワラ線で約16時間の旅であった。2等車¹の椅子は硬い木製であったが、若さも手伝って、楽しい旅行であった。その後は乗用車かバスで行ったり、最近では福嶋教輝前サンパウロ総領事がアララクワラ地方7都市を訪問された際、フェルナンドポリス市のみ同行したが、サンパウロから約400キロのサン・ジョゼー・ド・リオプレット市まで飛行機で行き、そこまで関係者に車で迎えに来てもらう、という行き方をした。したがって、同地への鉄道の旅はそのときに最初で最後であったが、今から考えると、かつての移民の方々はサントスから鉄道でサンパウロへ上り、そこからソロカバナ線の場合は直接、他の沿線の場合はパウリスタ線でパウルー市まで行き、そこで乗り換えてノロエステ線でアラサツバ市等を経てマツ・グロッソ州方面へ、またはアララクア線でサン・ジョゼー・ド・リオプレット市経由でボツポランガ、フェルナンドポリス、ジャーレス、サンタ・フェ・ド・スール方面へと乗り継いでいったことから、私の場合も途中までではあったが、彼らの苦勞の一端を垣間見る旅ができたことは有益であった。

フェルナンドポリス市に到着してから間もなくであったと記憶しているが、市役所が日本語が話せる者を探している、ということを知り、手を挙げたところ、日本からの要人が市を公式訪問するので、通訳をして欲しいとのことであった。私はそれまでに日本のマスコミ取材班の通訳として、カステロ・ブランコ大統領やグァナバラ州知事カルロス・ラセルダ、連邦下院議員エルベルト・レヴィ等ブラジル側要人の通訳の経験はあったものの、日本からの要人の通訳はこれが初めてであった。

要人とは千田正・岩手県知事とその一行のことであり、サンパウロからは車で来られたが、それでも当時は現在のような高速道路がなかったため、10時間以上かかったとのことであった。サンパウロからブラジリアやリオデジャネイロへ飛行機で行くのであればともかく、内陸部の遠隔地までよく来られたものだったと思うが、当時は東京・岩手間にも今日のように新幹線はなく、急行列車であっても、かなりの時間がかかったであろうことを考えると、日本からのご一行はサンパウロ州内の距離について、さほど遠いと感じなかったのかもしれない、と思うのである。

そのような遠隔地まで、何故岩手県知事とその一行が来られたかという点、ブラジル在住の岩手県人であった高橋貞一郎氏（花泉町金沢出身、1933年あらびあ丸で渡伯）が訪日の際、フェルナンドポリス市日系人協会が建設を予定していた野球球場の定礎式に招待されたとのことであった。千田知事は、佐藤寿一県農務部長を帯同しており、その後、同沿線タクアリチンガ市、パラナ州ロンドリーナ市を経て、パラグアイ国まで行かれたとのことである。

その際の通訳の仕事とは、県知事が市長、市議会議長、市議員、判事や警察署長等と表敬の際の会話のみならず、同市名誉市民章を授与された歓迎式典等における日伯双方の挨拶等であった。何と言っても初めての経験であり、緊張したが、何とか大任を果たすことができた。県知事からは

通訳の労を多として記念品をいただき、また後日国費留学生として訪日した際にもお目にかかって挨拶させていただいた。

県知事一行がサンパウロへ戻ってから、さらに数日間同市に滞在したが、間もなく、当時同市の日系人会の会長を務めておられた黒田氏の自宅での慰労会に関係者とともに招かれた。その際、私の二宮姓と出身について質問され、父が宮崎県日南市油津の出身であると答えると、驚いたことに戦前に移住した父の姉ことが、福岡県出身の紫牟田克己と結婚した際に仲人を務めたことを話され、奇遇を喜び、遠来の親戚のように厚遇していただいた。その頃、伯父は既に亡くなっていたが、伯母はまだ元気でいたことから、サンパウロに戻ってすぐ、その出会いの事を報告すると、伯母も結婚式以来、仲人の黒田氏とは数十年間会っていないとのことで、あまりの奇遇に感泣したことを半世紀近く経過した現在でもはっきりと記憶している。また、姉の構成家族の一員として移住した、父の2歳年上の兄二宮徳一も戦後の一時期にフェルナンドポリス郊外で綿の栽培に従事していたことを聞き、不思議なご縁に驚いた次第である。

また、それから数か月後にフェルナンドポリス市から招かれ、同市と岩手県との間の親善交流の促進に貢献した、として市議会から表彰されたが、当時20歳の学生としては面映く、過分なことであったと恐縮している。おそらく、黒田氏が会長を勤めていた日系人会館の推薦によるものではなかったか、と感謝している。私が黒田氏と会ったのはこの2回のみであったが、私の日本留学中の1975年1月25日に亡くなり、留学を終えて帰国した後に墓参に伺った。

その後、30年以上同市を訪問していなかったが、昨年福嶋前総領事の同市への公式訪問に同行した際に、黒田氏の遺族と再会し、同氏に関する様々な資料を見せられた。遺族はそれらの資料を後世に残す方法を模索していることから、私は本稿のテーマとして、同氏の移民としての軌跡をたどってみることにした。

生い立ちとブラジル移住

黒田氏は1900年11月7日に熊本県下益郡河江村字川尻に生まれ、1924年7月に大毎移民²として、かなだ丸で渡伯した。同氏が24歳未満のときであり、同氏のパスポートは兵庫県庁において同年5月27日に発行されている。そこに記載されている同行家族は、当時21歳の妻タカ、生後7か月の長女シゲノ、21歳の弟耕作（いずれも故人）であった。[写真1] [写真2]



[写真1] 1924年発行の黒田氏のパスポート。



[写真2] パスポート貼付写真
右から、又蔵、弟耕作、妻タカ、長女シゲノ

サントス港到着は同年7月31日であり、サンパウロ市内の移民収容所に数日間滞在後、まず当時の移民の多くが入植した州有鉄道モジアナ線モンテイロ駅近辺のサンタ・オリンピア農場（コーヒー園）で就労し、次いで、同沿線グアタパラ、そして同鉄道ノロエステ線ペナポリス市アグア・リンパ地区、次いでグアラサイ市近郊アグワテミー植民地で農業に従事した。その頃、当時では珍しかった運転免許を取得後、トラックを購入して同市アルト・ピメンタ地区で運送業を営み、その後同沿線アンドラジーナ市郊外において農業を、そして1955年にフェルナンドポリス市に移転し、近郊で農場、市内で飲食店等を経営して生計を立てた。日本から連れてきた長女のほか、ブラジルで10人が出生し、計11人の子宝に恵まれた。現在男女6名が健在である。

様々な社会活動について

黒田氏は行く先々の日系人社会において類稀なるリーダーシップを発揮したが、その活動は遺族が保存している様々な感謝状、表彰状によってたどることができる。

そのなかでもっとも注目されるのは、1943年7月3日付けのアグワテミー日本人会からの感謝状である。[写真3] これは1939年から約5年間、同地の日本人会会長を勤めたことによるものであるが、通り一遍の文章ではなく、同氏に対する感謝の意が精魂を込めて書かれたことが伺える³。また、遺族の話では、バルガス政権下の1938年12月25日付大統領令でブラジル全国において枢軸国の言語、すなわち日本語、ドイツ語、イタリア語による外国語教育が全面的に禁止され、サンパウロ州、パラナ州を中心とした日本語学校が閉鎖されるなか、アグワテミー植民地では黒田会長の指導の下で日本語教育が継続されていたとのことである。



[写真3] アグワテミー日本人会感謝状

るための米州外相会議を1942年1月中旬に当時はブラジルの首都であったリオデジャネイロ市で開催することを提案した。ブラジル政府に信任状を提出していた日本、ドイツ、イタリア等枢軸国の大使は、ブラジルを局外中立にすべく努力したが、結果は眼に見えており、同年1月28日をもって、ブラジルは圧倒的多数の中南米諸国とともに枢軸国との国交断絶の決議に参加し、同年8月にはドイツ、イタリアに宣戦布告し、翌年にはドイツと対峙するため、イタリアへ米式装備の一個師団の陸上兵力、若干の海軍艦艇、空軍部隊を派遣した。そして、1943年にイタリア、1945年5月8日にドイツが降伏すると、米軍に対してブラジル国内に基地を貸与する必要上、同年6月6日付けで日本に対しても宣戦布告を行った⁴。

国交断絶後、それぞれの国の外交団は戦時国際法の規定に基づき、交換船で帰国した。米国は、中立国スウェーデン籍のグリップスホルム号をチャーターし、ニューヨーク港において北米諸国の、

第二次世界大戦勃発前夜においては、日本語教育のみならず、1940年7月末の外国語による新聞・雑誌の発刊禁止などが行われた。そして、最終的には連合国側に立って参戦するブラジル政府は、日系社会に対して様々な制限を加える措置を採っていた。とくに1941年12月7日（現地時間）の日本によるハワイ真珠湾攻撃の翌日、それまで中立を保っていた米国は日本のみならず、ドイツ、イタリアを始めとする枢軸国に対して宣戦布告し、直ちに集団安全保障規定を有する汎米条約を発動す

次いでリオデジャネイロ港において南米諸国に勤務していた外交官及び民間企業駐在員とそれらの家族を乗せて、当時は中立国ポルトガルの植民地であったモザンビークの首都ロレンソ・マルケス（現マプト）へ向かい、そこで欧米の駐日外交官及びその家族を乗せて来た浅間丸とコンテ・ベルデ号と待ち合わせて乗客を移乗させ、帰国した。

日本政府は、外交団の引揚にあたり、ブラジル政府の了解の下、最初はスペイン大使館、次いでスウェーデン大使館に邦人の利益保護のための日本人部員一名を残した⁵。しかし、ブラジルに在住する移民の多くは戦時国際法の規定を理解せず、日本政府は戦争中に移民を放棄して大使館、総領事館を閉鎖し、外交官、領事、館員を交換船で帰国させたため、移民が棄民として扱われた、として批判し、そのような声は日系社会において1970年代まで聞こえていた。

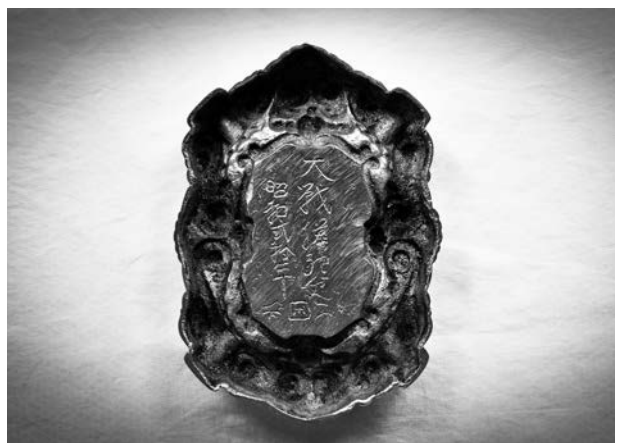
感情的には、そのような批判は理解できなくもない。しかし、実際には戦前において約19万人の移民が入国しており、開戦時に仮に約15万人が生存していたとして、日本国籍者のみを何人帰国させることができたであろうか。当時の船舶が一隻につき、1000人程度を乗せることができたとして、戦時中に150隻の船がそれぞれ1000人程度の日本人を乗せて、交戦海域を日本へ向けて航行することの可能性を、棄民発言をされた、ある高齢者にお聞きしたことがあったが、回答はいただけなかった。

国交断絶後のブラジル日系社会は、米国やカナダの西海岸における日系人が経験した強制収容所行きはなかったものの、上記制限のほか、路上の立ち話を含む3名以上の集会における日本語の会話を逮捕拘留の対象とし、住所地の市郡以外の場所に旅行する場合は、警察の事前許可を必要とする安導券の発行、海岸線から50キロ以内の枢軸国の国民を内陸部に強制立ち退きを命ずる、などの措置を講じた。戦時中のブラジル官憲の日本人・日系人に対する横暴については、多くの文献が存在するので、ここでは省略するが、そのような状況の下で、一部の移民は日本の勝利を信じて行動し、養蚕業を利敵行為⁶として、それを営む農家の蚕小屋の焼き討ち等の出来事も身近で起こったようであるが、遺族によれば黒田氏は警察に逮捕拘留された人々の釈放について、グアラサイ市の有力者トレド・ビザ弁護士と懇意であったことから、その釈放に努力したとのことである⁷。

また、終戦の報に接すると、黒田氏は早くから当初は少数であった認識派、いわゆる負け組に属していたことから、信念派、すなわち勝ち組の組織である臣道連盟のメンバーに狙われていたそうである。[写真4]当初は移民社会の多数派であった勝ち組の人々もサンフランシスコ平和条約が発効し、母国のニュースも届くようになると敗戦を認識するようになり、黒田氏もこれまでと同様に日系社会の指導者としての役割に専念するようになった。

例えば、1954年1月のサンパウロ市創立400年祭は、大統領、州知事も出席した大規模の式典であったが、日系社会もこぞって参加し、日本政府も今日までイビラプエラ公園におかれている日本館を寄贈した。サンパウロでは祭典協力会が結成され、全国の日系団体が結集して協力することになり、各地に地方委員を委嘱したが、黒田氏も1953年3月3日付けでそれを受けている⁸。

なお、黒田氏は生涯を通じて帰国することはなかったが、熊本県人として母県の動向にも関心を寄せ、熊本海外協会会館新築



【写真4】臣道連盟の会員証。黒田本人は会員ではなかったが、臣道連盟から狙われた際のお守りとしていた。

にあたっても、在伯県人に語らい、寄付を集めて送金している⁹。

そして、同氏は仏教徒としての信仰心も篤く、1954年に大谷光照門主並びに嬉子裏方の南米巡教に際しては積極的に協力し、本派本願寺（西本願寺）の信徒として宗門より数回にわたって表彰されているが、他方では戦後の明治神宮復興奉賛にも募金活動を通じて協力している¹⁰。

これらの貢献は、日本人ブラジル移住50周年記念行事において日本政府の認めるところとなり、1958年6月18日付けで外務大臣表彰を受け、木杯一個を受領している¹¹。50年前の笠戸丸到着日を記念してサンパウロで行われた記念式典には、皇族として初めて来伯した三笠宮崇仁殿下同妃殿下が出席された。移民50年祭は、初期移民の嘗めた辛酸、第二次世界大戦を挟んだ重苦しい排日の空気と不当な抑圧、戦後日系社会に起きた混乱に区切りを付け、以後の日系社会の方向を打ち出したところに大きな意義があった¹²、とされている。

また、同氏の社会貢献活動はその後も継続して行われ、1960年には日本政府の在外邦人数等調査にも協力して、在ブラジル日本大使より感謝状を贈呈されている¹³。

同氏が参加した大毎移民団のメンバーは各地で活動しており、1964年には到着40周年を記念して、毎日新聞社より感謝状を授与されている¹⁴。

なお、同氏はアララクワラ地方における日系人指導者として、サンパウロ日本文化協会の活動にも協力しており、日系コロニア発展の諸計画を実現する基金設定運動が実施された際、基金委員会常任委員を委嘱されている¹⁵。

このような同氏の活動はブラジル社会にも認められることとなり、サンパウロ州教育局公認のブラジル紋章栄典協会は、同氏に対して「ジョゼ・ボニファシオ・アンドラーダ・エ・シルバ文化・市民功労章」を贈っている¹⁶。なお、同氏が1955年以降、終の棲家として定めたフェルナンドポリス市議会も同氏の社会貢献を称えて「名誉市民」の称号を授与している¹⁷。[写真5]



そして、1967年5月には皇太子殿下同妃殿下が初めての訪伯をされ、ブラジリア、リオデジャネイロ、サンパウロ等の各地を訪問された。5月25日のパカエンブー競技場には空前絶後といわれた8万人が参集した。その際、黒田氏は皇太子殿下同妃殿下歓迎委員会における沿道歓迎委員に委嘱されている¹⁸。

また、サンパウロ日本文化協会は、当時文協ビルを建設中であったが、同ビル内の大講堂を皇太子殿下同妃殿下ご来伯記念大講堂と命名することにして、新たに建設委員会を設置したが、黒田氏は同委員会の財務委員に任命されている¹⁹。なお、同年9月7日の第13回総会において、同協会は全国的な組織となるべく、ブラジル日本文化協会と改名した²⁰。

黒田氏はその後も、移民の子女で知的障害を有する子どもたちを支援する団体²¹にも



【写真6】 熊本県知事から授与された功労章



〔写真7〕勲5等瑞宝章

黒田氏へのオマージュは、天皇陛下からの死後叙勲をもって最高に達したが、フェルナンドポリス文化体育協会は、1982年に創立25周年を迎えるにあたり、創立者兼元会長である黒田氏に対して、感謝状を贈り、その功績を称えている。

黒田氏は「肥後もっこす」という熊本県人に対する評価を地でいくような方であったと思う。同胞のみならず、非日系人²⁴に対しても損得を度外視した活動を行ったのみならず、頑固さ、というべきか、ひとたび信じたことに対しては、前後の見境なしに没頭された。もっとも、同氏が社会貢献に傾注できたのは、家族全員の支援によるものが大きい。同氏が亡くなってから、さらに20年ほど存命され、93歳の長寿を全うされたタカ夫人の存在は大きかった、とのことである。同家では三度三度の食卓に常に大勢の招待客、食客がいて、賑やかだったそうであるが、彼女は嫌な顔も見せず、グチも言わず、他人のために尽くす夫に従い、11人の子を生んで育てた。私は黒田氏の功績を評価しつつも、タカ夫人の内助の功こそ偉大ではなかったかと考える次第である。

註

- ¹ 日本と異なり、当時のブラジルの鉄道では等級は1等車と2等車のみであった。また、鉄道による旅客輸送は1960年代までは頻繁に行われていたが、1970年代以降は徐々にバスに代替されていった。現在の鉄道は貨物と観光用のみが残存しており、かつて移住者が乗り降りしていた内陸部の駅の多くは市街地に近いところにあるため、博物館や店舗に様変わりしている。
- ² 大毎移民とは東宮殿下（後の昭和天皇）御成婚記念事業として、大阪毎日新聞社が全国各府県から選抜し、渡航費を負担してブラジルへ送り出した60家族267名の移民団のことであり、サンパウロ州各地のコーヒー園を中心に配耕された。詳細は和田伝五郎「大毎移民を訪ねてブラジル奥地を視る（1～4）」大阪毎日新聞1935.8.7-8.10、神戸大学附属図書館蔵参照。なお、半田知雄編著『ブラジル日本移民・日系社会史年表』サンパウロ人文科学研究所、1996年、52ページ参照。
- ³ 参考のため、ここに全文を転記する。

「感謝状

天の理は地の利に不如地の利は人の和に不如實に我がアグワテミー植民地こそ天地人一体渾一融合の理想境たり之偏に植民者一統精勵黽勉の結果とは虽も一に指導者の不撓不屈献身的努力の賜たる亦論を不俟

黒田會長は昭和十四年絶体的衆望を荷ひ會長の任に就かるや連綿として五星霜の久しきに亘り終始一貫滅私没我の大精神を以て社稷の興隆繁榮に盡碎せられ其偉大なる功績は今や茲に枚舉するに遑あらず惟ふに君の人となる平圓轉活達大洋の如く付度し難き包容の氣宇に富み和光同塵常に公益を優先し清濁合せ飲むの慨篤く一日の親交も既に百年の温情を感じ漫ろ君の膝下に徳を慕ふの風ありそは単に同胞間に於てのみならず日伯否國際を超越して一度君に親炙する者の等しく感知する処なり今や世界の情勢は古今未曾有の大渦中にあり鼎の沸くが如き搔擾は當伯國へも席卷し來りて戦々競々たるの秋我植民地に於てのみ今だ嘗って一度の不祥事もなく何等不安を感じる事なく營々として業務に精勵さるるは之全し君の徳望の然らしむる処にて吾等只管感謝感激の情に不堪君は今や當植民地の完成を了り第二次的計劃の下に当地を去らんとす吾人は恰も闇夜に燈火を失ひたる如く轉た寂寥の感に不堪然りと虽も『熟したる柿の實は落ちる』の譬へ吾人亦君の哺育を離れ獨立自營の機運に到達したり宜敷君の壮行を驢して名實俱に君の名を辱しめざらむ事を誓約し聊か記念品を贈呈して謝辞となす

昭和十八年七月三日

アグワテミー日本人會 黒田又蔵殿」

- 4 当時の日本は軍民20万を越える犠牲者を出した沖縄戦の末期で、ブラジルの参戦はまったく注目されず、それはブラジルにおいて一般社会にも、日系社会においても同様であった。しかし、日本語による情報が得られなかった日系社会がそれから約3か月後の無条件降伏を信ぜず、信念派と称する勝ち組が特別行動隊を組織し、単独または複数で、認識派の負け組指導者格の23名を殺害、百数十名を負傷させた事件は、移民史最大の不幸事として知られている。
- 5 この間の事情は、石射猪太郎著『外交官の一生』中央公論新社、1982年版による。
- 6 当時のブラジル日系社会における風評によれば、米国においてパラシュートの生産原料となるから、というものであった。確かに日本においては、パラシュートは絹で作られていたようであるが、米国では既にナイロンが実用化されており、絹を使用する必要はなかったはずである。よしんば絹が使われていたとしても、当時のブラジルにおける絹の総生産すべてをパラシュートの生産にあてたとしても、微々たるものであったはずである。同じことは、ハッカが爆薬の原料に使用されることから、ハッカの生産が利的行為とされたことと同一原因であるように思える。米国の工業生産力からみて、ブラジル産の絹やハッカが利的行為を構成したとは考えにくい。絹糸やハッカが輸出品であり、生産農家にとって貴重な収入源であったことも事実である。戦時中に養蚕小屋やハッカの倉庫が焼き討ちにあったのは、利的行為が許容できない、というものであったが、私見ではそれは表向きの理由であって、実際には収入の豊かな養蚕やハッカの生産農家に対する嫉妬心もあったのではないかと思えるのである。
- 7 トレド・ピザ氏といえば、1895年11月5日にパリで調印された日本ブラジル修好通商航海条約のブラジル側署名者もトレド・ピザ公使であり、同家はコーヒー農園主として、サンパウロ州の名門であることから、親族ではないかと思われる。
- 8 聖市400年祭典協力が黒田又蔵氏宛1953年3月3日付で発行した委嘱証書。なお、祭典終了後、その際に結集した力を日系社会のために役立てるために、協力が発展解散してブラジル日本文化協会（現ブラジル日本文化福祉協会）となったことはあまねく知られている。
- 9 1955年4月14日付熊本海外協会総裁細川護立、会長熊本県知事桜井三郎、理事長衆議院議員石坂繁

連名の署名捺印のある感謝状。

¹⁰ 1955年11月3日付で明治神宮復興奉賛会総裁鷹司信輔署名捺印委嘱状。なお、1954年9月14日付本派本願寺南米開教総長渡邊静波署名捺印感謝状、1970年9月20日付アラサツバ南米本願寺仏教会会長署名捺印感謝状、1971年10月16日付本派本願寺南米教団伯国別院総長輪番北島隆啓署名捺印感謝状。

¹¹ 外務大臣藤山愛一郎署名捺印表彰状。

¹² 前掲『ブラジル日本移民・日系社会史年表』130ページ参照。

¹³ 1961年10月1日付特命全権大使田付景一署名捺印感謝状。

¹⁴ 1964年5月、毎日新聞社社長上田常隆署名捺印感謝状。

¹⁵ 1966年4月11日付サンパウロ日本文化協会会長宮坂国人署名捺印委嘱状。

¹⁶ Medalha Cultural e Cívica José Bonifácio de Andrada e Silva, o Patriarca, da Sociedade Brasileira de Heráldica e Medalhística, datada de 23 de junho de 1966.

¹⁷ フェルナンドポリス市議会は、1968年3月23日付で黒田又蔵氏に名誉市民の称号を授与。

¹⁸ 1967年4月8日付、歓迎委員会委員長宮坂国人署名捺印委嘱状。

¹⁹ 1968年6月18日付、皇太子殿下ご来伯記念大講堂建設委員会宮坂国人委員長署名捺印委嘱状。

²⁰ 前掲『ブラジル日本移民・日系社会史年表』166ページ参照。

²¹ パウリスト子ども療養慈善協会会長木原暢署名捺印感謝状。

²² 熊本県知事表彰状

²³ 黒田氏の命日は、ブラジル時間で1975年1月25日であるが、内閣総理大臣三木武夫の署名捺印がある勲記には時差の関係で1月26日付となっている。

²⁴ 遺族によれば、ハンセン病患者に対しても援助の手を差し伸べていたとのことである。

本稿脱稿後、サンパウロ日伯援護協会会長菊地義治氏（元岩手県人会長）のご厚意により、1968年の千田正・岩手県知事ブラジル訪問を報じた、ブラジル岩手県人会編『ブラジル岩手県人会会誌』創刊号、(刊行年)のコピーを入手することができた。なお、黒田家ご遺族からは同じく千田知事のフェルナンドポリス市訪問を報じた、1968年11月1日発行のFERNANDÓPOLIS JORNALを寄贈していただいた。記して感謝の意を表明する。

Path of a Japanese immigrant to Brazil — Mr. Matazo Kuroda's case

Masato Ninomiya (University of São Paulo)

I met Mr. Matazo Kuroda in 1968 during my undergraduate study at University of São Paulo. When I visited Fernandópolis in the northwestern part of São Paulo state, I was asked on a very short notice to interpret for Mr. Tadashi Chida, the governor of Iwate prefecture at that time. After having fulfilled this important role, I was invited to join an after party together with others at Mr. Kuroda's house who was the president of Japanese emigrants association. Several months later, I was awarded for contributing to friendship exchange between Fernandópolis and Iwate prefecture. I met Mr. Kuroda on only these two occasions.

Mr. Kuroda was born in Kumamoto prefecture on November 7, 1900. He immigrated to Brazil on 'S.S.Kanada-maru' in June 1924. He showed an exceptional leadership and contributed to improving the status of the Japanese community living in Brazil. He had received numerous honors including the Order of the Sacred Treasure, Gold and Silver Rays from the Emperor of Japan on the day of his demise which became the highest award he received.

This paper traces Mr. Kuroda's path and great achievements as an immigrant through numerous letters of appreciation and certificates of commendation kept by his family.

〈論 文〉

ハワイ日系人の正月風景にみる移民文化

— 年越しの儀式の変容と継承 —

島田法子（日本女子大学・名誉教授）

＜目 次＞

はじめに

1. 正月用品の買物
2. 餅つき
3. 除夜の鐘
4. 初詣
5. 新年のお祝い

おわりに

キーワード：ハワイ日本人移民、民族アイデンティティ、年越しの儀式、正月、餅つき、初詣

はじめに

戦前のハワイでは、日本人移民が最も大きな民族集団であった。サトウキビ・プランテーションでも、ホノルル等の都市部でも、日本人は抑圧されることなく日本文化を謳歌し、日本人社会では多数の日本人学校、仏教寺院、神道神社、邦字新聞社、商店等が繁栄を誇った。日本人移民は日本の祝祭日を守り、正月も、「日本人としての正月」を大々的に祝った。例えば、邦字新聞『日布時事』の1910年元旦の「とやら」という雑記欄には、下記のような日本人町の記述がある。

日本人町では各商家何れも門松を立てて店頭を飾っているとやら
 此の辺りをさまよへば一足飛びに故郷へ帰った心地がするとやら
 日本人町は年と共に愈々日本化して行くとやら
 同化論者や米化論者が百日の説法も何の効果もないらしいとやら
 日本人には日本人の儀式がある外人の真似をするは及ばぬとやら（強調筆者）

この記者が言うように、正月はまさに「日本人の儀式」であった。日本人社会の指導者の一人であった古屋翠溪は、「昔のハワイの正月」というエッセイの中で、1910年頃の正月風景を回想し、新しい年を迎える「日本人の儀式」を次のように描いている（1968：263-264）。「日本人の正月の行事といえば、まず餅つきからはじまる。耕地では石か木で作った小さいウスがキャンプ中に一つか二つしかなかったが、そこへ集まって共同で餅つきをした。臼がない所では醤油だるを臼の代わりにするのであった。…日本人の家では皆門松も樹て[マ] 又日の丸の国旗を掲げた。日本人学校…では祝賀式が挙行され、父兄が子供と一緒にオルガンに合わせて、唱歌を声高らかに歌ったりした。」と。移民たちは皆で餅をつき、門松をたて、日の丸を掲げ、祝賀式を挙げ、「日本人の儀式」に参加し、一体感を味わった。横山青松の句集『アイカネ』（1960：87-88）の中には、「門松や問はでもあるじ日本人」や「門松や蔗畑中の一軒家」の句がある¹。サトウキビ畑の一軒家に住む日本人労働者でも

門松をたて、それを見た作者が日本人としての共感を覚えていることが読み取れる。

このような状況が一変したのは真珠湾奇襲に始まる日米戦争によるもので、戦中は、日本人移民は敵性外国人となり、日本人指導者たちは逮捕・抑留され、日本語学校や、仏教寺院、神道神社は閉鎖あるいは解体された。公的な場での日本語の使用の制限や 10 人以上の集会の禁止等、日本文化が抑圧されたため、戦前のように「日本人の儀式」として新年を迎えることはできなかった。しかし戦後まもなく正月祝いは復活した。初詣や餅つき等の日本的な正月行事も、門松や鏡餅などの正月のアイコンも日本人社会に再びあふれた²。

では、戦後から 70 年を経た現在、ハワイの日本人・日系人社会では、新年はどのように迎えられているのだろうか。ますます多文化化したハワイの社会状況の変化や、一世・二世世代から三世・四世へという人口構成の変化がある中で、日系人の年越しの儀式はどのように継承されているだろうか、あるいはどのようにハワイ化されているのだろうか。戦争花嫁に始まる戦後の新一世たちは、その継承にどのように関わっているのだろうか。

この小論は、2013 年の暮から 2014 年の正月にかけて、ハワイの日系人がどのように新年を迎えるかを、ホノルルで参与観察して収集した資料に基づいた考察である。年越しの「儀式」をキーワードとして、日本の行事文化がどのように継承されているか、またどのような文化変容が見られるかを考えたい。また、ホノルルで出会った新一世 41 名、二世・三世 12 名に正月に関するアンケート調査に協力してもらったので、その結果にも考察を加えたい。回答数が少なく、必ずしも絶対的な傾向を示すとは言えないが、興味深い結果が幾つかあった。

ハワイにおける日本人・日系人の正月に着目した研究はなされていない。「日本人の儀式」としての正月の研究は、ハワイの日系文化、日系アイデンティティ継承のケーススタディとして興味深いテーマであると言えよう。戦前から継承されてきた正月という「日本人の儀式」は、戦後ハワイに移住してきた新一世のそれと重なりあい、ハワイ社会に適応して変容し、現在に至っている。以下、最初に年末の正月準備について考察し、次に大晦日の除夜の鐘について、さらに大晦日から元旦にかけての初詣とその歴史的背景について、そして最後に新年会について考察したい。

1. 正月用品の買物

日本人・日系人にとって、新年を迎えるにあたって、正月用品の買物は大切な儀式である。他の同胞と同じ目的で同じものを買いに出かけることによって、正月を迎える準備という共通の日本の習慣を守り、民族的アイデンティティの高揚をおぼえる。ハワイの日本人・日系人の年末の買物事情を知るために、ホノルル市内の各種の年末セール広告を資料として集めてみた。広告を通して、彼らが正月を迎える準備のためにどんな行動をするのかを垣間見ることができる。集めた広告は、アメリカ本土資本のスーパー（Safeway）、日系人が創設したハワイ資本のスーパー（Times）、そして主として日本人・日系人を顧客にした 3 つのスーパー（Don Quijote, Marukai Wholesale Mart, Nijiya Market）の 5 種の広告である。21 世紀の現在でもハワイの日本人・日系人人口は 24 パーセントを越え、日本人・日系人に顧客を特化したスーパーや商店が人気を得ている。以下、年末の商店広告の違いに着目し、現代の日本人・日系人の正月準備を考察してみよう。

1. Safeway, “Real Big Deals”

12 月 26 日から 1 月 1 日対象の広告。非日系のスーパーらしく、日系人向けの正月用品の広告はみられない。

2. Times Supermarkets, “Happy New Year!”

12月26日から1月1日対象の広告。日系人が多く利用するスーパーであり、日系の正月用品のセール広告のページがある。

3. Nijiya Market, “December Sale, No.2”

12月13日から16日対象の4ページの広告。お節の予約の広告が目玉である。

4. Marukai Wholesale Mart, “Irasshai”

12月3日から31日対象の44ページもの大型広告。第1面に“Preparing for the New Year”の記事が掲載され、日本の正月準備やお節料理を紹介している。この記事を読まずに、準備のために行動に移るよう、続く広告のページでは日系の正月用品の売り出しを伝えている。幅広い商品を扱っており、餅つき用の石臼までも1,999ドルで売っている。

5. Don Quijote, “Happy Holidays”

12頁からなる12月22日～1月1日までの売り出し広告。第1面全面で日系の正月用品を広告している。



お正月セール

これらの広告から読み取れることは、ハワイではスーパーも民族化されていることであろう。日本人・日系人を顧客とするスーパーでは、年末に大々的な売り出しを行ない、正月準備に参加するように人々を促している。著者は、年末に上記5店のうち、日本人・日系人を主たる顧客とする後者3つのマーケットを訪ね、調査・観察した。3店とも日本からの輸入品を扱っている。

(1) ニジヤ・マーケット

ここは日本人・日系人に人気のある小型のマーケットで、カリフォルニアからハワイに進出したものである。あまり広いとは言えない店内には日本から輸入された食品が所狭しと並べられている。ホノルルには、ユニヴァーシティ街の店と、アラモアナ・センター横の店と2軒ある。日本のお正月用品としては、もち米、日本酒、そば、そばつゆ、きなこ、あんこ、きりもち、お年玉袋、鏡餅、祝箸、なると、かまぼこ、伊達巻があり、調理済みのお節料理としては、黒豆、田づくり、きんとん、卵焼き、こぶまき等が並んでいた。日本のお正月のアイコンが溢れていた。比較的落ち着いた雰囲気、二世とみられる高齢の女性たちの買物姿も見られた。

(2) マルカイ

ここは会員制のハワイで一番大きな日本人・日系人向けのスーパーで、食料品や雑貨を日本から輸入・販売しており、暮には正月用品一色になり、ほとんど何でも手に入る。お節料理の食材が豊富である。調理済みのお節料理も日本のスーパーに負けないくらいに品揃えが抜群によい。ニジヤ・マーケットよりも規模が大きく、広々とした店内は活気にあふれ、天井からも大売出しのビラが沢山吊り下げられ、顧客層は多様で、買い物客でごった返していた。広い駐車場は満杯で駐車するまでにかなり待たされた。

(3) 日本資本のドン・キホーテ

ここは日本資本のスーパーで、日用品、衣類、鮮魚コーナー、精肉コーナー、ベーカリー、薬局等の他、日本の食品部門がある。この店は、日本人・日系人だけでなく他民族の人々にも人気がある。ここでも相当大がかりに日本の正月用品の販売をする。門松、鏡餅、縁起物の絵、お節料理の食材（レ

ンコン、ゴボウ、サトイモ、ダイダイ）などが山積みされていた。

上記スーパーの他に、アラモアナ・センターには日本料理を扱うお惣菜店や、白木屋という多様な日本の惣菜店をテナントにかかえる店もある。惣菜店でも年末年始の売れ筋商品は、煮しめ、きんぴらごぼう、なます、昆布巻ということだ。

興味深いのは、多文化社会ハワイでは、各民族の新年儀式がそれぞれに守られていることである。多民族の儀式を相互に尊重し合う風土がある。日系社会の正月準備も昔ながらに守られている。同時に、お正月用品のなかには、ハワイ化しているものも見られる。例えば、門松の習慣は継承されており、今も日系社会の正月のアイコンであるが、日本のように門や玄関先に松を飾ることは少なくなっており、スーパーでは小さな卓上の松飾りが山のように売られている。これはテーブルや棚の上に飾られる。また「カミバナ」とよばれる大きな緑の葉が売られている。これは家庭の神棚に飾るもので、「榊」の代用品という。また、日本のスーパーでは見かけないものとして、鯛、七福神、富士・鷹・なすび等の縁起物が図柄の「さいわい紙」とよばれる大きな紙絵が売られている。初夢のために枕の下に敷くという風習が今もハワイで広く残っているようだ。

2. 餅つき

デ・フランシスが1973年に出版した『ハワイに見られる日本文化』は、当時すでに家庭での餅つきが珍しくなっていることを記している（DeFrancis：20）。しかし現在でも自宅で餅つきをするという習慣は残っているし、ハワイ社会では餅つきが日系人の正月のシンボルとして知られており、正月の風物詩として英字新聞にもしばしば取り上げられる。今回も、『ホノルル・スター・アドバタイザー』紙の1月1日号には「餅つきの伝統は家族を結ぶ―ウエジョウ家では古いも若きも正月の餅をつく」という記事が全面に掲載され、ウエジョウ家の恒例の儀式としての餅つき風景が数枚のカラー写真付きで紹介されている（Gee, “Mochi Tradition”）。また、シェラトン・プリンセス・カイウラニ・ホテルの餅つきのように、観光業界では客寄せに餅つきをするところもある。ここでは暮から正月にかけての餅つきの情景をいくつか紹介しよう。毎年繰り返される儀式となっていることが見て取れよう。

（1）関西クラブ

12月30日に天理教本部のソーシャルホールで開催された関西クラブの餅つきに参加させていただいた。関西クラブは、関西出身の新一世の友好団体で、餅つきはこのクラブの大切な年中行事である。天理教本部での餅つきは、午前中は本部と各地域の天理教教会のために、朝7時30分から、全部で237ポンド（約108キロ）の餅つきが行われた。午後は関西クラブに餅つき会場が提供され、65ポンド（約29キロ）の餅がつかれた³。



餅つき石臼

関西クラブのメンバー約50人が参加していた。天理教の若者2、3人が、2台の電動餅つき器ではぼつきあげて、そのあと石臼に移して、関西クラブのメンバーが杵でついて仕上げるという趣向になっていた。大木の少ないハワイでは木製の臼は入手困難である。火山の島らしく、火山岩でできた小型の石臼を使う。多くの子どもたちが嬉しそうに参加し、この伝統を受け継いでいる。合計11杯の臼で、沢山の丸餅ができた。参加者は、あんこ、きなこ、大根おろし、納豆、のり、鰹節など

の具をのせて、出来立ての餅を食べ、残りを関西クラブのメンバーたちがお正月用に買って帰る。最後に天理教に謝礼を払い、ソーシャルホールの清掃をして、終了となる。これは新一世たちの餅つき風景であった。

(2) マキキ聖城キリスト教会

ハワイでは、餅つきが年末ではなく正月の祝の一部となっている場合もある。マキキ聖城キリスト教会では、元旦の新年会で餅つきが行われる。早朝の7時から海辺で初日の出を見ながら新年礼拝を終えた後、教会に戻った信徒たちは、すぐに新年会の用意を始める。餅つきは10時から始まり、石臼で12回ついて、250人分の雑煮を作る。雑煮には、すまし汁に餅と蒲鉾、水菜等が入っていた。準備の主体は新一世が中心であるが、参加する教会員は、二世・三世も多い。また、元旦の新年会は恒例の行事としてコミュニティにも開かれており、教会員だけでなく、近隣の日系人にも雑煮が振る舞われる。正月といえは餅つきと雑煮、という儀式が、ここでは世代を超えて継承されている。

(3) ハワイ日本文化センター

日系人全体の歴史や文化、民族アイデンティティを伝承するために設立されたハワイ日系文化センターでは、毎年、正月祝にオハナフェスティバルが開催され、その中で餅つき大会も開催される。センターの運営主体は三世以降の英語世代である。餅つきは天理教が提供している。文化センターでは、正月が日本文化を若い世代に伝承する良い機会であると捉えられており、餅つきの他、縁日のようにフード・ブースが設置され、日本の太鼓や、踊り、音楽、そして着物の着付け等が提供され、若い日系世代が日系文化を体験ができる機会となるように工夫されている。

3. 除夜の鐘

除夜の鐘は、日本では大晦日のテレビが全国の除夜の鐘の風景を中継することが恒例となっているほど国民総参加の社会的儀式となっているが、ハワイ日系移民の間ではどうであろうか。ホノルルの街に寺院の鐘の音が響き渡ることがあるのだろうか。

ホノルルにはほとんどの宗派の仏教寺院があるが、ハワイの仏教は長い歴史を通してキリスト教と競合し、ハワイ社会に適応し、その過程で様々なハワイ化していった⁴。例えば、毎日曜日の朝には「礼拝」を捧げて「レヴァレンド（僧侶）」（キリスト教の牧師の称号と同じ）の説教を聞き、パイプオルガンに合わせて讃仏歌を歌うようになった。

年末年始の活動にもハワイ化された側面がみられる。例えば、大晦日にも信徒は寺院に集まり、除夜会という「礼拝」を持つ。そして元旦にはまた「礼拝」を持つ。またホノルルでは日本式に除夜の鐘を撞く寺院もあるが、日本のような大型の鐘や鐘楼はなく、日本のように108撞くということはないようだ。それでも、ハワイ化した除夜という儀式の中に、日系文化の継承が見られる。

(1) ハワイ曹洞宗別院

除夜の鐘を撞く予定のあるハワイ曹洞宗別院を年末に訪ねて話をうかがった。この寺院では大晦日の11時45分位から信徒が集り鐘を撞く。この寺の鐘は比較的小さい。鐘の数は108を数えることはしないで、およそそのくらいで終わるという。12時からはホノルル市内全域が花火と爆竹の騒音でうるさくなるので、12時15分頃に礼拝をして、12時半には終了となる。

(2) ハワイ本派本願寺別院

著者は、新一世の信徒の女性に案内され、大晦日の夜11時半からのハワイ本派本願寺別院の除夜会に参加することができた。礼拝堂には150人位の人々が礼拝に集っていた。アメリカでは大晦日は家でパーティーをする人が多いのに、除夜会にこれだけの人が集まっており、この儀式のもつ重

みを感じさせた。見渡してみると、新一世よりも三世・四世の姿が多いように見受けられた。

除夜会がはじまると、まず英語の説教、次いで日本語の説教があり、パイプオルガンの伴奏で英語で念仏を唱え、最後に「蛍の光」を、まず英語次いで日本語で歌って終了となった。日本語の説教の中で、除夜の鐘を撞く意味について、この宗派の解釈が述べられ、いわゆる鐘を撞くことによって108の煩惱を払うという意味あいではなく、今年の感謝すべきことを思い起こし、感謝を表わす心で鐘を撞くという説明があった。

この別院にはホノルルでは比較的大きな鐘がある。会堂の横に釣られているその鐘を、参加者が行列を作って1回ずつ鳴らした。108を超えていたと思うが、だれも数を数えなかった。鐘は日本のように木の丸太を横に引いて撞くほど大きくなく、小槌で叩く撞き方だった。音も日本の鐘のように低い音が余韻を残して響くのではなく、カーンと明るく短く鳴る。特に作法はなく、次々に人々が交替で一回ずつ、カーン、カーンと鳴らす。鐘のすぐ横には別院の僧侶たちが横一列にならび、鐘を撞き終わった人々と次々と握手をして、終了となった。

その後、階下のソーシャルホールで、年越しそば、黒豆、せんべい、アイスクリーム、日本酒の接待があった。興味深かったのは、日本そばだけでなく、サイミンというハワイ独特の麺（かつて日本人移民労働者が愛したラーメンに似た麺）も用意されていたことである。ハワイ日系人には、日本そばよりサイミンのほうが似合うのかもしれない。

夜中の1時過ぎに帰宅したが、市の規制で爆竹を鳴らす人が減り、静かな大晦日の夜であった。除夜の行事はハワイ化された側面が大きく、また除夜会と除夜の鐘に参加する日本人・日系人の数は限られているが、それでも日系社会では、一連の正月行事の一つとしてよく知られた行事であり、日系としての民族アイデンティティの継承と深くかかわっていると言えるだろう。

4. 初詣

戦前のハワイ諸島には、神社が60社あり、初詣は日本人移民にとって盛大な年越しの儀式だった。今は、ホノルルに4社（ハワイ出雲大社と、ハワイ大神宮、ハワイ金刀比羅神社・太宰府天満宮、ハワイ石鎚神社）、マウイ島に2社（マウイ神社とマラエア恵比寿金刀比羅神社）、そしてハワイで一番古いハワイ島のヒロ大神宮の合計7社がある。神主が常駐していない神社もあり、マウイ神社の有根宮司は2014年当時すでに100歳で後継者がいないので、今後も神社の数は減る可能性がある。しかし現在も、初詣はハワイ社会で広く知られた日系の年中行事である。著者が調査した2014年も、『ホノルル・スター・アドバタイザー』紙の1月2日号には「新年、新しい始まり」という記事が全面に掲載され、ハワイ大神宮と、ハワイ金刀比羅神社・太宰府天満宮における初詣の風景が、カラー写真8枚で掲載されていた（“New Year, New Beginnings”）。

著者は、元旦にハワイ出雲大社とハワイ大神宮、2日にハワイ金刀比羅神社・太宰府天満宮、ハワイ石鎚神社を訪問した。ここではハワイ出雲大社とハワイ大神宮について考察したい。尚、ハワイ出雲大社の神主天野大也氏と、ハワイ大神宮の神主岡田章宏氏には、暮のうちに前もってインタビューさせていただいた⁵。



初詣（ハワイ出雲大社）

(1) ハワイ出雲大社

ハワイ出雲大社は、ホノルルのダウンタウンに近く、多くの初詣参拝者を集めることで知られている。神主の天野大也氏のインタビューから、初詣の概要を紹介しよう。

「正月の初もうでは夜中の12時から始まる。パーティーを終わった人たちが12時半から3時の間に初詣に出かけて来るので、行列ができる。その後、人が減って、朝の6時頃からまた人が増えてくる。8時半頃にはまた行列ができ始める。昼頃には行列が川沿いに延びていき、それは夕方5時まで続く。

「昔はハワイの日系人がほとんどだったが、今は日本人観光客も来るようになった。5年ほど前に、テレビのバラエティ番組で取り上げられてから、観光ガイドブックにも掲載されるようになり、急に観光客が来るようになった。余り観光客が増えて自分一人では対応しきれなくなり、島根の出雲大社から神主がハワイに来てくれて、二人体制になった。

「お守りの種類は多く、30種くらいある。日本の出雲大社のお守り札と、ハワイ出雲大社のお守り札と、両方を扱っている。絵馬、破魔矢もある。ハワイ出雲大社のお守りは、求められるままに種類が増えて行った。縁結び、安産、厄除け、交通安全などの定番の他、スポーツ、マラソン、ペットのお守りもある。車に貼るステッカーもあり、いずれも一つ8ドル。元旦には初詣の参拝者がお守りを買うのでとても混雑する。境内に2か所の臨時お守り頒布所を設け、ボランティアの人たちが売ることになっている。

「初詣の人出は三が日で、10,000～15,000人を予想している。元旦には10,000人を越える。ハワイでは二日目は仕事が始まるので2,000～3,000人程度となる。

「対処するために、元旦には延70人～80人のボランティアが働く。今もボランティアを募集中で、その貼り紙がしてある。信徒のほか、学生や一時滞在者が応募してくれる。ボランティアの仕事は、参拝者一人一人へのお祓い、お守りの頒布、お神酒の配布、古いお守りの受付と焼却、お金の管理、スタッフの食事の用意等。[インタビューをしている同じ部屋で、ちょうどボランティアの女性がお守りの作成をしていた。この女性は冬の間3か月だけハワイに滞在する一時滞在者で、他にすることがないのでボランティアに来ているとのこと。] 交通整理や治安のために、非番の警察官をアルバイトとして30人ほど雇う。結構なお金を小切手で払うことになっている。

「元旦にはお神酒を参拝者にふるまう。午後2時から、雅楽の演奏をする。ハワイ大学の民俗学者で雅楽を教えている先生と雅楽のクラスの学生、そして昔から演奏しているメンバーと神主(天野氏)が演奏する。」

天野氏は、ハワイ出雲大社の歴史にも触れ、「戦争中は神主がアメリカ本土に抑留され、建物は閉鎖されていたが、1945年末には神主は戻り、別の場所で活動を開始し、1946年の初詣も行った。倉庫を改修して仮の神社を作った⁶。その後現在地に社を再建した。」と述べ、戦争中の数年をのぞいて、初詣は「日本人の儀式」として、移民の歴史とともにあることを指摘した。「日本人は今も昔も、1年の区切りとして初詣を大切に思う習慣があると思う。」と。

この神社での初詣は、日本のテレビ番組が取り上げたことが契機となって、昔の賑わいを取り戻したようだ。著者は元旦の朝8時半、初詣の様子を見に行くと、参拝者はかなり来ていたが、行列はまだ境内内におさまっていた。観光ルートになっているらしく、ちょうど日本人観光客がバスで乗り付けてきた。周辺の道路には警察官が数名立ち、参拝客の駐車場の整理をしていた。境内では、録音した音声で、出雲大社の紹介が流れていた。鈴をならし、お祓いを受け、お札とお守りを買うという流れがスムーズに動いていた。多くのボランティアの日本人と日系人が混ざり合い、初詣の儀式的運行のために協力して働く様子がみられた。

(2) ハワイ大神宮

ハワイ大神宮は、ホノルル中心部から離れたバリ・ハイウェイ添いの少し不便な場所にある。同じく暮のうちに神主の岡田章宏氏にインタビューしたので、まずその概要を紹介しよう。岡田氏は、宗教としての初詣の拝礼儀式や初詣の様子を語ってくださった。

「大神宮の初詣には、三が日で約 8,000 人が来る。ホノルルのビジネス関係の日本人、日系三世、四世、そしてアメリカ人（アジア系もヨーロッパ系も）も初詣に来る。夜中の 12 時に太鼓をならして初詣を開始する。その前の 11 時 30 分ころから境内には人が集まり列を作るが、12 時前に参拝することをせず、太鼓がなるのを待っている。3 時頃までは人出が多い。その後減って、神主は仮眠をとる。明けがたからまた増えてきて、列が長くなり、バリ・ハイウェイまで届く。誰もが 1 つしかない神社の鈴を鳴らしたがるのが行列のできる原因の一つとなっている。

「神主がお祓いをする。元日には、信徒の一人に神主の助手をしてもらって、お祓いの役目をしてもらう。そのあと、左右の二か所の屋根のあるブースでお守りを受けて帰る。各種お守りがある。25 セントのおみくじを買う人も多い。凶と出た時は、利き手でない方の手で、凶を吉に転じるように、神社の境内の木に結びつけて帰る。

「ボランティアが 30 人くらい助けに来る。夜中に始まり、夕方 5 時まで、手分けして手伝ってくれる。ポリスも数人雇う。ポリスは夜 11 時ころから、順番に来てくれて、交通整理をしてくれる。駐車場が狭いので、隣のヌアヌ公園、ヌアヌ小学校と、ボーイスカウト本部の駐車場を使わせてもらう。初詣は 8,000 人だが、参拝者は年間 10,000 人くらいで、普段は少ない。ハワイ出雲大社は日本のテレビに取り上げられて参拝者が急増したが、他の神社には恩恵が及んでいない。」

岡田氏はハワイ大神宮の苦難の歴史と現状についても語ってくださった。

「1903 年に、高知県で神明教の神主であった川崎利太郎が、神社を処分してすべてを持ってハワイに移民して、ホノルルに大神宮を開いた。神道を日本人移民のあいだで布教しようという意図と、日本人意識を守るためという目的があったと思う。伊勢神宮が日本人の心であるように、ハワイ大神宮をハワイ移民の心にしたかったのだと思う。

「この神社は天照大御神を祀っているが、[ハワイに定着するために] ハワイの神社として、ハワイを統一したカメハメハ大王とアメリカ初代大統領のジョージ・ワシントンも祀るようになった。

「二代目の神主は息子の川崎嘉添であったが、川崎親子は、太平洋戦争中はアメリカ本土の抑留所に収容された。1 年後に二人は霊璽をもって日本に帰還した。留守中の神社は、信者の中の神主の資格のある人が面倒を見て来た。戦後、川崎嘉添が霊璽を持ってハワイに戻り、神主となった。ただし神社の建物は没収されてしまって無かったので、一般の家で活動を開始した。1956 年に裁判に勝って、没収された土地・建物に相当する賠償金を受け、現在の土地・建物を買って再建した。

「信者は高齢化している。大正生まれはほとんどいないが、大正 14 年生まれという人がいる。その 93 歳の信者さんは毎月の月次祭にも来る。神社の手伝いには若い方も来てくれるが、信心は伝わらない。」

著者は、元旦にハワイ大神宮の初詣も取材した。この神社には日本人観光客の姿はみかけなかった。参拝者は出雲大社ほど多くなかったが、こちらもかなりの人出があった。警察官が 2 人、駐車の世話をしていた。日系人の参拝者は、拝礼の儀式をよく知っており、そのルールに従って参拝する様子がうかがえた。しかし、鳥居をくぐったところに、笹の葉で直径 2 メートルくらいの大きな輪（茅の輪）が作られており、そこを左・右・左と 3 度くぐると、清められるということだったが、それを知っている人は少ないようで、参拝者たちはただ通り過ぎていた。おみくじ箱に 25 セント硬貨を入れると、下からおみくじが出て来る。近くの木々にはおみくじが沢山結び付けられていた。

翌2日に、著者はホノルルの残りの2社、ハワイ金刀比羅神社・太宰府天満宮とハワイ石鎚神社を取材した。そして初詣という「日本人の儀式」は、移民たちの年越しの行事として、また先祖から受け継がれた文化として継承する努力がなされていることを確認した。儀式そのものは日本伝来の様式を守りつつ、お守りの種類は多様化し、需要に対応してハワイらしいものが見られた。しかし、今後も初詣がこの賑わいをみせ続けるのか、ハワイ日系社会に根付いていくかどうかの判断は難しい。ハワイ出雲大社の初詣の賑わいは、日本のテレビ放映による宣伝効果により日本人観光客が参拝するようになったという特殊な事情によるものであった。どの神社も信徒数が限られており、初詣以外の時の参拝者数は限定的であるといっていよい。初詣という儀式の継承は、ハワイ社会における神道の継承にかかっていると言えようか。

5. 新年のお祝い

ハワイでは、中国系の人々は現在でも旧暦で正月を祝うことが多いのに対して、日系人は太陽暦で祝う。カレンダー上は元旦だけが祝日であるが、日系社会では正月行事が何週間も続く。今回著者が参与観察したハワイの日本人・日系人の正月祝いの風景を紹介しよう。ほんの数例にすぎないが、他民族にはない「日本人の儀式」としての正月祝い、新年会が今も息づいていることが見えて来よう。

(1) 新一世の正月

元旦の正午、戦争花嫁として1959年にハワイに渡って来られた黒川道子氏のお宅に招かれ、正月のお祝いに参加させていただいた。二世の息子さんは日本で出会った日本人女性と結婚。以来、彼女が毎年しっかりお節料理を手料理で用意し、日本のお正月祝いが守られている。黒豆、田づくり、酢ごぼう、煮しめ、なます、お雑煮、漬物などがテーブルに並んでいた。三世の娘さんと、その友人も来られ、お正月らしい賑わいだった。このように正月を祝う日本人・日系人家庭もまだ多いようだ。

3日には、7名の新一世の女性たちの新年会に参加した。日本料理のレストランであった。この会の参加者たちは、お節料理はほとんどマルカイ・スーパーで買ったという。ある女性はマルカイのお節料理を予約して、3段重で150ドル払ったとのことである。手元にある広告では、ニジヤの三段重ねお節料理の予約は150ドル、お惣菜店まま家の二段重ねお節料理の予約は199ドルとある。お節料理に奮発する家庭も多いようだ。

女性たちの話題になったのは、マグロの値段であった。日本と違って、ハワイではお節料理としてマグロのお刺身を食べることが習慣で、年末になるとマグロが値上がりする。今年は特に高いということが話題になった。

(2) 日系商工会議所三世・四世の新年会

4日の夕方に、二世の女性と連れだって、ハワイ日本文化センター5階の大ホールで開催されるホノルル日系人商工会議所の第69回新年会の取材にでかけた。

5時にカクテルアワーが始まり、ラウンジで酒を飲みながら談笑。日本酒の利き酒コーナーもある。会場の入り口には、今年の「桜の女王」と6人のプリンセスたちが、美しいドレス姿で案内役として詰めていた。桜まつりと桜の女王コンテストは、



白波五人男

ホノルル日系人青年会議所が主催する企画で、女王とプリンセスたちは新年会にはホステス役で活躍することになっている。驚いたのは、会場の入り口に赤い鳥居と門松（スーパーのドン・キホーテの寄付）が置かれ、プリンセスたちが、神社の白い切紙（幣）の付いた棒を掲げて客を迎え、客は鳥居をくぐって会場へと案内されたことである。初詣の意を寓したのだろうか。ここには日本の正月のアイコンが沢山用いられ、正月祝いを盛り上げていた。

6時から開演。我々はNo. 30のテーブルに着く。全部で37テーブル、約400人の参加者があった。まずは獅子舞と、現在日系の行事では必ずといっていいほど会場を盛り上げる太鼓グループの演奏があった。会長挨拶と日本総領事の祝辞があり、その後ビュッフェ式の夕食となった。印象的だったのは、日本式のお節料理が全くなかったことである。この世代では、家庭での雑煮の習慣は今も残っていると看做しても、もはや新年宴会にはお節料理は関係なくなっているのであろう。食事中には花柳流の踊りが2曲披露された。

食事の後、名物の「商工白波五人男」が上演され、大変な盛り上がりであった。これは1946年の第1回新年会から続く恒例の出し物で（DeFrancis 1968: 24）、ホノルルのビジネスマンが毎年交替で役者となってステージに立つ。口上を述べる人、盗賊役5人、そして岡っ引き役の計7名が歌舞伎らしく化粧と衣裳をつけて登場した。また見ている人々は、役者が舞台に出ると、「大根役者」にクレームをつけるジェスチャーとして、前もって用意していた大根を手に舞台前に行列を作り、舞台の役者に渡したり、投げ込んだりする。山のような大根が舞台に投げ込まれた。この大根は、祝会の終了後、参加者が1本ずつお土産にもらって帰る事になっている。演じている日系ビジネスマンたちは四世であろう。日本語で「アケマシテオメデトウゴザイマス」と、片言の日本語で挨拶。最初の短い日本語のセリフを苦労して語ったあとは、長々と英語で自分の経歴を自慢するのが決まりで、最後に盗賊名を名乗って終わりとなる。一人だけ女性があり、弁天小僧を演じたが、新一世のビジネスウーマンであった。最後は、3・3・7拍子3回の手締めがあった。参加者たちは慣れているようで、日本の儀式になっていた。この新年会はで、独特に文化変容した日系文化が多様なかたちで現れていた。

（3）他の日系人団体の新年会

上記以外にも、県人会や趣味の団体等、様々な新年会が開催される。日系社会の正月祝の広がりを捕えるために、2014年1月発行の『ハワイ・パシフィック・プレス』⁷を用いて、代表的な日系団体の正月行事を拾ってみた。1月いっぱい祝賀会が続いていた。

1月6日「ホノルル日系人商工会議所」の新年宴会。

1月8日「ハワイ日本文化センター」のオハナフェスティバル開催。

1月12日「木曜午餐会」（100年の歴史をもつ勉強会）の新年祝賀会。

1月21日「裏千家同門会ハワイ支部」の初釜。

1月21日「ハワイ日系人連合協会」の新年宴会。

1月22日「日系婦人会財団」の新年宴会。

（4）アンケート調査にみる年越・正月

最後に、アンケート調査の結果に見られる正月風景を紹介したい。新一世と二世・三世とでは異なる反応が見られた。新一世は今も「日本人の儀式」として新年を迎える習慣を守る傾向があり、二世・三世はハワイ化した正月を楽しんでいる。

新一世の68パーセントは暮に大掃除をし、66パーセントは何らかのかたちで餅をつき、68パー

セントは神社への初詣・寺や教会での新年礼拝をおこない、74 パーセントは「一年の計は元旦にあり」を実践して、年度初めに目標を定めたり、新しいことを始めたりしていると回答した。また、80 パーセントは年越しそばを食べ、88 パーセントは元旦に雑煮を食べる。お節料理については、自宅で料理する人と、店で買ってくる人は、ほぼ半々であった。これらの数字は、多くの新一世が日本の正月の伝統をハワイでも守っていることを示している。新一世の回答のなかには、「かるた」や「お書初め」をすると記入した人もいた。

二世・三世の場合には、年越しそばを食べる人は58 パーセントだが、元旦に雑煮を食べる人は92 パーセントと、この2つの食の伝統は引き継がれている傾向があることがわかる。ただ、餅をつく人はほとんどなく、お節料理を作る人や大掃除をする人はほぼ三分の一であった。特徴的なのは、初詣や新年礼拝に参加する人は三分の一程度なのに、新年パーティーをする人が100 パーセントで、陽気に楽しむ正月というアメリカの習慣に傾いていることが分かった。

おわりに

戦争で一時中断したものの、ハワイの日本人移民社会では、その歴史を通じて一連の年越・正月の儀式が「日本人の儀式」として継承されてきた。移民たちは新年を一体となって祝い、それによって日本人であることの民族的アイデンティティを意識した。餅つきや初詣などを毎年繰り返し、門松やお節料理などの新年のアイコンを共有することで、日本人としての絆を確認した。

ハワイの社会状況が変わり、日系移民の世代が変り、新年の迎え方にも変化はあった。しかし、日本人としての正月の習慣は、まだまだ根強い。1月2日にハワイ大学のハミルトン図書館で新一世の友人と出合った。彼女は、自宅では全くお節料理を用意せず、日本的な正月祝をしないと述べていたが、その会話の最中に日系人の友人から餅をついたという電話が入り、その友人宅に行くことになったという。なんらかの形で日本的な正月の伝統や風習が、ハワイに住む日本人・日系人社会には広く残っているということであろう。

ハワイの正月祝いという季節の儀式は、文化変容をかさねつつ、多様な様相をみせて受け継がれている。ホノルル日系人商工会議所の新年会にみられるように、三世・四世の世代が、民族的文化継承を意識的に行っている。またハワイ日本文化センターのオハナフェスティバルも、若い世代に民族文化を伝承しようとする努力の表われである。彼らは、ハワイの日系人としての民族的アイデンティティの核の一つとして正月祝いを位置づけているのである。今後も「日本人の儀式」として継承された正月が、ハワイの日系人文化、日系人アイデンティティ継承の役割を担っていくことであろう。

また新一世が日本文化を新たにハワイに持ち込んで、餅つきやお節料理を生きたものになっている、という側面も重要であろう。新一世が日本人としての正月儀式を新たに強めている。移民三世・四世の文化変容した日系の正月と並んで、新一世が持ち込んだ正月儀式の二つの流れが共存し交錯しているように見える。初詣は、日系人だけでなく新一世、一時滞在者の日本人によって支えられ、伝承されている。また年越しそばも、サイミンと日本そばが共存している。

ハワイの正月を一括りにして一面的に語ることはできない。戦前から継承されてきた正月という「日本人の儀式」は、戦後ハワイに移住してきた新一世のそれと重なりあい、ハワイ社会に適応して変容し、重層化して現在にいたっている。そして今後もこのハワイ日系人・日本人の儀式は、文化変容しつつ、継承されていくと考えられよう。

註

- ¹ 横山青松のこの2句は、ともに1937年に詠まれたものである。
- ² 島田法子 2004『戦争と移民の社会史 — ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争』（東京、現代史料出版）を参照。
- ³ 天理教本部のソーシャルホールに、当日の餅つきの時間割と量のリストが掲示されていたものである。
- ⁴ 仏教のハワイ化に関しては、守屋友江 2001『アメリカ仏教の誕生—二〇世紀初頭における日系仏教の文化変容』（大阪、阪南大学）を参照。
- ⁵ ハワイ出雲大社宮司天野大也氏とのインタビュー、ハワイ出雲大社にて、2013年12月24日。およびハワイ大神宮宮司岡田章宏氏とのインタビュー、ハワイ大神宮にて、2013年12月26日。
- ⁶ 太平洋戦争中と戦後のハワイの神社の歴史については、前出、島田法子『戦争と移民の社会史』を参照。
- ⁷ 毎月2回発行される邦字新聞 *Hawaii Pacific Press* の2012年1月15日、2月1日、2月15日の記事検索によるものである。2014年1月17日の日系人向けの英字新聞 *Hawaii Herald* も同様の新年会がもたれたことを報道している。

引用文献リスト

Advertisements

Don Quijote, “Happy Holidays,” December 22-January 1.
Marukai Wholesale Mart, “Irasshai,” December 3-December 31.
Nijiya Market, “December Sale, No.2,” December 13-December 16.
Safeway, “Real Big Deals,” December 26-January 1.
Times Supermarkets, “Happy New Year!” December 26-January 1.

インタビュー

天野大也氏とのインタビュー、ハワイ出雲大社にて、2013年12月24日。
岡田章宏氏とのインタビュー、ハワイ大神宮にて、2013年12月26日。

新聞記事

Gee, Pat. “Mochi Tradition Builds Family Bonds: Members Young and Old of the Uejo Family Pound Rice Cakes for New Year’s.” *Honolulu Star-Advertiser*, Jan. 1, 2014.
Hawaii Herald, January 17, 2014.
Hawaii Pacific Press の2012年1月1日、15日、2月1日、2月15日。
“New Year, New Beginnings.” *Honolulu Star-Advertiser*, Jan. 2, 2014.
「とやら」『日布時事』、1910年1月1日。

二次資料

DeFrancis, John 1973 *Things Japanese in Hawaii*. Honolulu: The Univ. Press of Hawaii.
古屋翠溪 1968「昔のハワイの正月」『移民のらくがき』ホノルル：布哇タイムス社。
守屋友江 2001『アメリカ仏教の誕生 —二〇世紀初頭における日系仏教の文化変容』大阪：阪南大学。
島田法子 2004『戦争と移民の社会史—ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争』東京：現代史料出版。
横山青松 1960『松青句集 アイカネ』ホノルル：青夏吟社（非売品）。

Immigrant Culture Seen in the New Year Celebration of Japanese People in Hawaii: Changes and Continuity in the Immigrants' Seasonal Rituals

Noriko Shimada (Japan Women's University)

This paper demonstrates that the Japanese in Hawaii have maintained special Japanese rituals for celebrating the New Year and those rituals have contributed to building ethnic pride and identity. Except for the short period of war years, Japanese people have communally celebrated the New Year. Although the rituals went through some acculturation, even the third- and fourth-generation Japanese still observe them. Also, new Issei who immigrated to Hawaii after the war have helped strengthen the Japanese traditional rituals. In late December, every year, they rush to the market to purchase special commodities, prepare specific foods for the New Year, decorate their homes with pine branches and sacred mochi, ring the temple bells on New Year's Eve, pay homage at Shinto shrines on New Year's Day, and get together for special celebration. These rituals will continue, while getting acculturated further, as Japanese people consciously continue to endeavor to preserve them.

Keywords : Hawaii's Japanese, ethnic identity, rituals of the New Year, mochi pounding, first visit to a Shinto shrine

〈論 文〉

ハワイ日本人移民の教材づくりに関する海外スタディツアーの教育的意義 — 物語論的アプローチによる大学生の自己変容プロセスの分析を通して —

森茂岳雄（中央大学・教授）

津山直樹（中央大学大学院博士後期課程）

＜目 次＞

1. 問題の所在と本論文の目的
2. 自己変容を分析する方法としての物語論的アプローチ
3. ハワイ日本人移民をテーマにした「グローバル・スタディーズ」の概要
4. 物語論的アプローチによる自己変容プロセス — 学生の成果物の分析 —
5. 結語 — 海外スタディツアーにおける「体験の言語化」の意義 —

キーワード：ハワイ日本人移民、海外スタディツアー、物語論的アプローチ、自己変容、体験の言語化、ルーブリック、

1. 問題の所在と本論文の目的

本論は、ハワイの日本人移民・日系人をテーマにした大学における海外スタディツアーを事例に、そのプログラムに参加した学生の自己変容の分析を通して、本スタディツアーの教育的意義とそれを意義のあるものにするための条件を明らかにするものである。

近年、21世紀の教育政策課題として「グローバル人材の育成」があげられ、とりわけ高等教育政策に大きな影響を与えている。具体的には、文部科学省（以下、文科省）によって2011年度より「大学の国際化のためのネットワーク形成事業（グローバル30）」、「大学の世界展開力強化事業」、2012年度には「グローバル人材育成推進事業」（2014年度より「スーパーグローバル大学等事業」と名称変更）が開始された。これらの高等教育政策に関わる諸アクターの行動および施策内容に関する議論を分析した吉田文は、「これらの議論に欠けているのは、日本を相対化する視点と、それに関連してグローバリゼーションへの対応ではなく抵抗という視点である。すなわち、日本の企業が競争優位に立つことではなく、日本の位置を確認し世界のなかで日本が果たす役割を考察すること」であると述べ、次世代の育成を担う大学の役割は、「グローバル問題を考えるための知識を学生に与え、解決するための能力を培う」ことであり、そのためには「学生が海外留学でそのような視野の拡大が可能となるような配慮」が必要であるとしている。（吉田2014：36）

本稿において事例分析の対象とする中央大学は、2012年度の「グローバル人材育成推進事業（タイプA：全学推進型）」に採択され、現在大学全体でさまざまな取り組みがなされている。その中で、著者が所属する文学部を中心とした取り組みとしては、2012年度から開始された新規留学プログラムである「中央大学 SEND プログラム¹（日本語教育）」に加え、2014年度からは「グローバル・スタディーズ」という授業科目が新設された。この科目は、「地球規模で活躍できる人材の養成、および学生の外国語運用能力を含めたコミュニケーション能力の向上を目的として、従来の演習科目等による海外実態調査・研修活動をさらに充実・発展させた」（シラバス）もので、2年目に当たる2015年度は専門の異なる9名の教員によって担当された²。

文科省は、上記の事業を通して育成を目指している「グローバル人材」について、「Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力、Ⅱ：主体性、積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」³の三つの要素をもつものとして定義している。しかし、現在大学において取り組まれている実践の多くは、「Ⅰ：語学力」、中でも英語能力の獲得を課題にしている。そこで教育学専攻の森茂が担当した「グローバル・スタディーズ」では、Ⅰだけではなく、Ⅱ、Ⅲの要素を意識し、「グローバル・シティズンシップ」の育成をめざしたプログラム設計を試みた。ここで「グローバル・シティズンシップ」とは、産・官・学がその育成を唱える「日本（＝企業）」に帰属する「グローバル人材」ではなく、「地球または人類全体」に帰属する自律性と主体性、つまり「主語としての自分」をもつ人のことである（加藤・久木元 2016：265-267）。

本プログラムは、実習調査地をアメリカ合衆国のハワイ島に定め、そこでのフィールドワークや体験を通して、日本人移民、日系人の歴史や現在の生活・文化についての認識を深めるとともに、それについて学ぶための学校等で活用できるグローバル教育の教材づくりを行うことを目的とした。特に、グローバル問題に対応するための能力は、文脈に依存しているため状況によって異なるものの、調査対象に対する自らのステレオタイプを認識しながら海外でのフィールドワークや体験を通して自らのステレオタイプを語り直し、吉田が指摘した「視野の拡大」につながるような多様な視点を持つことがめざされる。そこで、本プログラムに参加した学生ハワイ日系人に対するステレオタイプの変容プロセスの分析を通して、参加学生がグローバル問題に対応するための能力や異文化に対する理解を身に付けるプロセスを検証し、本スタディツアーの教育的意義とその条件を明らかにすることが本研究の課題である。具体的には、森茂が2015年度前期に担当した「グローバル・スタディーズ」を事例として、そのプログラムの中で大学生たちがどのように体験を言語化し、変容を自覚し、グローバル問題に対応するための能力を身に付けたのかを分析する。

スタディツアーにおける省察や自己変容に焦点をあてた先行研究としては、以下のような研究があげられる。林加奈子は開発教育の立場から「省察と行動の視点」を「①省察の対象」「②省察のプロセス」「③省察と行動の連関」という三つにまとめ（林 2010：186-187）、「スタディツアーを事前、現地、直後、事後の四つの時間的枠組みに分けて組み立てていくことを提案」（林、2010：191）している。ただし、この研究では具体的に参加者がどのように省察し、自己変容していったかのプロセスが示されておらず、その有効性には触れられていない。藤原孝章（2013）、及び居城勝彦・中山京子・織田雪江（2014）の研究では、メジロー（Jack Mezirow）の意味パースペクティブの変容理論（メジロー 2012：235-236）を援用して参加者の記録から自己変容プロセスを分析している。ただし、本理論に基づいて分析することは、変容の局面（段階）がわかりやすいという利点があるものの、文脈性が捨象されてしまっているためすべての海外スタディツアーのプログラムに完全に合致したものにはなりにくく、参加者個々人の自己変容プロセスを分析することが難しい。そこで本研究では、「物語論的アプローチ」を援用し、個々の参加者自身の自己物語の語り直しの文脈性に着目した分析を行う。

2. 自己変容を分析する方法としての物語論的アプローチ

浅野智彦によれば、物語論的アプローチとは、『物語』をキー概念として自己の生成と変容を理解するアプローチ」（浅野 2001：4）である。ここでいう「物語」とは、人が自分自身について語る物語、すなわち「自己物語」のことである。そこでは、第一に「自己は、自分自身について語ることを通して生み出されるということ」、第二に「自己物語はいつでも『語り得ないもの』を前提にし、

かつそれを隠蔽しているということ」の2点が主張される（同：4）。

第一については、「まず『私』がいて、ついでそれについて私が語るというのではない。そうではなく、自分自身について語るという営みを通してはじめて『私』が生み出されてくる」（同：6）のである。第二で主張する「語り得ない」という事態は単に「語り尽くせない」という物語の外側（すなわち、まだ語られていないもの）にあるという事態とは異なる。それは、「まさに自己物語のただ中に現れてくるようなものであり、自己物語が達成しようとする一貫性や完結性を内側からつき崩してしまうようなもの」であり、「これを隠蔽し、見えなくすることによってはじめて一貫した自己同一性が産み出される」のである（同：15）。浅野は、自己変容に重要な「隠蔽」について、「物語論的アプローチの観点からすると、自己が変わるために必要なのは、（他者との）関係を変えることそれ自体というよりは、語り得なさの隠蔽を解除しうるように関係を変えることなのである」（同：29）と述べている。

このような物語論的アプローチを本研究の文脈に即して捉えたと、参加者のハワイに対しての自己物語は、ハワイ日本人移民・日系人の歴史や現在と関係性をもつことによって変容が起こる。事前学習で作成したハワイのイメージのコラージュによって、「隠蔽」されたハワイに対しての自己物語（自分自身のハワイに対するステレオタイプ）を自覚化することになる。現地でのフィールドワークを通してハワイについての多様な視点に触れることで「隠蔽」を解除し、自己物語を変容させることになる。さらにこの一連のプロセスを教材として表現することでメタ化し、スタディツアーを通して得たものを省察することになる。

このような意図のもとに、本研究では方法として「物語論的アプローチ」を用いることとした。

3. ハワイ日本人移民をテーマにした「グローバル・スタディーズ」の概要

(1) テーマ、目標、プログラム

2014年に新設され、今年（2015）に2回目を迎えた森茂担当の「グローバル・スタディーズ」は、前年同様のテーマで以下のような計画で実施された⁴。

2015年度（前期）「グローバル・スタディーズ」（森茂担当）実施計画（抜粋）

1. テーマ：ハワイにおける日本人移民・日系人に関するフィールドワークと教材づくり
2. 目 標：ハワイにおけるフィールドワークを通して、日本人移民・日系人に関する認識を深めるとともに、各自が調査・体験したことをもとに、学校現場で活用できるグローバル教育の教材（ex. 写真アルバム、絵本、紙芝居、絵地図、新聞、マンガ、カルタ等々）づくりを行う。
3. 事前学習：
 - 第1回（6月1日）：プログラムの説明と事前課題（ハワイに関するコラージュの作成）
 - 第2回（7月1日）：作成したコラージュの紹介によるハワイイメージの共有、旅行の諸注意
 - 第3回（7月28日）：講義「グローバル人材のバイオニア ― 日系アメリカ人の経験に学ぶ ―」、プログラムの再確認、本授業の評価について
（※その間、7月17日に、学部が行う危機管理ガイダンスに出席）
4. 実施場所：アメリカ合衆国ハワイ州ヒロ市及びその周辺（ハワイ島）
5. 実施期間：2014年8月19日（水）～25日（火）
6. プログラム内容：
 - 8/19 ヒロ到着後、ヒロ高校日本語クラスにおいて日本文化紹介の交流授業「現代日本文化としての書道」、本田正文先生（ハワイ大学ヒロ校）によるヒロの街とハワイ日本人移民・日系人についてのオリエンテーション講義

- 8/20 アラエ墓地、ハワイ島に唯一残る相撲の土俵、キラウエア火山中腹にある日系人強制収容所跡、
 昨年のキラウエアの噴火による溶岩流で埋まったパホア日系人墓地の見学
- 8/21 虹の滝、ヒホヌア日本人会館（100年以上前に建てられたハワイ島に残る最も古い集会場）、
 ハマクア浄土院（ハワイ全で最古の仏教寺院）の見学、ホノカアの街探検
- 8/22 ヒロダウンタウンの自由散策（朝市見学）、ハワイ・ジャパニーズ・センターで本田先生から
 展示解説、夜パホアで日系人会が主催するお盆の法要と盆ダンスに参加
- 8/23 日本語ラジオ放送局 KPUA の番組に学生数名と出演（学生からは、ハワイ日系人調査を通して
 の感想等が語られた。）本派本願寺ヒロ別院の日曜礼拝に出席（出席されていた日系人のお年寄
 りへインタビュー）、アラエ墓地で行われた日本人慰霊祭に参加、ヒロ大神宮見学、ハワイ大学
 ヒロ校で本プログラムの振り返り、打ち上げ
- 8/24 帰国（25日成田到着）

以下略

本授業で、ハワイにおける日本人移民・日系人をテーマとしたのは、彼らが前述した「グローバル人材」のフロンティアであり、彼らの歴史的経験について学ぶことは、学生がグローバル人材とは何かを考えるよい機会になると考えたからである。すなわち、150年前にハワイに移民した日本人とその子孫は、外国への渡航もままならなかった時代から「チャレンジ精神」を持って海を渡り、そこで英語による「コミュニケーション能力」を身につけ、多くの困難に直面しながらハワイという「異文化に対する理解」を深めるとともに、「日本人としてのアイデンティティ」を失うことなく現在もたくましく生活している。これは、まさに前述した「グローバル人材」の要素に他ならない。事前学習において、このようなハワイ日本人移民・日系人の歴史的経験と現代の生活・文化について講義を行った。

また事前学習では、まずハワイに関する自己物語の産出の契機になるように、ハワイに関するコラージュの作成を課題に出して参加学生間で共有する機会を持った。そのコラージュのほとんどは、旅行会社のパンフレットにあるようなヤシの木、ハイビスカス、トロピカルフルーツ、サーフィン、フラダンス、アロハシャツ、リゾート、ビーチ、・・・といった「常夏の楽園」を思わせるものだった。本授業では、このようなステレオタイプなハワイのイメージを捉え直し、「日系人」の視点からの語り直しを通して、多様なハワイ認識を深めてもらいたいと考えた。

物語論的アプローチによる「物語」の特徴の一つは、「それが諸々の出来事を時間に沿って構造化する語りであり」、「構造化というのは、無数の出来事の中から意味のあるものだけを選びだして相互に関係づけるという作業を意味して」（浅野 2001：8）いる。そこで、本プログラムにおいては、一枚の紙面に、学習前、学習中、学習後の考えを学習者が書き、自己評価や教師の評価と指導に生かすことを目的とした「一枚ポートフォリオ」（堀 2013）の作成を課して、日程に沿って体験した自己の物語を簡単に言語化するようにした。このように本授業で実施した「一枚ポートフォリオ」は、フィールドワーク中に設定された課題についての記録の蓄積ではなく、日毎の体験の言語化を重視したものになっている。

（2）評価方法

このスタディツアーの評価方法については、事前学習において次のように提示した。

2015 年度前期「グローバル・スタディーズ」(森茂担当) 評価の概要
ー パフォーマンス評価 (評価の観点と課題としてのフィールドワーク) ー

1、本授業の評価方法ーパフォーマンス評価ー

パフォーマンス評価という方法を実施する。パフォーマンス課題を通して学習者の思考のプロセスを可視化・言語化し、知識だけではなく、概念やスキルを組み合わせ、文脈に即したかたちでパフォーマンスを行うことができたかを評価する方法です。「パフォーマンス課題は、学習者のパフォーマンス能力を、完成作品や口頭発表や実技の実演によって、評価しようとデザインされた課題です。パフォーマンス課題には次の三つの構成要素が含まれます。すなわち、①使われる知識やスキル、②特定の課題や文脈、③生み出された作品の三つです」(田中耕治編 (2005)『よくわかる教育評価』 ミネルヴァ書房、98-99 頁) とされています。

2、本授業の評価の観点

- 「ハワイにおける日本人移民・日系人」というテーマでフィールドワークをする中で、コラージュのイメージが変容する体験をした。変容するきっかけとなった体験に気づき、その体験が教材づくりに活かされている (変容を体験できる教材となっている) (気づき・自己変容)。
- さまざまな視点から「ハワイの日本人移民・日系人」をとらえ、フィールドワークから多くの情報 (事実) を収集することができている。また、自分の視点から気づいたことなどを記録し、情報 (事実) の整理もできている (調査)。
- 多くの情報 (事実) を比較検討しながら、教材づくりに向けて自分の視点から情報 (事実) の取捨選択ができている。また、ハワイの日本人移民・日系人のイメージを変容させるような資料を教材にしている (資料活用 of 技能)。
- フィールドワークで調査した成果をグローバル教育の教材 (写真アルバム、絵本、紙芝居、マンガ、絵地図、新聞等) に表現することができている、他者への発信ができている。また、教材づくりを通して自分自身で省察ができている (表現)。
- 多くの情報 (事実) を根拠にして、ハワイへのステレオタイプやイメージが自己変容する中で知識や理解を深めている。現地で知り得た知識を土台にして教材をつくっている (知識・理解)。

3、課題としてのフィールドワーク

本授業でのフィールドワークは、「ハワイにおける日本人移民・日系人」というテーマからリサーチクエスチョンを設定し、それに応答するための調査として位置付ける。すべてのプログラムが情報 (事実) を収集するチャンスであり、他のメンバーと協働しながら積極的に参加することが重要である。

4、ルーブリック (評価基準表)

パフォーマンスとしての教材づくりと振り返りとしての体験記は、ルーブリック (評価基準表) によって A～E の評価を行う。評価の観点は、「2、本授業の評価の観点」に準ずる。ルーブリックには、各観点を示すだけでなく、観点同士の関係性にも配慮したものを示す。(別紙表 1 参照)

近年、本グローバル・スタディーズのような海外体験学習の評価としてルーブリック活用 of 有効性が問われるようになってきている⁵⁾。事前学習の段階で評価の観点とルーブリックを示すことは、次の三つの利点がある。一つ目は、ラーニング・アウトカムを明確に示すことで、学生たちが目標を達成する具体的なイメージをもちながらスタディツアーのプログラムを体験できる点である。ルーブリックを参照することで、プログラムを体験しながら省察することができ、自分自身が何を学んだのかに自覚的になれる。二つ目は、アウトカムを示すことで学生の行動や意識の変容を促しやすくなり、成果物を評価する際に自己変容プロセスの認識のようなグローバル問題に対応するための能力を評価できる点である。ルーブリックを示しているため個人内評価が可能となる。三つ目は、それを行うことにより、プログラムの改善の視点を得られることがあげられる。

表1＜パワオアンスン課題「教材づくり」のルーブリック（評価基準表）＞
※情報（エビデンス）収集の基準とともに時系列に収集した情報（エビデンス）を整理するのに活用しよう。

プロセス(各観点の関連性)	気づき・自己変容 (/)	調査 (/)	資料活用 の技能 (/)	表現 (/)	知識・理解 (/)
A	このファールブックを通してさまざまな「気づき」があり、コラージュでのハワイのイメージが自己変容する体験をしている。そしてこの体験を教材づくりの出発点としている。ハワイへのイメージが変わることを当事者性を感じながら追体験できるような教材となっている。その根拠となるような資料や素材をファールブック（「調査」）によって収集・記録することができおり、「資料活用」の技能によって取捨選択され、自分の伝えやすい方法で教材化し、「表現」することができている。さらにこの教材づくりを支える「知識・理解」を現地で得ることができている。教材の裏付けにも活用できている。	○「ハワイにおける日本人移民・日系人」というテーマでファールブックをする中で、コラージュのイメージが自己変容する体験をした。変容するきっかけとなった体験に気づき、その体験が教材づくりの活動に活かされている（変容を追体験できる教材となっている）。	○さまざまな視点から「ハワイの日本人移民・日系人」をとらえ、ファールブックから多くの情報（事実）を収集することができている。また、自分の視点から気づいたことなどを記録し、情報（事実）の整理もできている。	○多くの情報（事実）を比較検討しながら、教材づくりに向けて自分らの視点から情報（事実）の取捨選択ができています。また、ハワイの日系人のイメージを要容させるような資料を教材にしている。	○多くの情報（事実）を根拠にして、ハワイへのステレオタイプやイメージが自己変容する中で知識や理解を深めている。現地で知り得た知識を土台にして教材をつくらせている。
B	このファールブックを通してさまざまな「気づき」があり、コラージュでのハワイのイメージが自己変容する体験をしている。そしてこの体験を教材づくりの出発点としている。ハワイへのイメージが変わることを追体験できるような教材となっている。その根拠となるような資料や素材をファールブック（「調査」）によって収集・記録することができおり、「資料活用」の技能によって取捨選択され、教材化し、「表現」することができている。さらにこの教材づくりを支える「知識・理解」を現地で得ることができている。教材の裏付けにも活用できている。	○「ハワイにおける日本人移民・日系人」というテーマでファールブックをする中で、コラージュのイメージが自己変容する体験をした。その体験が教材づくりの活動に活かされている（変容を追体験できる教材となっている）。	○さまざまな視点から「ハワイの日本人移民・日系人」をとらえ、ファールブックから多くの情報（事実）を収集することができている。また、記録し、情報（事実）の整理も部分的にできている。	○教材づくりに向けて情報（事実）の取捨選択ができています。また、ハワイの日系人のイメージを要容させるような資料を教材にしている。	○多くの情報（事実）を根拠にして、ハワイへのステレオタイプやイメージが自己変容する中で知識や理解を深めている。
C	このファールブックを通してさまざまな「気づき」があり、コラージュでのハワイのイメージが自己変容する体験をしている。そしてこの体験を教材づくりの出発点としている。資料や素材をファールブック（「調査」）によって収集・記録することができおり、「資料活用」の技能によって取捨選択され、教材化し、「表現」することができている。さらにこの教材づくりを支える「知識・理解」を現地で得ることができている。教材の裏付けにも部分的に活用できている。	○「ハワイにおける日本人移民・日系人」というテーマでファールブックをする中で、コラージュのイメージが自己変容する体験をした。その体験が教材づくりの活動に活かされている。	○「ハワイの日本人移民・日系人」をとらえ、ファールブックから多くの情報（事実）を収集することができている。また、記録し、情報（事実）の整理も部分的にできている。	○教材づくりに向けて情報（事実）の取捨選択ができています。また、ハワイの日系人のイメージを要容させるような資料を教材にしている。	○多くの情報（事実）を根拠にして、ハワイへのステレオタイプやイメージが自己変容する中で部分的に知識や理解を深めている。
D	このファールブックを通してさまざまな「気づき」があり、コラージュでのハワイのイメージが自己変容する体験をしている。資料や素材をファールブック（「調査」）によって収集・記録することができおり、「資料活用」の技能によって取捨選択され、教材化し、「表現」することができている。さらにこの教材づくりを支える「知識・理解」を現地で得ることができている。教材の裏付けにも活用できている。	○「ハワイにおける日本人移民・日系人」というテーマでファールブックをする中で、コラージュのイメージが自己変容する体験をした。その体験が教材づくりの活動に活かされている。	○「ハワイの日本人移民・日系人」をとらえ、ファールブックから多くの情報（事実）を収集することができている。また、ハワイの日系人のイメージを要容させるような資料を教材にしている。	○ファールブックで調査した成果を教材（写真アルバム、絵本、紙芝居、絵地図等）に表現することができおり、部分的に他者への発信ができています。	○知識や理解をあまり深めていない。
E	評価の観点をいすれも達成していない。				

※情報（事実）の記録については、すべてのプログラムで各自とっておくこと。「体験」によって見聞したことと自分で感じたことをしっかりとわけて記録するとよい。また、最初にコラージュを作成したときのハワイのイメージ（ステレオタイプ）が、「体験」をする中でどのようにに変容しているのか、深まっているのかを言語化しておくことも重要である。これらの点を気を付けて記録をしてみる。

4. 物語論的アプローチによる自己変容プロセス－学生の成果物分析－

本節では、事例としてスタディツアーに参加した一人の学生 A の事前学習で作成したコラージュ、プログラム中で作成した一枚ポートフォリオ、振り返りシート、最終的な成果物（教材）を取り上げ、物語論的アプローチにより自己変容プロセスを分析する。

(1) コラージュ、一枚ポートフォリオ、成果物（教材）

＜カラーージュ＞

多くの学生同様、この学生が作成したコラージュは、青い空、ビーチ、椰子の木、ハイビスカスといった旅行ガイドに出てくるような典型的なハワイ・イメージであった。



<一枚ポートフォリオ>

①「ハワイの日系人」へのイメージを三つあげてください。 (初日) ○日系人とはいえどもハワイに住んでいるため日本人よりもアメリカの文化に染まっている。 ○気さくで親切。 ○日系人をよく知らないためあまりイメージもできない。	⑤8月23日 ☆天文台。ジャパニーズ・センターでは第2次世界大戦等でのたくさんの援助、3.11の際にハワイも影響を受けたというのが衝撃的だった。
②8月20日 ヒロ高校の皆と交流して、日本が大好きなことを感じた。「まんが」や「音楽」など日本人が誇るべきものはたくさんあると感じた。	⑥8月24日 ☆本願寺の礼拝を体験して人間であるとは「老・病・死」を恐れることであり、それを通して「生きている」ことに感謝ができるときいて、すごくためになった。この礼拝をきく前と世界観が変わった。
③8月21日 多くの人がまつられている慰霊碑をみた。お墓は日本のものそのものだった。土俵など日本文化のものが多く混在していた。お墓が火山の噴火によって埋もれてるのを見たときはショックを覚えた。	⑦「ハワイの日系人」へのイメージを三つあげてください。(最終日) ○自分たちの意志をしっかり持ち、日本が大好き。 ○ハワイにここまで日本文化を広めたたくましが存在。 ○実際にとても気さくで親切だった。
④8月22日 レインボー・フォールズは私達と同様、日系人にとっても「いやし」であり、憩いの場であった。後藤潤さんのようなリーダー的日系人の殺害。	

<振り返りシート>

【教材の作成意図（規準ごと）】

（気づき・自己変容）宗教は信仰のある者が存在するところに根付き、その土地の文化や慣習を吸収しつつ、変容していく。
（調査）ハワイに存在する日本の宗派を探し、日本と異なるところを探す。
（資料活用の技能）今まで撮った写真から、改めて日本の宗派と異なるところを探す。
（表現）2人の架空の生徒役を用い、我々がハワイで体験したことを教材を読む人に追体験してもらおう。
（知識・理解）ハワイの地で広まった日本の宗教は日本と異なるところがたくさんあり、それはもはや新しい宗教のようだ。

【パフォーマンス課題「教材づくり」の自己評価】

様々な表現方法がある中で、この教材を読んだ者に効果的に追体験をしてもらえる表現方法を選択した。花子と太郎という架空の登場人物に我々が体験したグローバルスタディ ⁽⁷⁷⁾ を会話方式でふりかえりさせることで、教材を読んでいる読者が実際にグローバルスタディ ⁽⁷⁸⁾ を体験しているような錯覚をおぼえることを期待した。写真は宗教に関わるもののみならず、私自身印象深かった写真も教材に使用した。この教材を作成するにあたり、初めは「ハワイという遠く離れた地で日本の文化が形を変えつつ、ハワイの人々に受け入れられ、ハワイの文化と融合したまったく新しい文化」ということにフォーカスをおこうと考えていたが、より狭い“宗教”という一種の文化に的をしぼり、教材づくりを行った。無宗教国家である日本で宗教を学問として考える機会がもっと増えることを期待し、この教材の作成にあたりました。
--

※観点別のエビデンスは多様な方法でそれぞれ記録を取っておこう。時系列に整理をしておきながら、最終的に観点別に振り分けてみましょう。ループリックの中に日付を書き込み活用しよう。

<成果物（教材づくりの資料・素材）>

【フィールドワークでの気づきによるコラージュでのイメージの自己変容（一枚ポートフォリオを活かして）】

ハワイに行くに当たり、一人一枚の自分が思うハワイについてのコラージュを作成することとなった。当時私は「ハワイは観光客が多く訪れるリゾート地である」というイメージが強く、海や砂浜、ヤシの木等の絵を用いて作成し、今思えば“表面的なハワイ”についてしか知らなかった。しかし、このプログラムを通して知ったのは“内面的なハワイ”の姿だった。ハワイが日本ととてもゆかりのある国であり、日系人は米国と日本をつなぐ架け橋的存在であることを、日本人の多くは知らない。私もこのプログラムを体験するまではそんなハワイや日系人に関して無知な日本人の一人だった。なぜこれほどまでにハワイには日本があふれているのか。例えば、日本式のお墓、レストランにある多くの日本食、日本語をローマ字で書かれた看板、日本でもあまり見られなくなった盆踊り、日系人の子供たちが学ぶ日本語クラブ等。ここに書ききれないほどの日本をハワイで感じた。中でも一番衝撃を受けたのは“宗教”に関することだった。ハワイには多くの日本の宗派が存在していて、多くの寺社が存在していた。例えば“お焼香”や“念仏を唱えること”は日本とまったく一緒だったが、本派本願寺ヒロで礼拝を体験しに行った際に発見したステンドグラス、また教会に置いてあるような椅子、英語で行われる説教等日本人にとってはなじみがなく、違和感を覚えるものもあった。いつの時代にも、どんな場所にも宗教は“老・病・死”を恐れる人間を支える。そして信仰心のある者が存在するところに宗教は根付く。その土地の習慣や慣習に合うように形を変容させながら。ハワイで見た多くの寺社はそのことを物語っていた。また私はプログラム最終日に行われた日系人慰霊祭である貴重な出会いを経験した。ハワイで天理教を説いている方なのだが、なんと中央大学商学部出身だった。直属の先輩とハワイで出逢えるとは思ってもなく、とても驚いた。たくさんのお会い、たくさんプログラムを通して私の中で変わったこと、気付かされ

たこと。先にもあげたようにハワイの中で多くの日本を見つけることが出来た。日系人は日本に誇りを持ち、日本を愛し、日本の文化を愛し、新たな土地“ハワイ”でその文化を発展させてきた。ハワイの習慣や慣習も織り交ぜつつ、また一方で日本らしさも忘れずに。彼らがそうして作りだした文化というのは、日本の文化をハワイの土地で発展させたというよりは、日本とハワイの文化を織り交ぜて作りだした、まったく新しい文化のような気がした。私はその文化こそが、日本とハワイ、さらには日本と米国の架け橋になると気付かされた。最初はリゾート地である、というイメージしかなかったハワイ。プログラムを経験していくうちにハワイの中にある日本の文化に気付いた。プログラムをすべて終えた今では、それは日本の文化、ハワイの文化といった切り離されたものではなく、それぞれが織り混ぜあわせられながら変容して作られた、まったく新しい文化であり、その文化こそが日本とハワイ、日本と米国をつなぐ架け橋となっていることに気付いた。こんな素晴らしい文化を築いた日系人の方々に敬意を表したい。

【教材づくりの資料・素材（各資料・素材にタイトルと2～3行の解説）】

【アラエ日系人墓地】



ハワイで見られた日本式のお墓。
多くの日系人のお墓がここにある。

【アラエ日系人墓地にある慰霊塔】



この慰霊碑には「布哇日本人先亡慰霊塔」の文字。
この写真は日系人慰霊祭の際に献花が行われた後の写真。「布哇」はハワイと読む。

【ハマクア浄土院】



ハワイ全島の中で最初の日本仏教寺院。

【ヒロ大神宮】



明治31年に建てられ、現存する海外の神社の中で最も古い歴史を持つ。宮司の堀田さんからは記念のボールペンもいただいた。

【本派本願寺ヒロ別院】



ここでは日曜に行われる日本語礼拝に参加した。私はこの礼拝に参加したことで自分の中での人生観が変わったように感じた。ここでの体験がこのプログラムを通して最も私の心に残り、今回この教材作りのテーマを決めるにあたってのきっかけにもなった。

【教材づくりのために選んだ資料の説明と選んだ理由（自己変容のポイント）】

今回のプログラムでは宗教に関する行事に参加することが多々あったり、お話を聞く機会が多く、形を変えながらも人々の心を支え続ける宗教にひどく感銘を受けたからである。お寺の中にあるステンドグラスや、お経を唱える際に時折混ぜられる英語や、外国に建てられた多数の日本式のお墓には自分の中のステレオタイプが変容していくのを感じた。日本は無宗教国家であるため、信教の自由や政教分離の原則等により学校教育の中で宗教について深く学ぶ機会は少ないように感じる。今回作成した教材では、日本にある宗教がハワイでどのように変容し、多くの人に受け入れられているのかを知ってほしいと思い、このような教材を作った。

【教材のねらい（教材をどのように使うかという視点）と対象（授業をする校種・学年）】

会話文方式で二人の架空の生徒役を用いることで、ハワイでのグローバルスタディ^(ママ)プログラムを追体験しているような感覚を味わってもらい、ハワイの宗教文化について考えるきっかけを与えるとともに、自国の宗教の文化についても見直すきっかけを与える。授業をする校種は世界史をしっかりと学んだ高校生で、ミッション系スクールに比べ特定の宗教を深く学ぶ機会が少ない一般高等学校の生徒を対象とする。学年は進路や将来の夢を考え出す高校1～2年生を対象とし、私が体験した“自分の持っているステレオタイプが崩れる”という体験をぜひ追体験していただきたい。

<教材（抜粋）>

ハワイの日系人から学ぶ“宗教”

皆さんこんにちは。突然ですが皆さんはハワイと日本の関係について知っていますか？実は私はこのグローバルスタディ^(ママ)でハワイについて学ぶまではハワイと日本がとても関わりの深い国であるということは、恥ずかしながら知りませんでした。今回のグローバルスタディを通して、自分のステレオタイプが崩れていくという、とても斬新な体験をしました。多くのことを学び得た中でも特に“宗教”の分野に関してとても興味を抱いたので今回は宗教を中心に皆さんに紹介したいと思います。皆さんも自分の中でのステレオタイプが変容していくという貴重な体験を追体験していただければ幸いです。

～登場人物紹介～

花子さん：宗教に関して高校の世界史や日本史の授業で聞いたことあるレベルの生徒。

“ハワイ”はリゾート地であるイメージが9割を占め、頭の中には「白い砂浜、青い海」しかない。中央大学商学部2年。

太郎くん：高校はミッション系の高等学校に通っていた生徒。キリスト教については学校でも学ぶ機会が多々あった。中央大学法学部2年。

先生：ハワイの日系人についてとても詳しい先生。ハワイ島では彼を知らない人はいない。

第二日目～ここってハワイ??の巻～

前日の疲れをまだ残しつつグローバルスタディー行は車でとある墓地を目指していた。

花子「先生—。おはようございます。」

太郎「おはようございます！今日はどんな日程ですか？？」

先生「おはよう。今日の日程は、ええと・・・。」

☆二日目のスケジュール☆

アラエ日系人墓地→キラウエア中腹の日系人強制収容所跡 見学
→パホア日系人墓地見学→NORISで夕食

先生「これが大まかな今日の日程だね。さあ、皆着いたよ。」

太郎「ここってお墓ですか？」

先生「そうだよ。ここは多くの日系人が眠るアラエ日系人墓地だよ。」

太郎「先生。なんでここはハワイなのに日本式のお墓なんですか？米国ってキリスト教のイメージがあるので違和感があります。」

先生「さっきも言った通りここには多くの日系人たちが眠るんだ。日本だって誰かが亡くなった時はその家系の宗派に基づいて法事を行ったりするよね？日本からハワイにやってきた日系人だってそれは一緒だったんだ。」



花子「つまり、彼ら日系人の祖先はこのハワイという土地で日本のやり方を少しずつ広めていったんだ。」

先生「ちょっとこっちに来てごらん。」

花子「先生これってなんですか？」

先生「これは慰霊塔だよ。」

太郎「ぬの、あい・・・？なんて読むんですか？」

先生「布哇は“ハワイ”って読むんだ。」

太郎「あー！なるほど。」

先生「日曜日はここで慰霊祭があるから、また日曜日に来るからね。」

太郎&花子「はい。」

(以下・省略)

(2) 物語論的アプローチによる自己変容プロセスの分析

取り上げた学生 A の事前学習におけるハワイへのイメージは、一枚ポートフォリオによると「○日系人とはいえどもハワイに住んでいるため日本人よりもアメリカの文化に染まっている。／○気さくで親切。／○日系人をよく知らないためあまりイメージもできない」というものであり、コラージュを作成した際のハワイのイメージについても「当時私は『ハワイは観光客が多く訪れるリゾート地である』というイメージが強く、海や砂浜、ヤシの木等の絵を用いて作成し、今思えば“表面的なハワイ”についてしか知らなかった」というものであった。「ハワイ＝常夏のリゾート地」という一面的な理解に止まっており、この段階でのハワイに対しての自己物語は、「隠蔽」が解除されていない状態であることを学生自身が認識している。

「隠蔽」を解除する契機として、学生 A は宗教に着目し、ハワイに対しての自己物語を変容させていった。特にフィールドワークでの気づきで「“お焼香”や“念仏を唱えること”は日本とまったく一緒だったが、本派本願寺ヒロ別院で礼拝を体験しに行った際に発見したステンドグラス、また教会に置いてあるような長椅子、英語で行われる説教等、日本人にとってはなじみがなく、違和感を覚えるものもあった」と述べているように、実際に体験したことにより「日本とアメリカのハイブリディティ」に気づいている。

その一方で、一枚ポートフォリオにおいて「本願寺の礼拝を体験して人間であるとは『老・病・死』を恐れることであり、それを通して『生きている』ことに感謝ができる」ときいて、すごくなった。この礼拝をきく前と世界観が変わった」と述べているようにハワイ日系人の「日本人としてのアイデンティティの保持」に触れ、日本人としての自分自身を相対化し、「世界観が変わった」と述べている。

また「日系人は日本に誇りを持ち、日本を愛し、日本の文化を愛し、新たな土地“ハワイ”でその文化を発展させてきた。ハワイの習慣や慣習も織り交ぜつつ、また一方で日本らしさも忘れずに。彼らがそうして作りだした文化というのは、日本の文化をハワイの土地で発展させたというよりは、日本とハワイの文化を織り交ぜて作りだした、まったく新しい文化のような気がした」という言説からは、ハワイ日系人の「日本人としてのアイデンティティの保持」「日本とハワイのハイブリディティ」への気づきを読み取れる。「ハワイはリゾート地である」というイメージにより「隠蔽」されていたハワイに対しての自己物語の多様性を描き出し、語り直す契機となっている。

続けて「私はその文化こそが、日本とハワイ、さらには日本と米国の架け橋になると気付かされた。最初はリゾート地である、というイメージしかなかったハワイ。プログラムを経験していくうちにハワイの中にある日本の文化に気付いた。プログラムをすべて終えた今では、それは日本の文化、

ハワイの文化といった切り離されたものではなく、それぞれが織り混ぜあわされながら変容して作られた、まったく新しい文化であり、その文化こそが日本とハワイ、日本と米国をつなぐ架け橋となっていることに気付いた。こんな素晴らしい文化を築いた日系人の方々に敬意を表したい」という言説からは、自己物語の変容を自覚化していることが読み取れる。

このようなフィールドワークでの体験を通して、次のようにハワイへのイメージが変わったと述べている。一枚ポートフォリオによる「○自分たちの意志をしっかりと持ち、日本が大好き。○ハワイにここまで日本文化を広めたたくましさが存在。○実際とても気さくで親切だった」という言説からハワイのイメージとして日系人を想像することができなかった学生が、「当事者性」を感じ取り、日系人の意志やたくましさに言及できている。

次にループリックに対応して作成した教材については、「振り返りシート」の言説から分析する。それぞれの観点については、「(気づき・自己変容) 宗教は信仰のある者が存在するところに根付き、その土地の文化や慣習を吸収しつつ、変容していく」「(調査) ハワイに存在する日本の宗派を探し、日本と異なるところを探す」「(資料活用の技能) 今まで撮った写真から、改めて日本の宗派と異なるところを探す」「(表現) 二人の架空の生徒役を用い、我々がハワイで体験したことを教材を読む人に追体験してもらう」「(知識・理解) ハワイの地で広まった日本の宗教は日本と異なるところがたくさんあり、それはもはや新しい宗教のようだ」と捉えている。このような観点の捉え方からすると日本の仏教とハワイの仏教を比較しながら、相違点と共通点を探していくことをねらいにしていることが分析できる。このことをふまえて、ハワイのイメージやステレオタイプを変容させるような体験ができるような教材を作成しようとしている意図が読み取れる。

作成した教材の自己評価においても「様々な表現方法がある中で、この教材を読んだ者に効果的に追体験をしてもらえる表現方法を選択した。花子と太郎という架空の登場人物に我々が体験したグローバルスタディ^(ママ)を会話方式でふりかえりさせることで、教材を読んでいる読者が実際にグローバルスタディ^(ママ)を体験しているような錯覚をおぼえることを期待した」と述べており、ループリックに対応するように自らの「体験による気づき」を「追体験させる」ということを重視している。また「初めは『ハワイという遠く離れた地で日本の文化が形を変えつつ、ハワイの人々に受け入れられ、ハワイの文化と融合したまったく新しい文化』ということにフォーカスをおこうと考えていたが、より狭い“宗教”という一種の文化に的をしぼり、教材づくりを行った。無宗教国家である日本で宗教を学問として考える機会がもっと増えることを期待し、この教材の作成にあたりました」とも述べている。このことから単に自らの体験による気づきを追体験させるだけではなく、「宗教」のあり方や意義について考察させることまでを期待している。このことは、自らの体験による気づきを内面化している点で重要である。

以上をふまえると、この事例では「ハワイはリゾート地である」という「隠蔽」された自己物語が「宗教を通して捉えられるハワイ日系人の今」というような自己物語をフィールドワークを体験することで呼び起こし、「宗教」のあり方や意義を考えることが大切であると感じたというような自己物語を語り直すことにつながったことを示している。

5. 結語 ―海外スタディツアーにおける「体験の言語化」の意義―

本論では、大学におけるハワイの日本人移民・日系人をテーマとした海外スタディツアーにおける体験の中で、参加学生が異文化に対する自らのステレオタイプを認識しながらそれを語り直し、多様な視点を持つこと、さらにその変容プロセスを何らかの手段で表現し、発信すること（本授業

では「教材づくり」がグローバル問題や異文化理解に対応するための能力の重要な要素と考え、その能力を身に付けるプロセスを検証することを課題とした。

このプロセスを検証する方法として物語論的アプローチを採用した。具体的には、ハワイでのフィールドワークを中心としたスタディツアーを体験した学生の自己変容のプロセスを物語論的アプローチにより分析した。ハワイでのフィールドワークは、「ハワイ＝楽園＝パラダイス」(矢口 2011: 9) という日本人の中にある支配的なハワイイメージにより「隠蔽」されていたハワイに対しての自己物語の多様性を描き出し、語り直す契機となっていた。フィールドワークを通して学生が得たハワイ日系人の「日本人としてのアイデンティティの保持」、「日本とハワイのハイブリディティ」への気づきは、「隠蔽」を解除し、自己物語を変容させていった。ここに本スタディツアーの教育的意義がある。

以上の分析から海外スタディツアーを意義あるものにする条件として、①自己物語を変容するための仕掛けがあること(プログラム内容)、②フィールドワークの体験を言語化する手法が明確になっていること(一枚ポートフォリオ、振り返りシートなど)、③成果物までを含めた評価方法を事前に提示していること(ループリック)、④プログラムを通して学生の自己物語の変容がグローバル問題や異文化理解に対応するための能力の重要な要素であることを認識するようにデザインされていること、の4点を挙げるができる。

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターでは、今日の学生が「ボランティア活動、留学、サークルなど多様な経験を積んでいるが、経験で考えられたことを次なる思考に結びつけられない。結果として、社会の出来事を自分と結びつけて考えられない」という危機意識に立って「セカイの出来事を『自分ゴト化』する」ための科目として、2014年度からグローバルセンター科目の中に「体験の言語化シリーズ」⁶という科目を新設した。この科目は、「体験を自分の言葉で語る力、体験から社会の課題を発見する力、こうした体験から学ぶ力をつけることで意欲的に学び、行動」できる学生を育てようとするもので、グローバル・リーダーの育成にもつながっているとしている(早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター 2015)。このような意味で、本論で検討した「グローバル・スタディーズ」においても、一枚ポートフォリオ、振り返りシート、作品(教材)の解説は、「体験の言語化」をめざしたものであり、「主語としての自分」を意識化させるものといってよい。ただ、口頭での言語化は、プログラム最後のハワイ大学ヒロ校で行った振り返りの時間だけであった。「体験の言語化」の意義を考えると、次のプログラムでは口頭による学生の語りの機会をプログラムの過程で逐次入れていくことが課題であり、自己変容の契機を知る上で大切である。

今後、グローバル化に対応した高等教育改革の中で、大学における海外スタディツアーの重要性はますます高まると思われる。中でも本論で取り上げた日本人移民・日系人をテーマにしたスタディツアーは、グローバル化の進展に伴う人の移動により今後たくさんの移民を受け入れることが課題とされている今日の日本の現実の中で、これからの多文化共生社会を生きる若者にとって「共生」に向けての資質を養う上で意義がある(森茂・中山編 2008、森茂・中山 2011)。

註

¹ SEND とは文科省のグローバル人材育成における取り組みの一つを表す用語で、「Student Exchange - Nippon Discovery」の略である。日本人学生が留学先の現地の言語や文化を学習するとともに、現地の学校等での日本語指導支援や日本文化の紹介活動を通じて、学生自身の異文化理解を促すことを海外留学の目的のひとつとして位置づけ、将来、日本と留学先の国との架け橋と

なるエキスパート人材の育成を目指す取り組みを指す。

- ² http://globalization.chuo-u.ac.jp/resources_chances/abroad/global_program/global-studies/
2015年度は、日本史学、西洋史学、英語文学文化、社会学、社会情報学、教育学、心理学、体育学専攻の9名の教員によって実施された。尚、森茂の授業には、津山がTAとして参加した。
- ³ グローバル人材育成推進会議（2011）「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ」7頁。http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_kyodo/sanko1-1.pdf
- ⁴ 2014・2015年度の森茂担当の「グローバル・スタディーズ」の概要と学生が作成した作品（教材）については、（森茂編 2015, 2016）参照。
- ⁵ 2015年12月5日には、大学における「海外体験学習」研究会（JOELN）が「体験学習の成果とルーブリック」というテーマで年次大会を行った。
- ⁶ 「体験の言語化」の科目一覧とシラバスについては、下記参照。<http://www.waseda.jp/wavoc/open/taiken-index.html>

引用文献リスト

- 浅野智彦 2001 『自己への物語的接近— 家族療法から社会学へ—』 勁草書房。
- 居城勝彦・中山京子・織田雪江 2014 「スタディツアーにおける学びと変容 — グラム・スタディツアーを事例に—」 日本国際理解教育学会編『国際理解教育』Vol.20、明石書店、51-60。
- 加藤恵津子・久木元真吾 2016 『グローバル人材とは誰か — 若者の海外体験の意味を問う—』 青弓社。
- 林加奈子 2010 「開発教育としてのスタディツアー再考 — 省察と行動の視点から —」 開発教育協会編『開発教育 2010』Vol.57、明石書店、183-198。
- 藤原孝章 2013 「学士教育におけるグローバル・シティズンシップの育成 — 『海外こども事情A』（海外体験学習）の場合—」 日本グローバル教育学会編『グローバル教育』Vol.15、58-74。
- 堀哲夫 2013 『教育評価の本質を問う — 一枚ポートフォリオ評価OPPA—』 東洋館出版社。
- メジロー、ジャック、金澤陸・三輪建二監訳 2012 『おとなの学びと変容— 変容的学習とは何か—』 鳳書房。
- 森茂岳雄編 2015 『日系アメリカ人の経験に学ぶ— グローバル教育の教材づくり—』（2014年度「グローバル・スタディーズ」報告書）中央大学。
- 森茂岳雄編 2016 『ハワイ日系人の経験に学ぶ— グローバル教育の教材づくりⅡ—』（2015年度「グローバル・スタディーズ」報告書）中央大学。
- 森茂岳雄・中山京子編 2008 『日系移民学習の理論と実践— グローバル教育と多文化教育をつなぐ—』 明石書店。
- 森茂岳雄・中山京子 2011 「移民学習論 — 多文化共生の実践にむけて—」 日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、307-319。
- 矢口祐人 2011 『憧れのハワイ— 日本人のハワイ観—』 中央公論新社。
- 吉田文 2014 「『グローバル人材の育成』と日本の大学教育— 議論のローカリズムをめぐる—」 日本教育学会編『教育学研究』81：2、164-175。
- 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター 2015 「体験の言語化 — 経験と思いを語ること。自分と社会を知ること。—」（体験の言語化プロジェクト初年度成果報告シンポジウム～「対話型、問題発見・解決型教育」の実践～）、パンフレット。

Educational Significance of Overseas Study Tour Program for Making Teaching Materials about Japanese Immigrants in Hawai'i: An Analysis of Self-Transformation Process of University Students Utilizing Narrative Theory Approach

Takeo Morimo (Chuo University)

Naoki Tsuyama (Graduate Student, Chuo University)

This research explored conditions for educational significance of an overseas study tour program and issues of development of the program through an analysis of self-transformation process of the university students who joined in the overseas study tour program focusing on Japanese immigrants and Japanese Americans in Hawai'i. In this study, authors analyzed how they verbalized their experiences, realized self-transformation, and acquired competences in order to deal with global issues through "Global Studies," a class at Faculty of Letters, Chuo University, by utilizing narrative theory approach.

The discussions of this paper clarified that there are four conditions which will make an overseas study tour program significant: 1) There is a structure for transforming "self-story" in the program. 2) Methods to verbalize experience of the fieldwork, such as one page portfolio and feedback sheets, are clearly explained to the students. 3) Evaluation method such as rubrics is presented in advance, including educational materials made by the students. 4) The program is designed for students to realize that the transformation of self-story is one of the important elements for competence dealing with global issues.

Keywords : Japanese Immigrants in Hawai'i, Overseas Study Tour Program, Narrative Theory Approach, Self-Transformation, Verbalization of Experience, Rubric

〈研究ノート〉

和歌山県における移民をめぐる取り組みと今後の展望

東 悦子（和歌山大学・教授）

＜目 次＞

はじめに

Ⅰ． 和歌山県における出移民の概要

1-1 和歌山県沿岸地方とアメリカ、カナダ、オーストラリア移民

1-2 那賀地方とアメリカ移民

1-3 和歌山県のブラジル移民

Ⅱ． 和歌山における移民をめぐる取り組み

2-1 移民展示を通して

2-2 移民学習用教材（DVD）の制作と活用

2-3 大学における移民学習の試み

Ⅲ． 移民をめぐる今後の展望

3-1 県人会との交流

3-2 新たな交流の芽生え

おわりに

キーワード：移民展示、移民学習、移民学習用教材（DVD）

はじめに

日本からの集団的移民は明治期に遡る。和歌山県からも多くの県民が、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ブラジルなどへ仕事を求めて海を渡り、有数の移民輩出県と称されている¹。今もなお同県では、戦後に移民し帰郷した人々や親類縁者が移民したという人々に会うことができる。一方、そういった人々も高齢化がすすんでいることを考えれば、日本人が仕事を求めて世界各地に渡ったことや移民先での体験などを語ることでできる人々、又はその体験を直接に共有することができた人々から、次世代へ語り継ぐことが困難になりつつある。それゆえ移民の歴史に関わる記憶やモノの掘り起こしと保存は急務であるといえる。

このような記憶やモノの保存の課題や次世代への継承の課題とともに、現在の日本社会が直面している課題がある。すなわち、1990年の出入国管理及び難民認定法の改正・施行以来、日本の労働力の一角をなしてきたといえる日系人が直面している、地域コミュニティにおける共生の在り方や親とともに来日した子供たちの就学問題をはじめとする諸々の課題である²。

少子高齢化社会を迎え、日本は移民を受け入れるべきか否かという議論がメディアで取り上げられるようになってきた昨今、先述の課題が浮上する百年以上も前に他国の労働力の一角を成した、日本からの出移民の歴史を振り返り、移民先での仕事や生活などの状況を知ることによって、現在に暮らす私たちが参考にすべき点も多々あるのではないだろうか。

拙稿では、和歌山県内における移民をめぐるさまざまな取り組みの事例から、移民展示や移民学習を取りあげ、移民の歴史の保存と継承にかかわる点に焦点をあてつつ、それらの取り組みを通して、

私たちが過去の歴史からどのようなことを学びうるのか、あるいは過去と現在の間にどのような架け橋をかけることが可能であるのかについて一考したい。

I. 和歌山県における出移民の概要

明治の頃より、和歌山県は世界各地への移民を輩出している。ハワイ、アメリカ本土、カナダ、オーストラリアや、フィリピンなどの南洋地方、インドネシアなどの東南アジア方面、ブラジル、ペルー、メキシコ、グアテマラなどの中南米方面、さらには満州へと他方面にわたる（『和歌山県移民史』³：3-13）。ここでは、後述する移民学習の授業において取りあげる地域を中心とし、現在の和歌山県においてなお移民の母村としての特徴を有する太地町などの紀伊半島沿岸地方の町や、移民した先人の記録や遺物の収集が進みつつある那賀地方などを取り上げて、和歌山県における初期移民の歴史の一端を概観する。

1-1 和歌山県沿岸地方の人々とアメリカ、カナダ、オーストラリア移民

（1）ハワイへ

1868（明治元）年、耕地労働者として日本人 153 人がハワイへ渡った。後に「元年者」と呼ばれる人々は日本で最初の契約移民といわれる。その後、しばらく移民は中断されたが、1885（明治 18）年 2 月 8 日、第一回官約移民 953 人がハワイへ渡り、この時、和歌山県からも 22 人がハワイへ渡っている。また同年 6 月の第二回官約移民 983 人中にも 33 人の県人が含まれた（『和歌山県移民史』：477-479）。

当時人々は、日本政府とハワイ王朝との移民協定にもとづき砂糖耕地で 3 年間働く契約でハワイに渡り、契約期間後は、帰国する者、ハワイに残る者、あるいはアメリカに転航する者に分かれた。また 1898 年、ハワイ王国がアメリカ合衆国に併合されて以降、米国移民条例により日本人は労働契約にしばられることなくハワイへ渡航できるようになり、砂糖耕地で働く必要はなくなり、さまざまな職業に就くことができるようになった。この後の 1899 年から 1900 年にかけて、和歌山県から、漁業に関する深い経験と知識と技術を有する人々が続々とハワイに渡航するようになり、特に和歌山県南部の西牟婁郡、串本地方の漁師がハワイに渡って水産業に従事し、やがてはハワイの鰹漁業や鮪漁業などを独占するまでに発展したとある（田坂 1985：56）。

また、1924（大正 13）年にハワイの日本領事館が実施した調査では、ハワイ全島の在留和歌山県出身者は 1124 人で 9 割までが漁業に従事し、オアフ島では全漁業家の 38% を占めていた。山口県や広島県出身者も漁業に従事する者が多かったが、近海で小魚の漁獲を目的とする者が多かった。それに対し、和歌山県人は主として鰹漁や鮪漁に携わった。和歌山県人を出身地方別でみると、西牟婁郡が全体の 8 割を占め、田並（現串本町）、江住地方（現すさみ町）が最も多いとされる（512-513）。

このような和歌山県南部の沿岸地方の人々の貢献により、1892（明治 25）年頃から始まったハワイの沿岸漁業は、1902 年ごろから近海漁業へ、1909 年ごろから遠洋漁業へと発展していき、魚の種類も漁獲量も増加した。

（2）アメリカへ

19 世紀末から 20 世紀の始め、ハワイより賃金が高く、開拓の途上にあり労働力の不足を補うために移民を歓迎したカリフォルニアなどへの日本人渡航者が次第に増えた。職種としては、農業、鉄道、鉱山労働者、漁業、商工業が主なものであったが、修学を目的とした学生の他に、何事か成さんと

志を懷き渡米したパイオニア達の多くが、学僕的家庭内労働に従事する、農園入りする、あるいは小規模の雑貨店やその他の商店を開いていたとしている（イチオカ 1992：49）。

和歌山県の紀南地方からも多くの人々がカリフォルニアに渡っている。特に紀伊半島沿海地方の漁村から渡航した人々は、1900 年初頭より、ロサンゼルス港の一角のターミナルアイランド（あるいは東サンペドロ）と呼ばれる島に集住し、1930 年代には 3000 人程の日本人漁師のコミュニティが形成された。その大半が和歌山県出身者で、日本生まれの 1 世とアメリカ生まれの 2 世で構成された。彼らは島の缶詰工場が所有する借家に暮らし、男性は漁師として働き、女性は缶詰工場で働いた。1920 年代にカリフォルニアで水揚げされるビンナガマグロのほとんどは日系人漁師が捕獲したものであった（和歌山大学紀州経済史文化史研究所 2009：15）。

ターミナル島はアメリカの日本人村といえる社会であった。桃の節句や正月などの日本の文化が守られ、武道やすもう大会なども行われた。また一方では、若者たちはベースボールも楽しんだ。島には神社も教会もあった。このようなターミナル島の生活も第 2 次大戦の勃発とともに一変し、1941 年、パールハーバーが攻撃されたその日のうちに、同島の日本人会の幹部などの日系 1 世の男性指導者たちは FBI に連行された。その後の 1942 年 2 月 26 日、島に残った 2 世や女性全員に立ち退き命令がくだされる。人々がそれまでに築きあげたほとんどすべてのものが大戦時に一掃された。現在、ターミナル島に当時のコミュニティは存在しない（15-18）。

（3）カナダへ

かつてカナダのフレーザー河で鮭漁に従事した人々の多くは、和歌山県の漁村である三尾村（現日高郡美浜町三尾）の出身者であった。「カナダの三尾村」と呼ばれるほど同郷の人々が移民した。またカナダから帰国した人々は英語交じりのことばで話し、西洋様式の生活を持ち帰り、三尾村は通称「アメリカ村」と呼ばれる裕福な村になった。

日本から最初にカナダへ渡った長崎県出身の永野萬蔵はカナダ移民の父として知られているが、和歌山県におけるカナダ移民の父は、三尾村の繁栄とカナダ鮭漁業の発展に貢献した工野儀兵衛である。儀兵衛は 1854（安政元）年 5 月 23 日、三尾村に生まれ、14 歳で京都の宮大工に弟子入りし、19 歳の時、三尾村に帰り棟梁として働きはじめた。1883 年頃、三尾浦に防波堤を造るという計画があり、漁場争いや自然災害などにより追い詰められていた郷土の漁業を振興し、養魚場を造ろうと考えた儀兵衛は入札に参加したが、工費の点で話がまとまらなかった。その頃、横浜に住みカナダ航路の貨物船の船員をしていた従兄弟の山下政吉から、カナダは漁業や農場でも有望との手紙が届き、1886 年、儀兵衛は横浜に向かい、約 3 年の間にカナダ航路の船員などからカナダの状況、旅費・労働条件などを調査した。

その後帰郷するが、1888（明治 21）年 3 月に再び横浜へ向かい、同年 8 月英国貨物船アビシニア号で単身渡航し、9 月 5 日にピクトリアに上陸後、バンクーバーを経由して、鮭漁業の基地であるスティブストンに到着する。当地の漁場としての豊かさを「フレーザー河にサケが湧く」と手紙に書き送り、弟や親戚・友人を呼び寄せた。1889 年に数名、その後毎年十数名、数十名と集団的に移民した。

1891（明治 24）年、儀兵衛は白人の事業主に呼び寄せを依頼され帰国し、村民を連れてカナダに戻り、保証人として仕事の世話をした。村では「連れもて行こら」（一緒に行こう）という合言葉が流行したという。儀兵衛は「加奈陀三尾村人会」の設立（1900 年）や「フレーザー河日本人漁業者団体」の結成にも尽力した。当時の B・C 州漁業活動の 60～70% は和歌山県人により営まれ、三尾出身者がその中心をなし、スティブストンに「カナダの三尾村」が出現した。（西浜 2010：12-17）

(4) オーストラリアへ

オーストラリアにも和歌山県人が多く渡っている。その人々の主たる労働に高級ボタンの材料とされた白蝶貝の採取があった。

1882年(明治15)、木曜島発展の先駆者といわれる中山奇流(和歌山県)や渡辺俊之助(広島県)が渡豪している。翌1883年、英国人ジョン・ミラーに雇われた日本人採貝夫37人が木曜島に渡り、それに続いて神戸方面から49人が渡航している。この中に和歌山県から、瓜田次郎兵衛、上村元吉、山口岩吉、芝崎伊左衛門、春日長助、竹田清七等7人がいた。その後も外国人に誘致され渡豪する者が増加し、1891年から1893年までの3年間にオーストラリアへの渡航者数は441人に達し、それまでに在留していた170-80人を加えると、約620人となり、その多くが和歌山県民であったとされる(『和歌山県移民史』:574-579)。

アラフラ海に面するダーウィン、ブルーム、木曜島は特に有数の採貝地として知られている。1897年、全豪在留邦人は2000人を突破し、木曜島で採貝労働に従事する日本人は、全従事者1500人の6割にあたる900人に達し、その約8割は和歌山県人であった。

タイバーの仕事は命がけで、潜水病やサイクロンで亡くなった人も多い。有数の採貝地にはそれぞれ日本人墓地があり、ブルームの日本人墓地には、同地の真珠ダイバーの歴史を語る石碑が立てられ、707基919名の墓碑がまつられている⁴(東2007:21)。

和歌山県から海を渡った移民の特徴として、太平洋と山々に挟まれた紀伊半島沿岸地域の人々は、先駆者の地縁的なつながりによる呼び寄せで移民し、漁師やダイバーとして活躍した人が多く、渡航先では故郷を同じくする人々のコミュニティさえ形成していたことがあげられる。

1-2 那賀地方と北米移民

和歌山県下において多くの移民を輩出したのは、紀伊半島沿岸部だけでなく、紀ノ川の中流に位置する那賀地方(現在の紀の川市、岩出市)は、和歌山県下におけるアメリカ移民の発祥の地として最古の地であろうとされる。旧那賀郡内でも第一位の移民村が池田村(現紀の川市内)である(『和歌山県移民史』:147)。

池田村あるいはこの周辺地域から渡米者を輩出した要因は、紀伊半島沿海地域とは異なる点がある。伊達多仲、本多和一郎、J.B. ヘール牧師らの存在が、村内の人々を米国へと引き寄せた要因といえる。

池田村三谷出身の伊達多仲は陸奥宗光の甥で、1872(明治5)年頃に米国に渡ったといわれている。多仲は叔父の牧場で働いていて牧畜を学ぶために米国に渡った。渡米後、米国の大学で教養を身につけ、その後、牧師となった。多仲によって郷土に米国事情が伝えられ、村内の人々の渡航への気持が高まったといわれている(148)。

池田村北大井出身の本多和一郎(1852-1895)は福沢諭吉の慶応義塾に学び、帰郷後の1880(明治13)年、私塾共修学舎を開き、渡米相談所を舎内に設け、洋学、漢学、歴史教育を行った。塾生には渡米して成功をおさめた者も多く、多数の名士を輩出している。共修学舎の塾生に、堂本誉之進(渡米、貿易商)、堂本憲太郎(渡米、園芸家)、三谷幸吉郎(渡米、神学博士、「滝本」と改姓)、里村達之助(渡米、実業家、湯浅銀之助の従兄弟)、有本常太郎(同志社出身旧和歌山教師)、本多熊太郎(ドイツ大使)、根来源之(弁護士、ハワイで労働争議の弁護)らがいる(148-149)。

J.B. ヘールは、1877(明治10)年に来日し、1879(明治12)年に大阪市西区南堀江町に家を借り、兄A.D. ヘールと共に公開説教を始めている。1881(明治14)年、小幡駒造を伴い紀州伝道を開始し、

1893（明治26）年には和歌山市へ移住し、紀北、紀南、三重県、奈良県各地まで赴いている。ヘル牧師は宣教を通じて、アメリカを本県民に紹介した。1883（明治16）年に本多和一郎も洗礼を受け、共修学舎を根来から北大井の自宅に移し、郷土の青年の教育と伝道に献身しつつ新進発展の気風を吹き込んだとされる（156-159）。

那賀地方から渡米して成功を収めた人々の一人に、湯浅銀之助（1869-1926／龍門村荒見、現紀の川市荒見出身）がいる。1890（明治23）年にみかん輸出のため渡米し、サクラメントで果樹園の仕事に従事した。1897（明治30）年、雑誌『新日本』を創刊し、1902（明治35）年には新聞『羅府日本』を創刊している。南カリフォルニア在留日本人のリーダーで、南加和歌山県人会の初代会長であった（421-422）。

1-3 和歌山県のブラジル移民

日本からブラジルへの移住は、1908（明治41）年、793人の移民（契約移民781人と自由移民12人）を乗せた「笠戸丸」が神戸港を出発し、52日間をかけてサントス港に到着したことに始まる。（財団法人日伯協会2012：70）。和歌山県からブラジルへ移民を送りだしたのは、それよりも後年である。

1910年代半ばに熊本・広島・岡山・和歌山などの先進移民卓越県では、アメリカでの排日問題に対処するという目的から海外協会が設立された。同協会は、官公庁舎内もしくはその外郭団体に本部を置き、知事を会長とし、内務省（のちには拓務省）からの補助金をうける半官半民団体であった。海外事業に関する映画と講演の主催、渡航手続きに関する小冊子の配布などの活動を通して、さまざまな情報を提供し移民を奨励した（坂口2010:59-60）。

和歌山県では1919（大正8）年10月、民間団体として「和歌山県海外協会」が設立される。同協会は会員の持ち寄りや寄付金により経費を賄い、移植民の保護活動と相互の連絡を図ることを目的とし移民の祖国との連絡や移住希望者の斡旋所としての役割を担い、ブラジルへの移住を中心に斡旋などを行っている。その後1927（昭和2）年、和歌山県海外移住組合が設立され、全国組織の海外移住組合連合会と連携し、県下で講演会や座談会、啓発活動、勧誘活動を行った（和歌山大学紀州経済史文化史研究所2014：17）。

同協会などの活動に加え、和歌山県のブラジル移民輩出を考えるうえで欠くことができないのは、松原安太郎の功績である。1942年、第2次世界大戦へのブラジルの参戦によって日本とブラジルの国交は断絶する。1951年に国交が回復し、1953年にはブラジルへの日本人移住が再開されるが、この移住再開に貢献した人物の1人が和歌山県日高郡岩代村（現みなべ町）出身の松原安太郎であった。1918年にブラジルに渡っていた松原は、1952年に一時帰国し、8年間で約4000家族、合計約2万人をブラジルに受け入れる移住計画の実行について政府の要人と折衝し、日本政府は全国から移民を募集することとなった。1953（昭和28）年には、和歌山県に移民課が設置され行政の立場からも移民を支援した。1953年7月、和歌山県の戦後移民の第一陣として、マツグロツ州ドラードス連邦植民地（松原移住地）への22家族を含む112人がブラジルへ移住した。第2次世界大戦の戦前戦後を通じ5800人余りの県人がブラジルへ移住している（東2014：1-4）。

以上、和歌山県における初期移民の概要を捉える目的で、特徴的な点を中心に取りあげた。同県における移民輩出の要因は先駆者による呼び寄せなどの共通点がある一方、移民送出国と受入国の状況、地域の経済的あるいは地理的状況や個人的事情なども考えられ、さまざまな状況を地域ごとに丹念に見ていく必要がある。

Ⅱ. 和歌山における移民をめぐる取り組み

ここでは先述した移民の歴史を背景として、和歌山県内において、大学ならびに移民・移住に関わる機関や団体が実施してきた取り組みに関して、それによる成果や意義について考察を試みる。

2-1 移民展示を通して

和歌山県において、和歌山大学や移民を多数輩出した地域の移民資料館や歴史資料室あるいは国際交流協会などの移住地と交流を図っている機関や団体が、2009年を起点とする5年間に、各々の独自性を有効に活かしつつ、必要に応じて連携を図りながら、移民・移住をキーワードとする調査、研究、展示、シンポジウム、交流などに取り組み、一定の成果を挙げてきた。それらの事業を通して得られた成果の概要をまとめると、①展示の制作を通して、移民・移住に関わる機関や団体間に顔の見える関係と連携が構築された、②展示資料が見る人の記憶を呼び覚まし新たな情報が得られた、③展示の図録は移民資料の記録となり保存と継承に有効な役割を果たす、④和歌山県の移民について、それを知らない世代に伝える一助となった、⑤移住者に思いを馳せ、現在に生きる者にとってもさまざまな学びとなった（東 2015：65-66）。

表1は、上述の5年間の取り組みに、2015年度に実施された展示やシンポジウムなどの事業を加えた一覧である。

表1 2009-2015年の取り組み

実施年	事業の種類	タイトル
2009年	展示	特別展「紀伊半島からカリフォルニアへの移民 ― サンピードロの日本人村 ―」
	シンポジウム	「和歌山から世界への移民―先人の歴史を学び、新たな国際交流へ」
2010年	展示	企画展「虹の架け橋 ― 和歌山からブラジルへの移住者たち ―」
2011年	展示	企画展「移民の仕事とくらし ― アメリカ、カナダ、ブラジル、オーストラリア―」および「世界をつなぐ和歌山県人会との交流」
	シンポジウム	「和歌山から世界への移民Ⅱ～過去から現在、そして未来への絆を紡ぐ」
2012年	展示	企画展「移民船に想いを馳せて ― 絵画と資料でつづる移住者の船上生活 ―」
2014年	展示	特別展「移民と和歌山 ― 先人の軌跡をたどって ―」
	シンポジウム	日本移民学会開催校企画シンポジウム「移民と和歌山 ― 移民母県和歌山の取組」
2015年	展示*	パネル展示「移民と和歌山2015」
	展示*	第1弾和歌山大学紀州経済史文化史研究所×国際協力機構（JICA） 「連れもて行こら 紀州から！―世界にひろがる和歌山移民―」 ※横浜発の移民展が和歌山県内を巡回した。
	展示*	「アメリカ移民の歴史と芸術家たち」
	ミュージアム トーク&シン ポジウム*	I. 「アメリカ移民の歴史と芸術家たち」におけるミュージアムトーク II. シンポジウム「移民をめぐる和歌山の今とこれから」 基調報告およびパネルディスカッション

*平成27年度文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業である。 東（2015）に基づき筆者作成

一覧に示された 2014 年度の特別展「移民と和歌山 ― 先人の軌跡をたどって ―」およびその展示期間中の 1 日にあたる 6 月 29 日に開催されたシンポジウム「移民と和歌山－移民母県和歌山の取組」における各機関や団体による報告は、5 年間の総括という意図のもと企画されたものである。特にシンポジウムは、第 24 回日本移民学会のプログラムの一つである開催校企画として開催されたもので、和歌山県のみならず全国のあるいは海外からの研究者や移民に関心を寄せる人々をも対象として、和歌山県の移民をめぐる取り組みを発信するものであった。これが一つの契機となり、2015 年度、かつて大勢の移民たちが出港した横浜の地において、国際協力機構（以下、JICA）が主催する特別展示で和歌山の移民が取りあげられた。

JICA 主催による特別展示は「連れもて行こら紀州から！― 世界にひろがる和歌山移民 ―」と題して、2015 年 3 月 8 日から 5 月 10 日までの会期で開催された。JICA 職員が和歌山県下を巡り資料収集にあたり、それに応じて移民に関わりのある機関や団体あるいは個人が、各々の所蔵資料を出陳した。特別展示の初日には、和歌山県から関係者らもオープニング・セレモニーに出席し開催を祝った。（国際協力機構 HP：<http://www.jica.go.jp/yokohama/topics/2014/ku57pq00000dypdt.html> 参照）。

2009 年以来、和歌山県下においてさまざまな連携が実現し、各機関や団体の間にネットワークが広がりつつあった 5 年の節目を迎えた直後に、関東圏の JICA 横浜との連携にまで発展したことは、和歌山県内の移民や移住に関わる機関などにとって、県外へ向けての発信という大きな意味があったのではないだろうか。さらにその後、JICA との共催のもとに和歌山県内各所において巡回展を展開している。

第 1 弾として、2015 年 7 月 7 日から 7 月 24 日までの期間、和歌山大学紀州経済史文化史研究所において巡回展が開催され、その後県内を巡回している。各会場では、JICA によって制作されたパネルが展示され、会場の規模と各地域の特性を活かして、全てのパネルを展示する会場もあれば、地域により根ざしたテーマのパネルを厳選し、主催機関が所蔵する資料などと共に展示されている。

表 2 和歌山県内巡回展一覧

日程	主催（会場など）
2015年 7月7日～7月24日	和歌山大学紀州経済史文化史研究所（紀州経済史文化史研究所展示室）
8月3日～8月31日	（公財）和歌山県国際交流協会 （和歌山県国際交流センター和歌山ビッグ愛 8F）
9月 4日～9月5日	和歌山県立日高高等学校（学園祭にて）
11月12日～11月15日	串本町教育課（串本町文化センター）
2016年 2月2日～2月16日	那賀移民史懇話会（紀の川市打田生涯学習センター）
2月26日～4月1日	和歌山県中南米交流協会紀南支部（田辺市文化交流センター交流ホール）

JICA和歌山デスクの情報提供に基づき筆者作成

和歌山大学で開催された巡回展では 184 名の来場者（芳名用紙記帳者）があり、その内訳は、一般の人々および同大学に在籍する学生や教職員の来場者であった。展示内容に関して、来場者のアンケートを見てみると、興味・関心を喚起した展示は、「全て」「移民のことについてのパネル」「筆筒型移民トランク」「バンクーバー朝日」「ボタンの型ぬき（白蝶貝）」「『ブラジル渡航の栞（一）』」「文献が多くて良かったです！」など、パネルに興味を持つ人、モノ資料に興味を持った人、文献に興味を示す人とさまざまであった。来場者の感想はすべて好評価で、「知らない和歌山の移民の歴史が

わかった（20歳未満）」「すばらしい展示ですね（40歳代）」「幅広い視点からの展示で、充実していたと感じています（40歳代）」などに代表される。参加者の感想からは、先述した5年間の成果の一つと同様に、和歌山県の移民について、それを知らない世代に伝える一助となっていることがうかがえた。さらにもう一つの成果は、巡回展の開催を通して、和歌山県下のさまざまな機関や団体がJICAとの共催事業を展開し、和歌山県外の海外移住をテーマとする機関との新たな連携を実現したことである。

2-2 移民学習用教材（DVD）の制作と活用

ここでは、かつて和歌山県からブラジルへ移民した人々の歴史や現在もブラジルに暮らす2世や3世の人々の声を伝える映像記録（DVD）の制作とその活用事例を取り上げて、移民学習の試みについて述べる。

（1）ブラジル映像記録（DVD）の制作

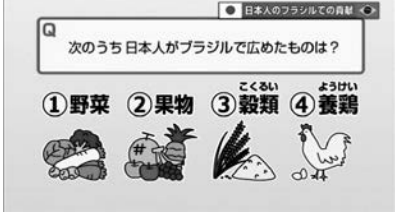
（公財）和歌山県国際交流協会では、2014年4月に開催された在伯和歌山県人会連合会創立60周年記念式典への慶祝団の訪問にあわせ、和歌山県よりブラジルへ移住した先人の足跡を辿るため、その生活・文化・子弟教育を中心にインタビューを実施し、後世への記録映像として、ブラジル映像記録（DVD）が制作された。以下、同DVDを移民学習用教材と呼ぶ。

企画・制作にあたっては、ブラジル移民映像記録編集委員会が組織された。移民・移住をキーワードとして、交流・調査研究・資料収集・展示などを行ってきた機関や団体などから委員が選出された⁵。一年間をかけて、ほぼ毎月1回の割合で委員会が開催され、内容の構成、取りあげる素材、ナレーターの台詞などの詳細が検討され決定された。さらにDVD完成後の活用方法も検討された。

移民学習用教材は、入門編『和歌山とブラジル 未来へのかけはし～移民の歴史と今、そしてこれから～』（20分版）と同タイトルの一般編（25分版）の2種類のDVDが制作された。その手順としては、一般編の内容を決定したのち、一般編からさらに内容を精査し、小学校高学年および中学生を対象とすることを想定して、時間を5分間短くし、適宜アニメーションを入れるなど、児童や生徒の興味が継続しやすいように工夫を加えた。完成したDVD（入門編）の概要を表3に示す。

表3 入門編『和歌山とブラジル 未来へのかけはし～移民の歴史と今、そしてこれから～』

構成	主なトピック	DVD映像の一場面より抜粋
■プロローグ 「ブラジルの位置とイメージ」	・ブラジルの大地 ・地球儀上の日本とブラジル ・イグアスの滝、サッカー、リオのカーニバル ・ブラジルの街中（多様な文化と人々） ・和歌山県人会（サンパウロ）	
■テーマ1 「なぜブラジルに日本人がいるの？」	<問いかけ> Q1 「移民」「移住」って何だろう？ Q2 なぜブラジルにいったの？ Q3 ブラジルへはどのようにして移住したの？ Q4 ブラジルではどのような生活をしていたの？	

■テーマ2 「移住した人々の 今、～ブラジルの中 の日本～」	・ブラジルの街中（鳥居、南米本願寺など） ・在伯和歌山県人会の家庭で（仏壇、日本食をつくる様子、インタビュー） ・日系人婦人会による盆踊りの練習風景	
■テーマ3 日本人のブラジル での貢献	・クイズ「日本人がブラジルで広めたものは？」 ・ブラジル社会でどのような生き方をしてきたか？ ・ジャポネス・ガランチード ・在伯和歌山県人会60周年記念式典	
■テーマ4 「これからの国際 交流 日本と ブラジル」	・日本語学校で学ぶ子供たち（インタビュー） ・子弟受け入れ事業（和歌山に来た日系青少年、ホームステイの様子） ・今後、期待すること（県人会員へのインタビュー）	
■エンディング	<視聴者へメッセージ> 「みなさん自身も、ブラジルと日本、ブラジルと和歌山とのつながりを調べて、これからの私たちの交流について考えてみませんか？」	

DVD入門編『和歌山とブラジル 未来へのかけはし～移民の歴史と今、そしてこれから～』（企画・制作：公益財団法人 和歌山県国際交流協会）に基づき筆者作成

（２）移民学習用教材（DVD）の活用

教材の完成とともに、（公財）和歌山県国際交流協会では、その活用方法にも工夫がこらされた。その一つとして、「移民のDVDと展示等に関する作文コンテスト」の開催が企画された。これまで、同協会では、国際交流に関するテーマで作文と絵画のコンテストを実施してきたが、2015年度はDVDが完成したこともあり、テーマを「海を渡った和歌山県人たち」と設定して募集が行われた。募集要項を引用し概略を表4にまとめる。

表4 募集の概要

平成27年度テーマ	「海を渡った和歌山人たち」
「移民」ってなんだろう？	「移民」とは、仕事を求めて、外国などに渡った人や、その後、そのまま永住した人たちのことです。和歌山県からは3万人を超える人たちが海を渡り、その子孫も含め北米や中南米を中心に様々な国で活躍されています。このような人たちについて、特にその歴史や生活について調べてみましょう。また移民のDVDや展示等も見てみましょう。そして、そこで気づいたことや学んだことを作文にしてみませんか？
応募資格	和歌山県内在住の小学校高学年（5・6年生）・中学生・高校生など
応募内容	「海を渡った和歌山人たち」をテーマに、自由に題を考えて書いてください。
応募締切	平成27年11月30日（月）必着

（公財）和歌山県国際交流協会発行「募集要項」に基づき筆者作成

同コンテストの結果については応募締切日の関係から、本稿で取り上げることはできないが、コンテストに応募する目的で、児童や生徒がDVDを視聴する、図書館などで移民について調べてみる、移民の展示を見学するなどの過程において、子どもたちはそれぞれに移民に関して学び、学んだことを作文として文字化することによって、さらに思考が深められると想定された。

また、もう一つのDVDの活用方法として、移民学習に関心を寄せる和歌山県内の学校に配布し、要望に応じて学校に出向き、授業を行うプログラムも企画されている。この出前授業は、（公財）和歌山県国際交流協会を窓口として、DVD制作に取り組んだ委員らが日程やテーマに応じて協力することとした。これまでに和歌山県中南米交流協会代表が小学校に出向きDVDを用いて出前授業を実施している。また同プログラムの一環として、県内中学校の要請により、委員の一人が、DVDの内容を発展させて人権をテーマとした出前授業を行う予定となっている。

2-3 大学における移民学習の試み

2013年度、和歌山大学の教養科目の科目群「わかやま」学の内1科目として「わかやまを学ぶ」が開講された。同大学の紀州経済史文化史研究所がコーディネーターとなり、学内で「わかやま」をフィールドとして調査・研究を進めている教員の研究成果の一端を学生に提供し、同大学の学生が「わかやま」をよく知り、「わかやま」を発信できることを目的とした。第1回目の開講時の履修登録者は96名で、同大学の4学部（教育、経済、システム工学、観光）から、1年から4年生までの全学年の学生が受講した（上村：2014）。毎年受講者は増加し、3回目の開講となった2015年度の受講者は345名であった。授業はオムニバス形式で、「わかやま」に関するさまざまな研究分野の教員が1コマ・90分ずつを担当し、ガイダンスとまとめの授業を除き、13の多様なテーマが提供された。その1コマにおいて、筆者は和歌山の移民をテーマとし、2015年度は「海を渡った和歌山人—ハワイ・アメリカ・ブラジル・オーストラリアへ—」と題して授業を実施した。授業内容とそれに対する学生の意見や感想を振り返り、学生たちが移民学習をいかに捉えていたのかを考察する。

（1）授業の概要

1コマ・90分の授業の流れは次のようであった。授業の前半では、和歌山県からの出移民の概要について、筆者が作成したパワーポイントを用いて説明した。また資料としてパワーポイントの概要をまとめたものを配布した。授業の後半は、先述した移民学習用教材DVD（入門編）『和歌山とブラジル 未来へのかけはし〜移民の歴史と今、そしてこれから〜』の視聴にあてた。視聴の際にはワー

クシートも配布した。表5に授業計画を示す。

表5 移民学習の1コマ (90分)

授業計画		
授業の流れ	内容 (T:教師、S:学生)	使用教材
1. 導入	映像(和太鼓演奏を行う子どもたち)視聴後、学生と質疑応答を行う。 T:ここはどこか? T:演奏している子どもたちはなぜブラジルに暮らしているのか?	・筆者撮影のビデオ(ブラジルで日本語を学ぶ生徒たちによる和太鼓演奏)
2. 講義	T:和歌山県からの出移民について、ハワイ・アメリカ・オーストラリア・ブラジルを取りあげ、現地訪問時の写真などを提示しつつ、概要を説明。 ※ブラジルは簡単に触れるにとどめる。	・パワーポイント ・資料:パワーポイントを見ることに集中できるように、説明の概要をまとめたハンドアウトを配布する。
3. DVDの視聴とワークシートの記入	T:小学校高学年および中学生を対象に作成されたDVDであることを説明。対象学年に応じた内容であるか、理解しやすいかなどについて「ワークシート」に記入を求める。 S:以下の点について考えつつ、ワークシートの問いに答える。 1. 和歌山県におけるブラジル移民の歴史を把握する。 2. DVDの感想:小・中学にとってわかりやすいか。 3. 移民の歴史を伝える方法を考える。	・ワークシート(質問1. ~3.) 1. 移民とは? 目的は?いつ頃から?どこに? 2. DVDの感想 3. 移民/移住の歴史を継承する方法について、あなたのアイデアを聞かせてください。
4. まとめ	S:感想シートの記入:授業について自由に記述する。	・感想シート(本コース共通の記入用紙)

筆者作成

具体的には、授業は3つの柱で構成された。まず導入として、授業者がドラードス(ブラジル)で撮影した、日本語学校に通う児童と生徒による和太鼓演奏の映像を流した。子どもたちはどこで演奏しているのか。学校の授業で和太鼓を学んだ学生はいるか等々、教員と学生との質疑応答を繰り返し、最後に映像の子どもたちは、ブラジルの日本語学校で日本語や日本文化を学んでいる生徒たちであることを伝え、なぜ、ブラジルにそのような子どもたちが暮らしているのか、と問いかける。そして授業の前半では、その歴史的な背景をみていくこととした。

次に、パワーポイントを活用し、和歌山県の移民の歴史の概要について、移民母村として特徴ある地域を例に挙げつつ、授業者が訪問した世界の移民先の写真などをみせながら視覚的に興味を喚起しつつ講義を行った。また学生がスクリーンと説明に集中できるように、和歌山県の移民についての概要を記述したハンドアウトを別途配布した。和歌山県の移民の概要では、次のような点を取りあげた。和歌山県の移民輩出数、要因、ハワイ(契約移民、漁業と串本や紀南地方)、北米(特にターミナルアイランドと太地町)、カナダ(工野儀兵衛、カナダの三尾村、三尾のアメリカ村)、オーストラリア(真珠ダイバー、特にブルームと太地町や近隣地域)、ブラジル(松原安太郎、松原移住地、

県人会) などである。ブラジル移民に関しては簡単な説明を行なった後、DVD を視聴した。

3つめの柱がDVD 視聴であったが、それは小学校高学年や中学生を対象と想定して編集していることから、大学生にその趣旨を説明したうえで、視聴を通して、その内容から学生が学ぶべき基本事項、児童や生徒用としての移民学習用教材 (DVD) への評価、そして移民・移住の歴史の継承の方法について考えさせる内容のタスクを課した。これらについて学生はワークシートを完成した。最後に当該授業の感想シートに記入を求め、授業を終えた。当日回収されたワークシートと感想はそれぞれ 271 名分であった。

(2) ワークシートより

DVD を視聴した感想の例を下記①から④に示す (下線・波線は筆者による)。移民学習用教材としてのDVD の内容について、多くの学生がわかりやすいとの感想を述べた。授業者の説明不足のためか、小・中学生にとって理解が容易であるかどうかの視点での意見は少なかった。②や④の感想にみられるように、ブラジルに暮らす日系人の生の声によって、移民した人々の今を感じることに繋がったのではないかと考えられる。また①や③の感想では、DVD の内容に関わる要望も述べられていたため、今後の出前授業の際などに口頭で説明を加えるための参考となった。

- ①話は要点をおさえてあり、見やすく、つかれなかった。あきさせない工夫もしており子どもでもみやすいかと。ただもっと興味をもってもらうにはインパクトが足りないように思います。ブラジルに行ってみたくなるようななにかが欲しいです。
- ②小学生にも割と分かりやすそうな感じがしたし、今の現地の人のインタビューも交えていたので、ただ移民の説明をされるDVDよりは現実味があった。また、史料も多くあったので良かったと思う。
- ③テンポが良くて分かりやすかったです。当時の写真や動画が興味深かったです。ブラジルと日本(和歌山)について、もっとつながりを前面に押し出してもらえたらなあと思いました。
- ④移民の歴史的背景が簡潔にまとめられているのと同時に、移住した人々自身の言葉で移民について語られているので説得力がありました。

次に、移民/移住の歴史を継承する方法についてアイデアを求めたが、それに関しては⑤から⑧のような感想が代表的なものであった (下線は筆者による)。

- ⑤学校の授業など学びの場において、移民の歴史や文化について考える機会をもうけることがもっと必要なのではないかと考える。
- ⑥テレビなどのメディアで移民/移住についてもっと多く取り上げる。
- ⑦口頭での伝承のように漠然とした継承方法ではなく、映像や画像で記録し、劣化しづらい記録媒体を使用する。
- ⑧DVDの中にもあった様に、ブラジルにいる日系人が日本へ来るだけでなく、日本にいる人がブラジルの日系人の町へ訪れ、昔から現在までの日本を教えていけば、双方向に良い影響をもたらすと思います。

⑤の例のように教育の場や講演会などを通して伝えていく方法を示した学生は非常に多かった。⑥のように、メディアの活用やSNSを活用してはどうかとの意見もあった。⑦は歴史の継承の上で急務

の点でもあり、人の記憶やモノの保存において、映像記録の制作やデジタル化および目録化などが必要とされる。⑧は交流をキーワードとする意見である。相互訪問や人的交流によって、知り合い、学び合うことが、相互の歴史的背景への興味や理解へとつながるのではないだろうか。

移民・移住に関わる専門家や関係者だけでなく、学生達にもさまざまなアイデアを求め、共に考えることは、興味深い気づきを提供してくれる結果につながった。それと同時に、移民/移住の歴史を継承する方法を考えること自体が、学生にとって一種の移民学習となりうることが期待された。

(3) 感想シートより

授業の最後に受講者に求めた感想から、いくつかの共通する観点が抽出できた。一人の感想の中に複数の観点が含まれていることも多かったが、ここでは共通の観点を切り口として、その特徴が顕著に見てとれる感想の例をあげる。その際、その共通点を命名し、各々の例の前に示した。

①「知る」から「関心・興味」へ

- ・ 今まで無関心だった移民のことをいろいろ知れて関心ができたし、もっと移民のことを知りたいと思いました。
- ・ とても分かりやすく、ききやすかった。和歌山に移民の歴史があるのは全くの無知だったので、そういったことを知れたというのはとても貴重な内容だと思った。あと、和太鼓は個人的にとても見るのがたのしかった。日本と外国の“つながり”を見ることができてとてもうれしかった。
- ・ 和歌山から移民が比較的多く出ていたということは初めて知りました。なぜ和歌山から多くの移民が出るようになったのか、当時の和歌山県の事情や和歌山県民の様子なども詳しく知りたいと思いました。

②「自分自身とのかかわりの中で」

- ・ 私の伯母が小さい頃、移民したことを思い出しました。苦労してコーヒー農園を造り、成功して裕福に暮らしていると後に聞きました。今はどうしているか知りません。でも多くの人が移民していたのにはおどろきました。
- ・ 僕の曾祖父と曾祖母は韓国から日本へ移り住んだ人なので、移民のことは自分にも関係のないことではないと思ってこの講義を聞いていました。

③「自分自身の学びとして」

- ・ 和歌山県の移民数が想像していたよりも多かったが、地理的に海と面していることを考えると、そういうものなのかな、と思った。大切な人のために新しい環境に身を置き、異なる価値観・文化の中で頑張っていくことは、よほど強い精神力を持っていなければならないことで、今の世に生きる自分もそこから学ぶことは多い。現在海外で働く予定はないが、将来どこで働くにしても移民の方のような強い心を持って頑張っていきたい。
- ・ 北米への移民の人は、英語独案内という本があり、行動力も、探究心も見習いたいと思いました。和歌山のアメリカ村にカナダの移民資料館があるところが、和歌山が外国とつながっているんだと再認識しました。移民や移住のことを詳しく学ぶことができ、バックパックをしたい僕にはとても有意義な話でした。

④「歴史の継承」

- ・ブラジルという大きな国と和歌山に繋がりががあるということに驚きました。これは誇りに思えることだと思います。昔から紡いできた事実をしっかりと継承することはとても重要だと思いました。
- ・今ほど渡航する技術が進んでいない時代にも関わらず、これだけ多くの人に移住していることに驚いた。世界のどこにいても、日本人は日本人なので、こういった歴史があったということ、自分も今を生きる日本人として伝えていきたい。

⑤「先人の努力や苦勞を思う」

- ・海外でも「日本人が信用できる」という国に言われるようになったのは、移住された先人が、ひたすらに努力を続けたことが実っているのだと思いました。
- ・外国へ移住した人は言葉や気候・環境などの違いでとても苦勞したと思う。新たな生活を求めるために移民したのに想像とは違う生活を強いられるようになったというのを聞き、甘いものではないと感じた。

⑥「敬意・称賛」

- ・日系人は日本人としての文化をしっかりと継承していて日本人として尊敬できる部分が大きかった。
- ・和歌山を出て海外へ移民するという冒険精神に感動しました。

⑦「交流」「文化を知り、相互理解へ」

- ・今まで「移住」や「移民」などの言葉にあまり関心を持ってこなかったのですが、今回の授業で、移民の人がいるからこそできる国際交流があるのだなあとと思いました。ブラジルの人からの信用をなくさないためにも、積極的に交流をしていき、まじめにやっていくべきだと感じました。
- ・日本人のブラジルへの移住によって、ブラジルに大きな影響を与えたんだと思った。日本の様々な文化の遺産がブラジルにとっても大きな遺産となってよかったと思う。国家交流として、相互の文化を学ぶことができたなら相互理解、協力にもつながるのではないだろうか。
- ・日本に住んでいても、遠く離れたブラジルに住んでいても、“文化”を大切にしたいという思いは同じなのだと感じました。交流をしてお互いの文化を共有できたらいいと思います。

⑧「今後の日本社会に関連づけて」

- ・今回、移住・移民について、詳しく学べてとても良い機会になりました。私は、昔から海外・外国人に興味があったので、とてもおもしろい講義でした。中学3年生の時、オーストラリアのダーウィンにホームステイをした経験があり、移民の話をもっと深く学びたいと感じました。多文化共生社会は、これからますます重要なテーマになると考えます。
- ・私の周りには移民の人はおらず、今まで移民は身近ではなかったのであまり興味をもつこともなく、知識もドラマで得られるほどしかなかったのですが、今後、移民問題はもっと現実的になってくると思うので今日の講座を機にもう少し調べてみようと思いました。
- ・移民・移住については、社会保障等の面でのデメリットばかりがイメージにあったが、文化の共有や人と人との交流等のメリットが大きいということが今日の講義で分かり良かったと思う。

(4) 考察

福山(2008:345)は、「移民学習は単に移民の歴史的経験を理解することにとどまらず、グローバル時代における私たちの地域の問題、市民としての私たちの生き方の問題、本質主義的な文化観からの脱却を考える学習としての意義がある。つまり移民学習は、単に「移民」を学びの対象とするのではなく、「移民」を通して「私たちのありよう」を学ぶ学習なのである」と述べている。学生たちの感想では、移民について知らなかったというものが圧倒的に多かったが、「移民」について学んだことが、学生たちにさまざまな考えを呼び起こしている様子がみてとれた。その中には、福山が述べるように、「移民」を通して自らのありようや現代社会の私たちのありように触れている感想もみられる。これまで殆ど知らなかったことを知ることが、それぞれの学生の有する経験や知識などと「化学反応を起こしている」といえないだろうか。多様な考えや意見が誘発されたことが、移民学習の一つの成果であると考ええる。

「移民」そのものを学習の展開に据えた変換アプローチ⁶の手法で、中山(2008:221-223)は「海を渡る日系移民」という「移民」に特化した単元を設定し、和歌山県の高校3年生を対象に7時間設定の単元のうちから90分の指導を実践している。和歌山県からの移民の歴史を知るという学習では、資料の一つとしてアメリカ村(三尾村の歴史と日系カナダ人)の歴史をあげている。それへの高校生の学習感想には「…しかし今日、三尾村の話と「弁当からミックスプレートへ」の展示を見て、大きく印象に残ったことがある。一つは和歌山県から外国へ移民が非常に多いことだ。移民について考えたことはほとんどなかったわけだが、これには驚いた。二つ目は太平洋戦争中の日系人への差別があったことだ。こんな身近に考えるべき問題があり、興味がでた。」(下線は中山による。感想より一部抜粋)

高校生の感想は大学生らの感想と共通する点があり、1度だけの授業であっても、移民学習が多様な学びの機会となることを示しているといえる。とはいえ、このような学生たちの考えをさらに深めるための活動や授業の継続ができれば一層望ましいだろう。

最後に、授業「わかやまを学ぶ」では2件のレポート提出が課されたが、課題のテーマは、各授業の担当者がそれぞれに決定し、受講者は自由に2件のテーマを選んでレポートを作成した。移民学習の授業で課されたテーマは「移民と〇〇」で、〇〇の部分は、学生自らが移民というキーワードに関連して興味あるトピックを選ぶこととした。同授業に関しては、89件のレポートが提出され、そのテーマは多種多様なものであった。例えば、「移民・難民についてとその違い」「移民/移住と差別」「移民・移住とレイシズム」「移民/移住とそのメリット、デメリット」「移民と農業」「移民と食文化」「移民と日本語教育」「移民、移住と日本の問題」「移民・移住と東日本大震災」「移民とドイツ」「移民/移住とオーストラリア」「移民と物語の背景」などがあり、学生の選んだテーマは、移民の定義や難民との違いに関するもの、人権に関わるもの、移民と文化や教育の関わりに関するもの、世界各国の移民の状況や政策に関するもの、また物語「母をたずねて三千里」を題材として、イタリアやヨーロッパの移民の歴史や状況を調べたものなどがあり、授業者の予想を超えるテーマの広がりがみられた。限られた時間の中での移民学習であったが、レポートからは、学生が自らの興味や関心に基づき、より広く深く自律的に学ぶ姿勢がうかがえた。たとえ1回・90分の授業であっても、内容を吟味し、学生の興味を喚起し、学生自らが学ぶきっかけを提供できるならば、教師と学習者で相互に移民学習を補完しつつ、さまざまな学びの可能性が広がるであろう。

Ⅲ. 移民をめぐる今後の展望

3-1 県人会との交流

移民母県としての和歌山あるいは多くの移民を輩出したかつての移民母村と、移住先に暮らす人々とのつながりについて考えるとき、大きな役割を果たす器（うつわ）となりうるものとして県人会があげられるだろう。例えば、北米最大の和歌山県人会である南カリフォルニア和歌山県人会は、2011年に100周年を迎え、ロサンゼルスにおいて創立百周年記念祝賀会を開催している。和歌山県知事をはじめ、同県から60名以上の出席者があり、アメリカに暮らす会員やその家族とともに100周年を祝った⁷。このような顔の見える交流の機会を得て、出席者は相互に親睦を深め、和歌山とアメリカの心理的距離感を近くしたのではないだろうか。また若い世代にとって、ルーツとしての和歌山を意識する機会となったのではないだろうか。

記念式典の開催後の2013年、『Nanka Wakayama Kenjinkai 南加和歌山県人会 100YEARS』が出版された。その内容は、創立百周年に寄せる祝辞をはじめ、南加和歌山県人会のパイオニア達の紹介、移民史・県人会史・歴代会長の記録、新年会・ピクニックなどのイベントの写真、回想録、ふるさと和歌山の名所紹介などで構成されている。こういった出版物は県人会の変遷を記録し次世代へと継承するうえで有効な媒体となるだろう。

他方、祝賀会開催にともなう準備負担や費用の点を考えれば、上述のような盛大な式典の開催は並々ならぬことが推察され、今後の周年記念を継続するためにも、若い世代の会員に期待が寄せられる。つまり県人会組織の中核を担う人材育成が求められる。

県人会における次世代への継承については、県人会そのものの存続にもかかわる課題であろう。図1は、2008年時点での「世界の和歌山県人会」である。かつて呼び寄せなどで同郷の人々が集住した移民先で結成された郷村会などが母体となり発展してきた歴史の長い県会もある、2000年以降に結成された若い県会もある。図に示された16団体のうち、2011年時点では、3団体（サクラメント和歌山県人会、桑港和歌山県人会、シカゴ和歌山県人会）が解散している（情報提供：和歌山県文化国際課）。

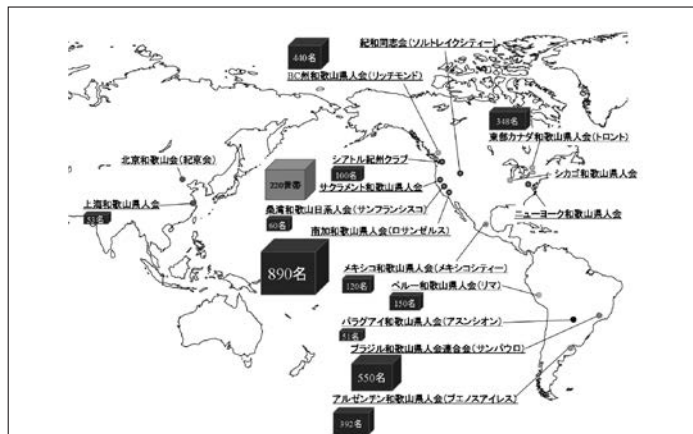


図1 「世界の和歌山県人会」と和歌山県文化国際課の情報提供（2008）に基づき作成

移民の歴史の継承と保存にも関わる課題として、在外県人会と和歌山県および多数の移民を輩出した地域とのつながり、あるいは県内の移民・移住に関わる機関や団体との交流の継続が、移民母県の和歌山県民と世界各地に暮らす和歌山をルーツとする人々をつなぐ架け橋として重要な役割を担う

と考えられる。現在は距離的障壁を超えて、顔の見える関係を築くことが可能な時代である。遠くにありて思うのではなく、十代、二十代の若い世代間における交流の促進を図るためにも、インターネットなどを活用した身近で新たな交流の方法を模索することも必要であろう。そのような取り組みを活発に行うことができれば、県人会組織の存続を維持するための一助となるのではないだろうか。

3-2 新たな交流の芽生え

昭和33年、和歌山県田辺市からブラジルへ家族移住した平上博泰氏は、現在、サンタカタリーナ州でワイナリー HIRAGAMI（ヒラガミ）を経営している。同ワイナリーは標高1400mの高地にありワインに適したブドウが採れる。2015年1月に開催された「中南米日系農業連携交流事業」に参加した和歌山県中南米交流協会代表の迫間脩氏が平上氏と出会ったことをきっかけとして、和歌山市のワイン輸入販売会社の協力を得て、2015年の秋に日本初入荷のブラジルワインとして、2種類のワイン「トリイ（赤ワイン）」と「カンパイ（ロゼスパークリングワイン）」が和歌山に直輸入された。また同協会の主催により11月29日にブラジルワインを楽しむ交流会が開催され会員ら50名が集った。現在、ブラジルには和歌山にゆかりのある日系移住者が約4万人暮らしているという（テレビ和歌山HP参照）。

和歌山での販売にいたった背景に、故郷である和歌山にまず輸出したいという平上氏の思いがあったという⁸。商品としてワインの品質の良さが求められるのはいうまでもないが、人的交流（顔の見える関係）が発端となり、生産者の思いを受けて、販路を開拓するために尽力した和歌山県の人々の存在、交流会を主催した中南米交流協会の存在など、さまざまな形で協力の和が広がっている。今後、かつての和歌山県民の移住先と移民母県である和歌山との経済交流の可能性が期待される。

おわりに

移民・移住をめぐる記憶の保存と継承の可能性について考えるとき、移民・移住をテーマとした展示やシンポジウムを、東（2015）は「装置」になぞらえた。それによって、和歌山県各地の移民輩出地域に残る移民の遺品を本県の移民史を綴る資料として広く発信することを可能とし、人やモノが語ることばが来場者に届くことにより移民の足跡が伝えられ、世代を超えて継承されていく可能性が想定された。人やモノの語りが発火装置となり新たな資料や情報が追加されもした。その過程を繰り返しながら、各地域における移民の歴史が浮き彫りにされ、和歌山県全体の移民史を一層明確なものとするとしている（70）。このことは、2015年の取り組みを通して同様であった。展示がきっかけとなり、南カリフォルニア和歌山県人会の初代会場であった湯浅銀之助に関する新たな情報が寄せられ、那賀移民史懇話会との情報共有により、湯浅家の家系図の詳細が明らかにされつつある。

また展示やシンポジウムだけでなく、学習教材としてDVDを制作することによって、小・中・高校生などの若い世代への移民・移住の歴史の継承へとつながる取り組みが開始された。今後は和歌山県下の学校などへのDVDの具体的な活用方法を提案していくことも必要であろう。

さらに大学における移民学習の試みは、15回の授業の中で1コマ限りではあったが、受講者の感想からはさまざまな学びの可能性が見いだされた。さらに授業後に提出されたレポートでは、移民をキーワードとする多様なテーマの広がりが見られた。このことは移民学習の意義を示唆するものである。森茂（2008）は移民学習の意義を3点にまとめている。（1）「ヒトの国境を越えたグローバルな移動に伴う地球的な規模での相互依存関係と、一国内における多文化の共生をつなげて考えられる（22）」（2）「国民国家によって他者化された移民や難民の基本的な人権の問題、基本的な人権と国

家主権との間の緊張関係や調整、多文化社会における人権や市民権のあり方といった民主主義の基本原則を学習するシティズンシップ教育の恰好の機会（22-23）」(3)「今日の「移民の時代」といわれるディアスポラ的世界状況の中で、「ハイブリディティ」という視点で文化をとらえることは、国民や民族、その文化を固定的、本質的にとらえるような見方を批判的に見る上で重要な視点（23）」。

このような視点は、授業を通して芽生えた興味関心から、学生自らが学びを継続することによって養うことが可能ではないかと考える。「移民論」「日系人論」のような1コースとして授業を開設することは理想的ではあるが、ただ1回の授業においても、「和歌山県における移民・移住」という一地域の例から、それに関連する他府県や世界各地の諸問題などを受講者自らが考えるきっかけを提供することも十分に可能であろう。

和歌山県下の諸地域に組織された機関や団体間において、顔の見える関係や一定のネットワークが構築されつつある中、高齢化が懸念される世界各地の和歌山県人会との活発な交流や和歌山県民との顔の見える関係を、いかにして深めることができるのか、次の段階への歩みが期待される。また和歌山県各地域の移民資料や記憶の統一的なデジタル化や目録化などによる保存活動を進めることも急がれる。

今後も、移民・移住に関わる機関や団体が、それぞれの強みを発揮しつつ、さらに連携を密にすることが、移民をめぐる調査・研究および保存・継承と教育への還元を推進する力となるだろう。そのためには連携を一層強くするための組織化が必要となるかもしれない。和歌山をルーツとする人々の世界各地の県人会と和歌山県内の移民に関わる諸機関や団体間において、双方の次世代を担う若い世代を巻き込んだ新たな交流のしくみを開発し、継続的な交流の活発化を図ることなどが今後の課題であろう。

註

- ¹ 海外移住資料館資料によると、1885年から1894年、1899年から1972年の間における都道府県別出移民数では、和歌山県の移民輩出数は32,853人で全国第6位である。第1位から第5位は、広島県（109,893人）、沖縄県（89,424人）、熊本県（76,802人）、山口県（57,837人）、福岡県（57,684人）である。
- ² 日本に暮らす日系ブラジル人を取り巻く状況については、杉山（2008）や藤巻（2012）に詳しい。
- ³ 1957年（昭和32）に和歌山県により編集・発行、和歌山県における各地区の移民輩出の状況や移民先での状況、移民に関する基本調査などがまとめられている。同県移民史において重要な資料の一つである。
- ⁴ 2007年3月3日から5日、筆者はブルームに滞在し日本人墓地を訪れた。



ブルームの日本人墓地



石碑「ブルーム日本人墓地の歴史」

- 5 委員（敬称略・あいうえお順）亀井勝博（公益財団法人和歌山県国際交流協会事務局次長）、中谷智樹（和歌山市職員 和歌山市民図書館副事務長）、迫間脩（和歌山県中南米交流協会代表）、東悦子（国立大学法人和歌山大学観光学部教授）、吉村旭輝（国立大学法人和歌山大学紀州経済史文化史研究所特任准教授）。編集会議には、映像編集およびナレーションに関して専門的立場から、山田みゆき、岡崎友城（以上、テレビ和歌山）が参加した。
- 6 中山は、多文化的内容を教えるためのアプローチとして、バンクス（Banks）が示した4段階の内容の統合レベル（Level of integration of ethnic content）の内、レベル3にあたる変換アプローチを応用し、「移民」を学習内容の中心に置き、その外周に、経済、文化、人権、地域、歴史、政策、グローバル化などの細分化された視点を位置づけた。
- 7 2011年11月13日、筆者も「南加和歌山県人会」創立百周年記念祝賀会に出席した。在L.A、日本国総領事や和歌山県知事をはじめとし、招待者だけでも140人を超える盛大な会であった。
- 8 執筆にあたり、和歌山県中南米交流協会の代表である迫間脩氏より、平上ワインの販売にいたった経緯や平上氏の思いをお聞きした。

引用文献リスト

- 藤巻秀樹 2012『「移民裂創」ニッポン—多文化共生社会に生きる』東京：藤原書店。
- 福山文子 2008「移民系博物館における教員研修のプログラム開発と評価」森茂岳雄・中山京子編著『日系移民学習の理論と実践—グローバル教育と多文化教育をつなぐ—』東京：明石書店、343-363。
- 東悦子 2007「移民史に残る紀州の真珠貝ダイバー—西オーストラリア ブルームを訪ねて—」『紀州経済史文化史研究所紀要』第28号、13-28。
- 2014「ブラジル移住者の渡航前準備—『ブラジル渡航の栞（一）を中心に—』」『紀州経済史文化史研究所紀要』第35号、1-14。
- 2015「和歌山県における移民をめぐる取組み—移民資料の保存・継承のための装置としての展示とシンポジウム—」『移民研究年報』第21号（2015.3）日本移民学会、57-74。
- イチオカ、ユウジ 1992『一世—黎明期アメリカ移民の物語—』東京：刀水書房
（原著 Yuji Ichioka, 1988, *The Issei*, A Division of Macmillan, Inc.）
- JICA横浜海外移住資料館（企画・編集）2004『海外移住資料館 展示案内 われら新世界に参加す』独立行政法人国際協力機構横浜国際センター。
- 森茂岳雄・中山京子（編著）2008『日系移民学習の理論と実践』東京：明石書店。
- 森茂岳雄 2008「グローバル時代の移民学習—グローバル教育と多文化教育をつなぐ—」森茂岳雄・中山京子編著『日系移民学習の理論と実践—グローバル教育と多文化教育をつなぐ—』東京：明石書店、16-26。
- 中山京子 2008「海を渡る日系移民—地域の多文化共生を考える—」森茂岳雄・中山京子編著『日系移民学習の理論と実践—グローバル教育と多文化教育をつなぐ—』東京：明石書店、216-224。
- 西浜久計 2010「カナダ移民の父 工野儀兵衛」『港町から 特集 紀州・日高』東京：株式会社街から舎、12-17。
- 坂口満宏 2010「誰が移民を送り出したのか—環太平洋における日本人の国際移動・概観—」『立命館大学国際言語文化研究所紀要』第21巻4号、53-66。
- 田坂養民 1985「ハワイと和歌山県人」『太平洋学会誌』第31号。

上村雅洋 2014「教養科目「わかやまを学ぶ」の開講」『紀州経済史文化史研究所紀要』第35号、29-40。
和歌山大学紀州経済史文化史研究所 2009『紀伊半島からカリフォルニアへの移民 ― サンピードロの日本人村 ―』（図録）和歌山大学紀州経済史文化史研究所、15-17。
―― 2014 特別展『移民と和歌山 ― 先人の軌跡をたどって ―』（図録）和歌山大学紀州経済史文化史研究所。
和歌山県 1957『和歌山県移民史』和歌山県。
財団法人日伯協会（編）2012『日本からブラジルへ ― 移住100年の歩み ―』財団法人日伯協会。

引用 WEB 情報

海外移住資料館「特別展示「連れもて行こら 紀州から！－世界にひろがる和歌山移民－」オープニング・セレモニーの開催」
<http://www.jica.go.jp/yokohama/topics/2014/ku57pq00000dypdt.html>（2015/11/29閲覧）
テレビ和歌山「ブラジルワイン楽しむ交流会開催」
<http://www.tv-wakayama.co.jp/news/detail.php?id=36924>（2015/11/30閲覧）
和歌山県「在外県人会」
<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/022100/kokusaikouryu/kenjinkai.html>

Various Projects Related to the History of Emigrants in Wakayama Prefecture and the Future Developments

Etsuko Higashi (Wakayama University)

Wakayama is one of the prefectures which produced a large number of emigrants. The history of the emigrants goes back over 140 years. However, such history is in danger of disappearing. Therefore, various projects, such as exhibitions and symposiums with the theme of emigration from Wakayama prefecture, have been held repeatedly since 2009.

This paper mainly focuses on three issues; an exhibition held in 2015, the creation of DVDs concerning the history of emigrants from Wakayama prefecture to Brazil and education about the history of emigrants, as carried out for the students of Wakayama University. The author discusses how these issues were handled and how they affected the people and students involved.

Keywords : Exhibition concerning Emigrants from Wakayama Prefecture, Education for Students about Migrants, Creation of a DVD about Migrants

〈研究ノート〉

南洋群島における日本人小学校の教育活動

— 南洋庁サイパン尋常小学校保護者会編『さいぱん』（1935 年）をもとに —

小林茂子（中央大学・非常勤講師）

＜目 次＞

はじめに

1. 1930 年代半ばにおける南洋群島の教育
2. 保護者会誌『さいぱん』の概要
3. 『さいぱん』の主な内容と特徴
 - (1) 親が望むこと、教師が望むこと
 - (2) 衛生面の積極的な取り組み
 - (3) 保護者会の活発な活動
 - (4) 児童文集にみる南洋の生活

おわりに

キーワード：南洋群島 サイパン 日本人小学校 保護者会誌 教育活動

はじめに

第一次世界大戦開戦後、日本は当時ドイツ領であった赤道以北の太平洋島嶼地域を占領し、海軍による統治を行った。その後 1919 年パリ講和会議で、この地域は日本を受任国とする C 式委任統治領となり、1922 年パラオ諸島コロール島に南洋庁において委任統治行政が開始された。この島嶼地域を「南洋群島」と呼称し、以後第二次世界大戦の敗戦まで約 30 年間日本が支配した。

この間、これらの島々に移住した日本人は増え続け、1930 年代半ば以降は、現地住民人口を凌駕するほどになった【表 1】。また、日本人人口の半数以上は沖縄県出身者であった。委任統治の行政区として、サイパン、パラオ、ヤップ、トラック、ボナペ、ヤルートに 6 支庁がおかれたが、支庁別の沖縄県出身者の分布をみると、サイパン支庁区が常に第一位を占めていたことがわかる【表 2】。

その当時サイパン島ガラパンの町は次のような賑わいをみせていた。

「この町には、役場、郵便局、公

	総数	現地住民	日本人*	うち朝鮮人	日本人中本籍地別上位3位			外国人†
					第1位(%)	第2位(%)	第3位(%)	
1922	51,086	47,713	3,310	149	沖縄 702(21.2)	東京 693(20.9)	神奈川 120(3.6) 福岡 120(3.6)	63
1923	54,358	49,090	5,203	82	沖縄 2,391(46)	東京 797(15.3)	神奈川 109(2.1)	65
1924	55,186	49,576	5,550	93	沖縄 2,508(45.2)	東京 829(14.9)	福岡 141(2.5)	60
1925	56,294	48,798	7,430	98	沖縄 3,894(48.4)	東京 963(13.0)	神奈川 175(2.4)	66
1926	57,466	48,994	8,395	95	沖縄 4,351(51.8)	東京 979(11.7)	福岡 262(3.1)	77
1927	58,816	48,761	9,979	147	沖縄 5,132(51.4)	東京 1,105(11.1)	福岡 344(3.4)	76
1928	61,086	48,545	12,460	176	沖縄 6,615(53.1)	東京 1,632(13.1)	福岡 370(3.0)	81
1929	64,921	48,617	16,202	179	沖縄 8,289(51.2)	東京 1,815(11.2)	鹿児島 914(5.6)	102
1930	69,626	49,695	19,835	198	沖縄 10,176(51.3)	東京 2,190(11.0)	福島 985(5.0)	96
1931	73,027	50,038	22,889	225	沖縄 12,227(53.4)	東京 2,334(10.2)	福島 1,188(5.2)	100
1932	78,457	50,069	28,291	278	沖縄 15,942(56.4)	東京 2,713(9.6)	福島 1,357(4.8)	97
1933	82,252	49,935	32,214	313	沖縄 18,212(56.5)	東京 2,851(8.9)	福島 1,450(4.5)	103
1934	90,651	50,336	40,215	318	沖縄 22,736(56.5)	東京 3,494(8.7)	福島 1,610(4.0)	100
1935	102,537	50,573	51,861	546	沖縄 28,972(55.9)	東京 4,053(7.8)	福島 3,160(6.1)	103
1936	107,137	50,524	56,496	545	沖縄 31,380(55.5)	東京 4,310(7.6)	福島 3,425(6.1)	117
1937	113,277	50,849	62,305	579	沖縄 34,237(67.3)	東京 4,369(8.6)	福島 4,068(8.0)	123
1938	122,969	50,998	71,847	704	沖縄 41,201(57.3)	東京 4,710(9.2)	福島 3,795(7.4)	124
1939	129,103	51,725	77,254	1,968	沖縄 45,701(59.2)	東京 4,484(5.8)	福島 3,684(4.8)	124
1940	135,708	51,106	84,478	3,463	沖縄 49,772(58.9)	東京 4,554(5.4)	福島 3,699(4.4)	124
1941	141,259	51,089	90,072	5,824	沖縄 53,206(59.1)	東京 4,620(5.1)	福島 3,726(4.1)	98
1942	145,272	51,951	93,220	6,407	沖縄 54,854(58.8)	東京 4,931(5.3)	福島 3,497(3.8)	101
1943	148,972	52,197	96,670					105

(出典)『南洋群島統計年報』(1933)、『南洋統計年鑑』(1934-1941)、南洋庁『南洋庁公報』、外務省アジア局第五課『日本統治の成績を示す南洋群島に関する統計』(1954)より筆者作成。
*日本人には朝鮮人、台湾人、樺太人(1943 年迄)を含む。空欄は統計なし。

(今泉裕美子「沖縄移民社会」「沖縄県史」各論編第五巻近代、2011 年、p.351 より引用)

表1 南洋群島在住者人口表

会堂、警察、裁判所といった公共施設はもとより、(中略)八百屋、豆腐屋、電気屋、薬局、寿司屋、デパートなどの商店が建ち並び、銭湯もあれば葬儀社もある。映画館が二軒、新聞社も二社あって、さかんに競合し、通りを走る自動車数は、一九三七年(昭和十二年)で百十三台にのぼった。さながら、内地の新開地をそっくりそのまま移転させたような街並みが続いていたのである」(野村 2005: 115)。

それではこうした時期、日本人移民の子どもたちはどのような学校に行き、そこではどんな教育が行われていたのか。

それを知る手がかりの一つとして、サイパン尋常小学校保護者会が発行・編集した雑誌『さいぱん』(1935年8月、創刊号)があげられる。そこからは親や教師が日本人小学校に望むこと、子どもたちの学校生活の様子、保護者会の取り組みや学校行事など日常の学校の姿を読みとることができる。南洋群島の教育に関する資料は、他の植民地、移民地に比べ極端に少ない。それでも、行政的な資料¹から制度や政策的な側面についてはある程度明らかにされているものの、教育現場での具体的な教育活動に関してはまだまだ不十分で、断片的なことしかわかっていない。こうした状況のなか、同誌は日本人児童に対する教育が当時どのように進められていたのか、その教育実態を知ることができる貴重な資料ということができる。そこで本稿では、同誌の内容を紹介しつつ、1930年代半ばの南洋群島での社会的な状況を背景に、日本人小学校の教育活動の一端を明らかにすることを課題とする。

1. 1930年代半ばにおける南洋群島の教育

委任統治下の南洋群島は、法律上「帝国憲法の効力は及ばない」ところとし、現地住民は「島民」と称され、「日本帝国臣民とはその身分を異にし」と規定された(条約局法規課 1962: 58-59)。そのため、現地住民には「国民教育を施さず」とされ、日本人児童と現地人児童は別々の教育体系が布かれた(南洋庁長官官房 1932: 126)。

現地人児童の教育は、南洋庁時代は「南洋庁公学校規則」(1922年)により、入学年齢満8歳以上、修業年限3年の公学校が設置され、また各支庁所在地の6公学校には、修業年限2年の補習科が設けられた。1939年4月末で学校数は26校、生徒数は3,447人であった【表3】。教科書はすべての教科内容を盛り込んだ総合的な『南洋群島国語読本』のみが編纂され、そのほかの修身、算術、地理、理科、手工などの教科は教授要目だけが作成された(南洋群島教育会 1938: 197-205)。また、現地人児童に対する中等普通教育機関はなく、修業年限2年の木工徒弟養成所(1926年)があるのみであり、しかも入学できるのは一握りの優秀なものだけであった。

一方、南洋庁時代、日本人児童の教育は、初等教育については「南洋庁小学校規則」(1922年)が制定され、内地の小学校と同様、文部省令が援用され、卒業後の転学、進学に関しては内地小学校児童の卒業者と同等の扱いをした。1939年4月末までで学校数は25校、生徒数は8,582人となって

(支庁別、人、%)

	沖縄出身者数(「内地人」に占める比率: %)	沖縄出身者の居住地分布 (%)					
		サイパン	パラオ	ボナベ	ヤップ	トラック	ヤルート
1922	702 (22)	94.4	1.4	-	0.1	4.0	-
1924	2,508 (46)	94.6	2.9	0.2	0.2	2.1	-
1926	4,351 (52)	92.5	5.0	0.6	0.2	1.6	0.1
1928	6,615 (54)	93.3	4.6	0.8	0.2	1.0	0.1
1930	16,176 (52)	91.8	4.0	1.1	0.2	2.8	0.2
1932	15,942 (57)	85.3	7.4	2.9	0.2	3.1	1.0
1934	22,736 (57)	81.6	9.9	3.1	0.7	4.4	0.3
1936	31,380 (56)	78.6	12.6	3.4	0.4	4.8	0.3
1937	34,237 (55)	75.3	14.0	3.3	0.4	6.8	0.1
1938	41,201 (58)	68.8	19.8	4.2	1.4	5.7	0.2
1939	45,701 (61)	61.6	23.9	6.9	1.6	6.9	0.2

出典: 南洋庁『南洋庁統計年鑑』(2回、7回、9回)。

(森重紀子「委任統治南洋群島における開発過程と沖縄移民」『日本帝国圏の農林資源開発』京都大学学術出版会、2013年 p.324より引用)

表2 沖縄出身者の居住地分布

支庁名	学校名	教員数					学級数					児童数														
												本科					補習科					総数				
		日本人	現職人	計	本	補習科	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計								
1	サイバイン *	7	2	9	5	2	7	115	110	225	72	47	119	187	157	344										
2	ロタ	1	1	2	1	—	1	35	31	66	—	—	—	35	31	66										
3	ヤップ *	5	1	6	2	2	4	37	28	65	64	40	104	101	68	169										
4	ニフ	1	1	2	1	—	1	26	19	45	—	—	—	26	19	45										
5	マキ	3	1	4	3	—	3	74	27	101	—	—	—	74	27	101										
6	パラオ *	7	1	8	3	2	5	52	67	119	104	42	166	156	129	285										
7	マルキヨク	2	1	3	2	—	2	37	43	80	—	—	—	37	43	80										
8	ガウルド	2	1	3	2	—	2	56	54	110	—	—	—	56	54	110										
9	ペリウユ	2	1	3	2	—	2	36	24	60	—	—	—	36	24	60										
10	アンガウル	2	1	3	1	—	1	22	18	40	—	—	—	22	18	40										
11	トラック *	4	1	5	2	2	4	86	34	120	85	35	120	171	69	240										
12	春島	2	1	3	2	—	2	91	45	136	—	—	—	91	45	136										
13	冬島	1	1	2	1	—	1	37	30	67	—	—	—	37	30	67										
14	水曜島	2	1	3	2	—	2	85	76	161	—	—	—	85	76	161										
15	月曜島	1	1	2	1	—	1	29	28	57	—	—	—	29	28	57										
16	モートロツク	1	1	2	1	—	1	60	30	90	—	—	—	60	30	90										
17	秋島	1	1	2	1	—	1	61	28	89	—	—	—	61	28	89										
18	ボナベ *	5	1	6	3	2	5	110	67	177	86	27	113	196	94	290										
19	ウー	2	—	2	2	—	2	42	44	86	—	—	—	42	44	86										
20	マタラニーム	2	1	3	2	—	2	42	32	74	—	—	—	42	32	74										
21	キチー	2	1	3	2	—	2	52	38	90	—	—	—	52	38	90										
22	クサイ	2	1	3	2	—	2	45	51	96	—	—	—	45	51	96										
23	ヤルトル *	5	1	6	3	2	3	141	107	248	89	55	144	230	162	392										
24	ウオツヂェ	2	1	3	2	—	2	82	64	146	—	—	—	82	64	146										
25	クワゼリン	1	1	2	1	—	1	35	38	73	—	—	—	35	38	73										
26	エボン	1	1	2	1	—	1	36	24	60	—	—	—	36	24	60										
	合計	66	26	92	50	12	62	1,524	1,157	2,681	500	266	766	2,024	1,423	3,447										

注：補習科の併設校には＊を付した。1943年の『南洋庁職員録』には、ガラスマオ公学校（パラオ）、ナモ公学校（ヤルート）が追加されている。

表3 公学校 教員数・学級数・児童数

いた【表4】。教科書は内地の国定教科書を使用した（南洋群島教育会 1938：377-382）。中等教育機関については、小学校同様南洋庁立として、1933年にサイパン実業学校が、1939年と41年にはサイパンとパラオに高等女学校が、1942年にはパラオ中学校がそれぞれ設立された²。特に男子は中等教育機関へ進学することで、農業以外の職業につく可能性が開け、甘蔗（さとうきびのこと）栽培人（小作人）の子どもはよりよい生活を求めて会社員や役人に憧れて、勉学に励む者が少なくなかったという（今泉 2003：216）。

以上のように、南洋群島においては現地人児童と日本人児童に対する教育制度、教育内容はまったく異なっており、学校間の相互の交わりや交流はほとんど見られなかった。しかし教師の人事異動は、日本人小学校、公学校間で頻繁に行われており、身分も変わりとはなかった（南洋群島教育会1938: 782）。

支庁名	学校名	教員数		学級数		男 子			女 子			児童数			総 数		
		新規	計	専任科	高小科	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子
1	サイレン	20	3	23	22	4	26	650	683	1,333	107	56	163	757	739	1,496	
2	マツシヤ	13	1	14	6	1	7	174	173	347	24	25	49	198	198	396	
3	チヤツチヤ	8	2	10	8	1	9	220	204	424	33	16	49	253	220	473	
4	アズリート	11	3	14	8	1	9	241	196	437	42	24	66	283	220	503	
5	チヤランカ	13	3	16	8	1	9	241	228	469	35	30	65	276	258	534	
6	デニアン	23	4	27	12	4	16	377	387	764	60	49	109	437	436	873	
7	カホー	12	2	14	9	1	10	227	223	450	38	22	60	265	245	510	
8	マルゴ	12	2	14	6	1	7	187	182	369	34	18	52	221	200	421	
9	ハイビ(ヂューロ)	11	2	13	6	1	7	177	144	321	33	18	51	210	162	372	
10	ロタ	10	1	11	7	1	8	177	209	386	13	2	15	190	211	401	
11	タルガ	4	1	5	4	1	5	91	107	198	19	11	30	110	118	228	
12	シルバール	1	1	2	4	—	4	80	81	161	—	—	—	80	81	161	
13	ヤップ	5	3	8	1	—	1	33	35	68	—	—	—	33	35	68	
14	バワオ	14	2	16	13	2	15	442	420	862	68	50	118	510	470	980	
15	清水	5	2	7	2	—	2	65	55	120	—	—	—	65	55	120	
16	堀穂	4	1	5	2	—	2	41	36	77	—	—	—	41	36	77	
17	朝日	3	1	4	2	—	2	60	62	122	—	—	—	60	62	122	
18	アングウル	2	2	4	1	—	1	31	34	65	—	—	—	31	34	65	
19	ベリリウウ	1	1	2	1	—	1	22	26	48	—	—	—	22	26	48	
20	トラツク	6	0	6	3	—	3	73	100	173	—	—	—	73	100	173	
21	水曜島	2	0	2	1	—	1	25	13	38	—	—	—	25	13	38	
22	ゴナベ	12	1	13	5	—	5	116	153	269	26	11	37	142	164	306	
23	マタラニーム	2	2	4	2	—	2	57	47	104	—	—	—	57	47	104	
24	奉栄	4	0	4	1	—	1	40	31	71	—	—	—	40	31	71	
25	ヤルート	1	1	2	1	—	1	18	24	42	—	—	—	18	24	42	
合 計		199	41	240	135	19	154	3,865	3,853	7,718	532	332	864	4,397	4,185	8,582	

注:1943年の『南洋庁職員録』には、さらにサイパン第二、ゴホホバ、バガン(サイパン)、大和、ガスパン、マルキョク(パラオ)、秋富(トラック)、クサイ(ポナペ)の各小学校在籍されている。

表4 日本人小学校 教員数・学級数・児童数

2. 保護者会誌『さいぱん』の概要

『さいぱん』は1935年8月1日、サイパン尋常小学校保護者会によって編集・発行された。内容は、巻頭の学校長の「発刊の辞」やサイパン支庁長、ガラパン町総代の祝言を含め、「保護者欄」（幹事4名）、「学校欄其の一」（沿革など）、「学校欄其の二」（行事予定など）、「教職員欄」（教師12名）、「児童欄」（児童文集）から成り、計85頁（編集後記含む）のものである【図1】。

サイパン支庁長・田中茂によれば同誌は、「学校の内容紹介と児童文集とを兼ね以て多数保護者との連携を保ち実績の向上に資せんとする目的のもとに」（田中1935：5）発刊されたものである。田中はそのなかで、当時の南洋群島での雑誌発刊状況について触れ、サイパン教育支会からは1934年に『サイパン教育』（未発見）が出され、1935年には『南洋教育』（南洋群島教育会、現在15冊が確認されている）、『南洋群島』（南洋群島文化協会、現在復刻版がある）が各々出されているが、学校単独で会誌を発刊するのは同誌が初めてであるとしている（田中1935：5）。また、学校長・谷川儀六は「発刊の辞」で、保護者特に母親の協力を強く求め、「愛する子供達のために家庭（母親）と学校（教師）とが密接不離の連絡を保ち、より良き教育的環境の中に子供を育み度い」とし、同誌は年1回の予定で発行し、家庭と学校との連絡を不断に実行したいと言っている（谷川1935：4）（但し、現在のところ創刊号しか発見されておらず、何号まで続刊されたのかは不明である）。

ところで、同誌は次の2点において南洋群島の教育を考える際の重要な視点が内包されている。まず、1935年に発行されているという点である。1935年は日本が国際連盟から正式に脱退した年であり、それまでの委任統治領から南洋群島を事実上領土化し、兵站基地化を進め、日米開戦への準備を強化していく時期にあたる。そうした政治的状況の変化を背景に、当時の学校の現状や親や教師の考えなどを具体的に知ることができるのである。次に、同誌はサイパン尋常小学校という日本人学校から出たものであるという点が貴重である。同校は【表4】でもみられるように、南洋群島のなかで一番多くの日本人児童を抱えた学校であり、おそらく南洋群島での「先進」的な教育が施された学校の一つだったのではないだろうか。サイパン支庁長・田中もいっているように、保護者会誌を発行できた日本人学校はおそらく多くはなかったであろう。つまり、同誌により南洋群島での代表的な日本人小学校の様子がわかり、それにより、例えば離島の小さな学校での教育の様子などとも比較でき、群島全体の教育を考えるうえで、一つの有用的な見方を得ることができるのではないと思われる。

同誌は、現在高等学校で使われている『新日本史A』という教科書の、「日本の植民地」という項目のところで、表紙の写真が掲載されている【図2】。その下には、「1922年、サイパンー沖縄直行船が就航し、沖縄は「南洋ブーム」にわきます。沖縄から移民の増加にともない、学校が設けられました。現地住民は、日本人とは別の学校で勉強していました」（成田2014：61）という説明が付け

◆さいぱん◆創刊号(第一巻第一号)		
1935年8月1日発行 サイパン尋常小学校 編集兼発行人 谷川儀六		
発行所 サイパン尋常小学校内 サイパン尋常小学校保護者会		
目次		
・表紙	・口絵	
・発刊の辞	学校長	谷川儀六
・発刊を祝す	サイパン支庁長	田中茂
・偶感	ガラパン町総代	田辺金太郎
■保護者欄		
・教育上に対する所感を述べて創刊の辞とす	彩小保護者会幹事	木下新蔵
・十年前を懐ふ	同	幹事 土井十太郎
・南洋に在る者の望む中等学校に就いて	同	幹事 山村清次
・過去現在及希望に就いて	同	幹事 小林藤太郎
■学校欄 其の一		
・我々の沿革		
・校内生活の一日		
・卒業生の内地中等学校入学状況を主題として		
・耳と目と口	学校医	岡谷 昇
■教職員欄		
・一年生の担任より	一ノ組担任	垂永文彦
	二ノ組担任	迎 柳子
・教職員の一人として父兄の参観を希望す	三ノ組担任	大平 巧
・私の教育信念	二ノ組担任	井上永敏
・二年生の担任より	二ノ組担任	羽生サワ
・偶感	三ノ組担任	吉野満水
・図画と手工に就いて	三ノ組担任	松尾達成
・算術科に於ける応用問題学習に就いて	四ノ組担任	田中秀信
・児童図画作品の視方	五ノ組担任	綿織俊吉
・内地だより	五ノ組担任	長田武雄
・教育無上道	六ノ組担任	増澤重之
・六女を対象として	六ノ組担任	指村寅治
・裁縫科の指導予定		
■児童欄		
・児童文集(巻二ノ一～巻六ノ二)		
■学校欄 其の二		
・昭和十年年度学校主要行事予定表		
・昭和九年度衛生施設の概要		
・昭和九年度遠足会		
・音楽会		
・昭和九年度ラジオ新聞社主催軟式少年野球大会所感		
・昭和九年度運動会記事		
・保護者会記事会務	・保護者会記事会計	◆編集後記

図1 『さいぱん』の目次

られている。高等学校の日本史の教科書のなかで、南洋群島についての説明があるのは、ごく少数である。

3. 『さいぱん』の主な内容と特徴

同誌の内容から次のような点が特徴としてあげられる。それらから当時のサイパン日本人小学校ではどのような教育活動が展開されたのか、その具体像を探ってみよう。

(1) 親が望むこと、教師が望むこと

「保護者欄」と「教職員欄」からは、それぞれの立場からの要望が明瞭にわかる。

まず、「保護者欄」では保護者会幹事4人の記事が載っている。その内容はおおよそ次の3点にまとめられる。

1点めは、南洋の教育が内地の教育に劣らぬよう、その対策を求めている点である。特に毎年移民が増えて、それに伴い入学生が予想以上に多くなり、教員が不足し、教育設備も足りないという状態が続くようになっていた。そのため教育内容の低下を危惧しており、教員の内地帰省は夏季休暇中にしてほしいといった要望や、教室をさらに拡充してほしいといった訴えが出されている（木下 1935：9）。2点めは、



写真1 サイパン尋常小学校と谷川校長

保護者全体に対し、児童の教育に無関心な者が多い。もっと学校への協力、関心を持ってほしいと呼びかけている点である。例えば、本年度の卒業式には僅か20名の保護者の参列しかみられず、「実に遺憾」と嘆いている（小林 1935：15）。また、教師に対しても大変ではあるが、各受け持ちの家庭を巡訪して学校への関心を喚起してほしいなどといった意見もあった。3点めは、上級学校進学に対する対応を望む声である。上述したように南洋群島では1933年に、中等教育機関としてサイパン実業学校が設立されていたが、中学校や高等女学校は同誌が発行されたときにはまだ設立されていなかった。したがって親の間では「中等程度の入学試験のために、一、二年前から内地の学校へ転校させなければならぬ」（木下 1935：8）、という声が多く聞かれていた。これに対し、「卒業生の内地中等学校入学状況を主題として」の記事には、1933年からは進学希望者に課後指導が行われていることが記されており、過去5年間の内地進学者数と進学先などの実績も掲げられていた³。そして「サイパン校では信頼出来ぬ意味の言辞」（学校欄 1935：24）は南洋を軽視することにつながりお互い慎みたいと、保護者らを戒めていた（南洋群島における中学校、高等女学校の設置は上述のごとく後に実現する）。

一方、「教職員欄」にみる教師が保護者に望む内容は、おおよそ次の2点があげられる。

まず、衛生上に関する訴えがみられる。身体検査により眼や歯などに何らかの疾病を抱えている児童が多くいることがわかり、衣服の清潔や歯磨きの励行、水筒やハンカチの携帯など保護者の協



図2 『さいぱん』の表紙

保護者全体に対し、児童の教育に無関心な者が多い。もっと学校への協力、関心を持ってほしいと呼びかけている点である。例えば、本年度の卒業式には僅か20名の保護者の参列しかみられず、「実に遺憾」と嘆いている（小林 1935：15）。また、教師に対しても大変ではあるが、各受け持ちの家庭を巡訪して学校への関心を喚起してほしいなどといった意見もあった。3点めは、上級学校進学に対する対応を望む声である。上述したように南洋群島では1933年に、中等教育機関としてサイパン実業学校が設立されて

力が必要であると頼んでいる。2点めは、多くの教師が親に、学校に参観に来てほしいと来校をさかんに訴えていることである。保護者会幹事も親の学校への無関心を嘆いていたが、それだけ保護者との接触が少ないことのあらわれであろう。こうした背景には親の職業が影響しているのではないかと思われる。サイパン島の日本人移民、すなわち児童の親の多くは、南洋興発株式会社に雇用されている甘蔗栽培人（小作人）であったであろうと思われる。甘蔗栽培は1年を通してそれぞれやらねばならぬ仕事があり、厳しい労働環境のなか収穫高が即収入にひびくため、親が学校へ行く時間を作ることは難しいのが実情ではなかっただろうか。

このようにみると保護者と教師の要望には互いに関連するものがあり、その根底には保護者会幹事・木下新蔵がいうように、「内地の児童に劣らぬ上に、躍進気象の有る海外児童として、優秀なる国民を作り上げ度い」（木下 1935:10）という願いのもとに、南洋での独自の教育に子どもの将来を期待する気持ちが潜んでいることに気がつく。この時期親たちには、南洋群島に永住する意識があったことが窺われる。

（2）衛生面の積極的な取り組み

全体として、衛生面の取り組みが熱心であるといえる。

学校医・岡谷昇は、本年度の身体検査により気づいた点として統計表を掲げ、特に眼疾（トラホーム及び結膜炎）、チヨウネイセンソク 耳聾栓塞（耳の中に分泌物と垢が固まる）、齲歯（虫歯）、扁桃腺肥大、腸内寄生虫の5点をあげて説明し、各家庭での注意を呼びかけている。とりわけサイパン小学校では、眼の疾病者が多いと指摘する⁴。その原因は「昭和九年度衛生施設の概要」によると、「乾燥期には塵埃の飛散が甚しく其の上直射光線が強く、且用水不足のため洗顔等充分出来ぬ」（学校欄 1935：78）ためだとしている。そのため会費を徴収し、保護者会で洗眼治療のため看護婦1名を雇っていた。トラホームは伝染性疾患で最悪失明することもあり、特に重大視し注意を呼びかけていた。

「昭和十年度学校主要行事予定表」をみると、四月・身体検査、五月・歯牙検査、七月・トラホーム患者父兄会開催、八月・秋季眼疾検査がそれぞれ実施されており、そのほか寄生虫駆除剤服薬を年7回行っている（隔月3日間海人草を服用）。これは、1926年の「南洋庁令第21号」を以て「学校医設置並職務規程」が制定され⁵、同時に「南洋庁令第22号」により「児童身体検査規程」が制定されて、小学校、公学校においては、「毎年一回児童身体検査を行ふ」ことが定められているからである（南洋群島教育会 1938：767）。

さらに、日常生活のなかで衛生上の細かい取り組みがなされている。上述の「衛生施設の概要」では、救急薬品の常備のほか、飲料水供給のため松風式濾過器（手動ポンプで圧力を加えて濾過するもの）を保護者会で購入し、また手洗い用に各教室にクレゾール水を入れた洗面器一個を備え、便所は毎日清掃しデシン（薬剤？）を散布して防臭と消毒をし、さらに環境面として児童に安息を与え、自然への情操から緑陰と芝生の造成にも努めていることなどが記されている（学校欄 1935：79）。このように様々な試みをとおして、熱帯という環境のなかで、子どもの健康をどう維持してくか、学校医

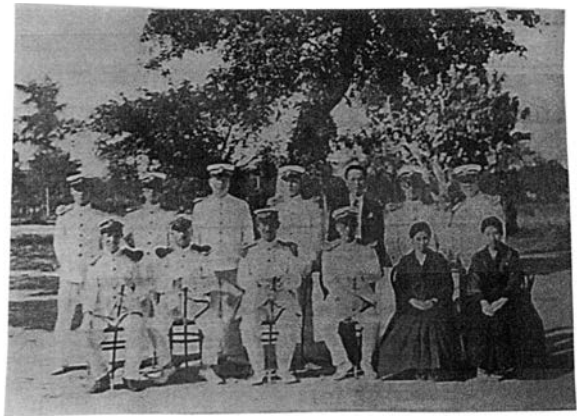


写真2 サイパン尋常小学校職員

と教師が一緒になって、「躍進気象の有る海外児童」を身体面からも育成しようとしていたことがわかる。それは保護者にも「家庭への願ひ」として、あせもや小さな傷の手当て、毎日の水浴と着替えなど日々の協力をこまごまと求めており、教師が衛生上訴えていたことと同様なことが、ここでも繰り返して述べられていた。

(3) 保護者会の活発な活動

「昭和九年度保護者会記事」からは、サイパン小学校の保護者会が活発に活動していたことが指摘でき、その様子が具体的につかめる。「会務」によれば、定期総会を含め、役員会を年7回開いており、運動会や学芸会の行事や教育上の問題点について話し合っている。定期総会では、新任教師の紹介のほか、会務報告、会計報告、役員幹事の改選などが議題としてあがっている（学校欄 1935：82）。また先にも述べたように、保護者会費で専任看護婦の雇い入れや

濾過器の購入など衛生面の取り組みを進めてきたが、そのほかにも自転車置場や昇降用のすの子板の設置などを保護者会費で行っている。これらをみるとサイパン小学校は内地の小学校と同様に、



写真4 昭和九年度 運動会

運動会は一大合同運動会（サイパン実業学校、サイパン尋常小学校、サイパン尋常小学校高等科、サイパン幼稚園と合同開催）として、ポンタムチョウグラントで11月23日の新嘗祭に行われたことなど、活動内容が詳細に報告されている（学校欄 1935：80-81）。

興味深いのは、「編集後記」にある職員の異動報告である。この年に新たにサイパン小学校に着任したのは、

- | | | |
|------|----|---------------------|
| 「御新任 | 五月 | 大越長吉先生（東京早大出身） |
| | 六月 | 藤崎正夫先生（鹿児島市松原尋常小より） |
| | 同 | 稲場英夫先生（島根県荒島村尋常小より） |
| | 七月 | 福本のぶ子先生（アスリート尋小より）」 |



写真3 昭和九年度 学芸会

保護者会が行事や運営面など学校の教育活動全体の中に参画し、活発に活動していたといえる。

昭和九年度の各種行事についても記載されている。例えば遠足会は六月と十一月の2回行われ、音楽会は三月に校歌披露会として、午後7時半から開催され、立錫の余地がないほど盛況だったこと。ラジオ新聞主催の軟式少年野球大会は、八月に第一回から第三回まで試合が行われたが、タナバコ校とアスリート校には快勝し、チャッチャ校には敗れたこと。運

と記され、保護者会定期総会でも紹介された。また、離任者は、

「御転任 八月 松尾隆成先生（コロール公学校へ）

同 迎 柳子先生（パラオ尋高小へ）」（学校欄 1935：84）

となっている。これらからは内地からの採用者、他の日本人小学校から来た者、逆に公学校や他の日本人小学校へ転任する者など教師の人事異動の状況が具体的につかめる。1930年代半ば、移民人口の増加に伴い児童数が増え、教員間の異動もさかんに行われていたものと思われる。

（4）児童文集にみる南洋の生活

「児童欄」には、サイパン尋常小学校2年から6年までの児童の作文43編が掲載されている。学年別の内訳は、2年：11編、3年：9編、4年：8編、5年：7編、6年：8編である。保護者会誌に児童文集が掲載されたのは、学校の実情を広く知らせる一つの方法であったのであろう。

内容別にみると、南洋の風景：10編、日常生活の様子：17編、学校生活の様子：8編、動物：6編、労働（仕事）：2編となっている。全体的な傾向として、南洋の美しい風景、特に海や月などの光景に素直に感動しており、また、南洋での子どもたちの生活のなかに、鯉のぼりや相撲、活動写真や人形遊びといった日本での生活や文化に近いものが取り入れられていたことが書かれている。

子どもの学校での生活は午前が中心で、授業が11時45分で終わると低学年は下校する。午後は技能教科が中心で、授業はだいたい1時45分に終わり清掃などをして帰る、というものである（学校欄 1935：20-21）。したがって家族の手伝いなど労働の場面は多いのではないかと考えていたが、2編と意外に少なかった。この2編は、甘蔗栽培の様子と鯉船が出航する場面を描いたものである。次のものはこのうちの甘蔗栽培の様子を描いた三年生の作品である。

かんしや（甘蔗のこと-引用者注）

三ノ二 岡谷 誠

ポーと汽車がやつてきた

あれ、まきをいつばいつんである

なんだまきぢやない、かんしやが

ずいぶんいつばいつんであるなあ

あれはおさとうにするからあんなに

たくさんつんでいくんだねえ

なんだか、かんしやを、すひたいなあ

かんしやだかんしやだ、かれいた（カレータ、牛車のこと-引用者注）に

何だいも何だいもつんで来る（以下、略）（児童欄 1935：60）

この児童はおそらく甘蔗の栽培現場をみて書いたものであろう。南洋興発株式会社の甘蔗栽培で働くといっても、甘蔗栽培人（小作人）と会社員（幹部）では仕事内容がまったく異なり、生活にも歴然とした差があった。例えば、「百姓（小作人のこと-引用者注）の子どもたちは、靴を買ってはもらえなかった。病気になっても医者にもみてもらえなかった。それにくらべて役人の子どもや、会社員の子どもたちは、皮靴に靴下をはいて、きれいな服を着て学校へきていた」（菅野 2013：39）という具合である。小作人の子どもは小さい時から手伝いをよくさせられたという。文集に寄せる子どもたちの親は、おそらく小作人は少なかったのではないかと想像する。

また、全作文のなかで現地住民が登場するものが3編あり、〈島民〉〈土人〉〈カナカの親子〉といった表現で出てくる。3編のうち、〈土人〉〈カナカの親子〉という表現がでてくる2編は外からながめ

たものだが、〈島民〉という表現の1編は実際に会話をした様子が書かれている。では、この3編のなかで、〈カナカの親子〉と〈島民〉という表現が出てくる作品をみてみよう。

海岸の朝

六ノ一 城田久夫

山の方を見ると太陽が半身を出し四方を照らし始めた。

海岸に出てみるとカナカの親子が水浴をして居て、さつぱりわからない話をして居た。

南の方で発動機の音がする。見ると大きな鰹船が大漁旗を押し立てながら進んでいく。乗組員は帽子やハンカチふりふり陸の人と別れを惜しんで居る（以下、略）（児童欄1935：71）。

鯉のぼり

三ノ一 鈴木右兵衛

（前略）弟が『鯉のぼりをかざつたよ』といつてゐました。ぼくがはつとして頭の上を見ると、大きな鯉が二つと吹流しが一つきれいにかざつてありました。

夜お父さんが島民の人に、『こんな大きなくじらをつつて来たよ。』といつて、笑はせました。鯉のぼりは、とてもきれいです（児童欄1935：59）。

前者「海岸の朝」の〈カナカの親子〉は、海岸での風景の一つとして描かれているにすぎない。後者の「鯉のぼり」は〈島民〉に、お父さんが日本の鯉のぼりを教えたのであろうか、言葉を交わしている様子が描かれている。子どもたちの作文から現地住民との交わりの様子が窺われるのは、この「鯉のぼり」の作文だけである。日本人の子どもたちの生活のなかで、現地住民との接触は希薄なものでしかなかったといえるのではなかろうか。

おわりに

以上、サイパン尋常小学校保護者会誌『さいぱん』の内容を紹介しつつ、学校での教育活動の内容をみてきた。

在住日本人児童の教育の本旨は、内地と同じであるが、「南洋の気候風土等を考慮し特に児童身体の発達に留意して、最も適応した南洋教育を施さねばならない」（宇宿 1936：12）とされている。この方針に沿って南洋群島での教育が行われ、内地の教育に劣らぬよう、児童の健康面に注意しつつ、保護者と教師らがともに協力しながら教育活動を創り上げていったことが読みとれる。そして、沿革には1935年3月25日、「御真影奉安所が新設竣工」され、「本校の位置使命の重大さ」（学校欄 1935：19）を示すとの記述があり、内地同様皇民化への傾斜がみられるようになる。

ところで、1936年の時点で南洋群島における日本人移民数は56,496人【表1】であった。そのうち沖縄出身者が31,380人であり、55.5%を占めていた。支庁別でみるとサイパンでの割合は全沖縄移民の78.6%にのぼった【表2】。この割合からするとサイパン小学校の保護者のなかにも沖縄出身者は多くいたであろうと思われるが、保護者会の会務報告をみると、役員改選での当選幹事（12名）のなかには沖縄出身者らしき氏名は見当たらず、やや奇異に感じられた。南洋群島社会では、「一等国民：内地人、二等国民：沖縄人／朝鮮人、三等国民：島民」という暗黙の序列があったといわれている（今泉 2014：283）。こうした序列が日本人小学校の保護者会の運営にも何らかの影響を及ぼしたということがあるのではないか。南洋群島における移民社会の現状と教育活動の実態について、今後さらに解明する必要がある。聞き取り調査などを行い、個別事例を重ねながらこの課題に取り組んでいきたい。

註

- ¹ 例えば、南洋群島教育会編・発行『南洋群島教育史』（青史社、1938 復刻版 [1982]）、南洋庁長官官房編・発行『南洋庁施政十年史』（龍溪書舎、1932 復刻版 [1999]、単行図書資料第 5 巻）、南洋庁編・発行『南洋群島要覧 昭和拾七年版』（1942）などがあげられる。
- ² 南洋庁立の中等学校のほか、南洋興発株式会社がテニアン（現ニアン）の附属補習学校（夜間、二ヶ年）のうえに全日制の専習科を設け、1938 年に三ヶ年の専習学校を設立した。これは中堅技術者の育成を目的としたもので、甲種実業学校程度の教育を行った。
- ³ 「卒業生の内地中等学校入学状況を主題として」（学校欄 1935：23）の記事によれば、昭和五年・12 人、昭和六年・3 人、昭和七年・7 人、昭和八年・5 人、昭和九年・3 人の内地進学者があり、それぞれ進学者氏名と進学先学校名が記載されている。
- ⁴ 「身体検査の状況（昭和十年度）」によれば、眼疾の児童数は、トラホーム：男 155 人、女 114 人、計 269 人、結膜炎：男 25 人、女 40 人、計 65 人、角膜翳：男 0 人、女 4 人、計 4 人となっている（学校欄 1935：78）。
- ⁵ 「学校医設置並職務規程」により、学校での衛生について、「各官立小学校及公学校に南洋庁医院職員中より学校医を任命し、少なくとも毎月一回（離島及遠隔の地は適宜）教授時間内に於て、其の衛生に関する各種の事項を調査せしむる方針をとつた」（南洋群島教育会 1938:767）と記されている。

引用文献リスト

- 今泉裕美子 2003「南洋へ渡る移民たち」大門正克・安田常雄・天野正子編『近現代日本社会の歴史 近代社会を生きる』東京：吉川弘文館、195-223。
- 今泉裕美子 2014「太平洋の「地域」形成と日本－日本の南洋群島統治から考える」『岩波講座 日本歴史 地域論（テーマ巻1）』第20巻、東京：岩波書店、265-294。
- 宇宿行郷 1936「南洋庁教育事務研究の序論」南洋群島教育会編・発行『南洋教育』第三巻第二号、8-27。
- 岡谷昇 1935「耳と目と口」サイパン尋常小学校保護者会編『さいぱん』創刊号、24-26。
- 「学校欄」1935 サイパン尋常小学校保護者会編『さいぱん』創刊号、16-26（其の一）、77-83（其の二）、84（編集後記）。
- 木下新蔵 1935「教育上に対する所感を述べて創刊の辞とす」サイパン尋常小学校保護者会編『さいぱん』創刊号、8-11。
- 小林藤太郎 1935「過去現在及希望に就いて」サイパン尋常小学校保護者会編『さいぱん』創刊号、13-15。
- 「児童欄」1935 サイパン尋常小学校保護者会編『さいぱん』創刊号、54-76。
- 条約局法規課 1962『委任統治領南洋群島 前編』（「外地法制誌」第五部）。
- 菅野静子 2013改訂版『戦火と死の島に生きる 太平洋戦・サイパン島全滅の記録』東京：偕成社文庫。
- 田中茂 1935「発刊を祝す」サイパン尋常小学校保護者会編『さいぱん』創刊号、5-6。
- 谷川儀六 1935「発刊の辞」サイパン尋常小学校保護者会編『さいぱん』創刊号、1-4。
- 成田龍一ほか10名編修 2014『新日本史A』東京：実教出版。
- 南洋群島教育会編・発行 1938 [1982]『南洋群島教育史』東京：青史社。
- 南洋庁長官官房編・発行 1932 [1999]『南洋庁施政十年史』東京：龍溪書舎（単行図書資料第5巻）。

南洋庁編・発行 1942『南洋群島要覧 昭和拾七年版』。

野村進 2005『日本領サイパン島の一万日』東京：岩波書店。

Educational Activities of Japanese Elementary Schools in Nan'yō Guntō (the South Seas) : Focusing on “Saipan” edited by Parents Association in the Saipan elementary school in 1935

Shigeko Kobayashi (Chuo University)

This study clarifies the educational activities of the Japanese school in Nan'yō Guntō (the South Seas) through the magazine titled “Saipan”, which was edited by a parents association of the Saipan elementary school in 1935. The magazine is composed of parents' articles, school history articles, teachers' articles and children's composition anthologies. In total, it has 85 pages. There were two types of educational system for Japanese children and native children, which were established by Nan'yō Chō (the government in Nan'yō Guntō). Under this system there were 25 Japanese schools in 1939, which were dealt with in the same manner as schools in Japan (home).

It is considered that there were fewer historical materials for education in Nan'yō Guntō. In that situation, the magazine “Saipan” concretely shows how the educational activities in the Saipan elementary school in 1935 were carried out with the cooperation of teachers and parents. This magazine has two valuable points. One is that it was edited in 1935, when Japan withdrew from the League, and the other that the Saipan Japanese school was the biggest Japanese school at that time, which had 8,582 students. “Saipan” records the characteristic information as follows; requests for teachers and parents, sanitary efforts in school, vivid activities of the parents association, and children's daily lives in Nan'yō Guntō through composition anthologies. These are why this magazine was noticed particularly regarding education in Nan'yō Guntō .

Keywords : Nan'yō Guntō, Saipan, Japanese school, magazine by parents association, educational activities

〈調査報告〉

海外移住資料館とハワイ日系社会との関係強化について ハワイ日系社会関係促進調査(2015年10月15日-21日)の報告

飯野正子(津田塾大学名誉教授・前学長・海外移住資料館学術委員会委員長)

玉林洋介(独立行政法人国際協力機構 横浜国際センター次長)

はじめに

当海外移住資料館の目指すところは、「海外移住と日系人社会に関する知識の普及」と「移住に関する資料・情報の整備と提供」であり、これらを達成するために、当資料館は2002年の開館以来、努力を重ねてきた。その努力を注入した活動のなかに、例えば企画展があるが、最近では、ことに移住者送出県の視点から海外における日系人社会を見る展示が関心を集めた。また、次世代を担う人びとに多文化共生に関する学びの場を提供することも、当資料館の活動の一つであるが、これも最近多くの若者の興味を引いているようで、喜ばしい。昨年度の入館者が4万人を越えたという事実も、当資料館の目指すところが多くの人々に認識され共有されていることを示している。

このような状況で、さらなる努力が必要とされているのは、当資料館と似た機能と目的を持つ海外の資料館などとの連携を進めることである。2012年秋の開館10周年記念シンポジウムにおいても、「移住の歴史や意義を検証し、学術的価値のあるものにするためには、移住の送出側と受け入れ側双方の研究が必要であること」、「当資料館が送出側の拠点として移住研究の促進につながったこと」、そして「ここでさらに必要なのは、当資料館と海外の資料館等との連携であること」が確認された。

今回のハワイ調査は、まさに、その「海外の資料館等との連携」を進める上での大きなステップであったといえる。当資料館と南米にある種々の資料館・団体・組織との連携はかなり進んでいるが、北米に関しては、これまで大きな進展がみられていなかった。そのような状況で、まず、日本から北米向け移民の最初の到着地であり、また多数を受け入れたハワイに焦点を当てることにした。現在ハワイの日系人社会で活動している種々の日系人組織を訪ね、当資料館についての情報を手渡すと同時に、今後の連携について話し合う機会を持ったのである。玉林洋介次長の報告にその詳細が生き生きと述べられているが、全体として、この試みはまさに成功だったといえる。当資料館について認識のなかった組織にも当資料館の存在とその意義を伝え、今後、当資料館での展示や教育活動に協力を得る可能性が、それぞれの訪問先で強く感じられたからである。

このような連携を通して、当資料館はいっそう羽ばたくことができ、さらに多くの人々に重要な情報を伝えることができる。当資料館が人びとに訴える魅力的な展示を作成するためにも、このような連携は大きなプラスであり、そのことは、当資料館の意義を示す指標の一つである入館者増加に必ずやつながるはずである。ハワイの日系人社会のリーダーたちとの話し合いをとおして、そのことを実感した。世界で活躍する日系人の祖先の祖国日本にあって、当資料館が日本人移民および日系人の歴史を伝えるハブとなることは、関係者の強い願いである。

今回の調査をとおして、当資料館の果たす役割がいかに重要か、そして今後、国内のみならず国際的な連携を発展させることが当資料館の将来にとって必須であるかを、改めて認識した次第である。とくに興味深く思ったのは、国際的な連携を密にすることが、日本国内での移住者送出県と当資料館の連携をも密にするという例である。玉林次長の報告にあるように、ハワイにある県人会の

方々との話し合いから、県と当資料館との絆がさらに強まったという印象を受けたからである。これは、移住研究における最近のトランスナショナルな動きへの関心の強さとパラレルをなす、国際連携の重要な一面であり、ここにおいて当資料館の存在意義が一層強く認識されると同時に、さらに大きな社会貢献につながるであろうと信じている。(飯野正子)

1 ハワイ調査の背景

2012年、JICA 横浜海外移住資料館（以下「移住資料館」とする。）は10周年記念シンポジウムを開催した。シンポジウムには全米日系人博物館やブラジル日本移民史料館など海外の日系博物館・資料館の関係者を集め、移住資料館と海外の資料館などとの連携、博物館人材の育成を確認した。これを踏まえ、日系研修ではペルー、メキシコからデジタル資料の作成技術向上を目的に研修員を受け入れたほか、2015年10月からは企画展としてカナダ日系文化センター・日系博物館から資料をお借りし、TAIKEN 体験 ―カナダ日系人未来へつなぐ道のり― を開催することができた。

一方、移住資料館では、企画展の開催を通じて移民送出県との関係再構築そして強化することを進めている。2013年の沖縄移民展を皮切りに、和歌山展、広島展¹を開催、福岡展も準備中²で、各県とはこれを機会に、JICAと連携しつつ、それぞれの県系人を通じたビジネス・ネットワークを強化する動きになっている。

企画展を開催するにあたって気がつくのは、どの移民送出県にとっても、ハワイに多くの移民を輩出しており、今もハワイの県人会との文化のみならず経済交流がとても大切な位置づけとなっていることである。各県はハワイの県人会との関係を強めており、周年行事などには必ず県や地元経済界の幹部が往来している³。

移住資料館は、常設展示でハワイに関する移民史を多く紹介、ニッケイ・ライフ・ヒストリー・コーナーで最後を飾るハワイ3世から6世までの大家族の写真は象徴展示の一つとなっている。移住資料館の学術委員会が編纂している『研究紀要』においても、島田法子委員によるハワイ移民研究論文が発表されている。

しかし、移住資料館が国際協力を担うJICA⁴にあること、日本政府などによる組織的なハワイ移民が戦前であったことから、ブラジルなどに比べると、企画展や調査研究は必ずしも多くはない。10周年記念シンポジウムでも、ハワイからはハワイ島ヒロにある布哇日系人会館（ハワイ・ジャパニーズ・センター）からの出席があったが、ホノルルのハワイ日本文化センターからの参加はかなわなかった。

さらに、ここ数年ハワイ日系社会との交流が希薄となっていたが、広島や福岡の企画展において、各国にいる現在の県系人を紹介する展示を行うことになり、ハワイ日系社会の情報や資料収集が必要ともなった。

こうしたことから、移住資料館の活動の一環として、飯野正子学術委員会委員長を団長とし、ハワイ日系社会との関係促進を図り、常設展示のリニューアルや企画展の開催、学術研究プロジェクトにつなげることを目的に、調査団を派遣することとなった。本稿はその調査結果から得た成果と気づきをまとめたものである。

2 調査結果概観

調査団は1週間という短い期間であったが、オアフ島のホノルルとワイパフ、ハワイ島のヒロに

訪問し、ハワイ日本文化センターやハワイ日系人連合会をはじめ広島、福岡、沖縄の県人会の代表者など40人以上の日系人の方々とお話しすることができた。

ハワイは日本の近代移民が赴いた最初の地。渡航した多くの移民は出稼ぎを目的としていたが、官約移民2万9千人余のうち4割がハワイに定着したと推定されるように、ハワイを生涯の地とした移民も少なくない。現在のハワイ州の人口は141万人で、うち日系人は18.5万人、混血を含むと31.2万人と推定されており、マイノリティではフィリピン系に次ぐ位置にある⁵。

この調査の結果、日系人が150年近くにわたる歴史の中、苦難を乗り越え、ハワイ社会で信頼を勝ち得て、連邦議員やハワイ州知事などリーダーを多く輩出し、確固たる地位を築いていること、そして、日系社会の結束力は強く、年を通して様々な活動を展開していることを確認した。

また、移住資料館の日系社会に果たす役割のさらなる可能性を確認した調査でもあった。

3 訪問したハワイの博物館・資料館

(1) ハワイ日本文化センター

ホノルルにあるハワイ日本文化センターは1987年に開館した。センターには歴史展示室に加え、コミュニティスペースや道場がある。歴史展示室のテーマはOkage Sama De。日本人の価値観として、感謝や頑張り、我慢などを継承していくことを狙っている。展示は「元年者」から始まり、さとうきび労働でのホレホレ節、当時の生活、他民族とも結婚している大家族の写真、20世紀初頭のサトウキビ耕作でのストライキ、商店の再現など時代を追う構成となっている。移住資料館が参考の一つとしたことが良くわかる。スタッフの説明はユーモアに富み大変面白かった。目を引いたのは教室の再現である。黒板には大きくDemocracyと書かれていた。日系移民は子供の教育を重視したが、米国の学校で民主主義を学び、それが日系人の確固たる地位を築いたことを示唆している。併設される図書室の蔵書は約2000冊。非日系の調査員を起用し調査研究を展開している。移住資料館との共同調査なども可能であろう。



ハワイ日本文化センター入口



同センターの岩田デリック（教育担当主任）に歴史展示室の案内を受ける調査団一行



林野キャロル同センター所長(中央)と歴史展示室入口前にて

現在の所長は林野キャロル氏⁶。現在の文化センターの中心メンバーは、移住資料館の存在を十分に認識していなかったことは残念だが、企画展の相互展示など発展的な関係を構築することを確認した。ハワイ日本文化センターでは、ハワイの強制収容所を紹介するThe Untold Story(2012年)などの企画展を開催している。我々からも広島移民展や福岡移民展を開催または準備していることを紹介したところ、大いに関心が示された。

(2) 布哇日系人会館（ハワイ・ジャパニーズ・センター）

ハワイ島ヒロにある。2003 年、本田正文現ハワイ大学准教授が中心となり、ハワイ島など多くの日系人が協力して、倉庫を改装して設立された。ここにはハワイのジャーナリストでハワイ報知にも在籍した大久保清⁷が集め、「ハワイ島日本人移民資料館」に展示していた収蔵品を、布哇日系人会館（ハワイ・ジャパニーズ・センター）としてリニューアルし展示・保管している。本田准教授が館長を務め、2015 年から常勤者（ヒウラ・アーノルド氏）を起用し、調査研究も行っている。センターには展示ホールを中心に、多目的ホールや図書室などがある。展示ホールでは、戦前からのヒロでの生活や職業、娯楽を写真や標本を中心に紹介しており、広島県や沖縄県など代表的な県人会のコーナーも置かれている。この展示ホールと図書室には多くの標本や資料が残されており、移住資料館で移民送出県の企画展を実施する場合に有用である。



布哇日系人会館前にて、同館長を務める
本田ハワイ大学准教授



布哇日系人会館のロゴマークについて
説明する本田准教授

他に、オアフ島ワイパフにある沖縄文化センターにも小さな展示があり観覧したがこれは後述する。

4 広島、福岡、沖縄、各県人会の活動

(1) 広島県

1885 年 2 月 8 日、945 人の日本人がホノルルに到着した。明治政府とハワイ王国の互惠条約に基づく第 1 回目の官約移民である。うち広島県人は 222 人、安芸や佐伯の者が多かったという。官約移民は 1894 年までに 2 万 9 千人余が渡航、うち広島県人は 1.1 万人余、全体の 38% を占めるに至っている。その後ハワイは 1898 年に米国に併合されるが、日本人は私約移民として、1924 年の排日移民法の成立までハワイに渡った。1920 年のハワイの日系人は 25 万人、うち 11 万人余は広島県人であった。

4 割を占める広島県人は日系社会をリードしてきた。1909 年、サトウキビ耕作において他民族よりも低賃金であったことに不満をもった日系人はストライキを起こした。これを指導した中心人物には、広島県人であった旅館経営者の山城松太郎やジャーナリストの田坂養吉がいた。また、広島県人はハワイ日系社会に様々な文化や生活様式をもたらしたが、象徴されるのは宗教であろう。広島県人は浄土真宗の信者が多く、19 世紀末には、浄土真宗である本派本願寺の布教活動が始まっており、本願寺は海外寺院としてハワイに広まり、仏教会としての日



宮尾ウェイン氏（ホノルル広島県人会会長）

系社会での中心的な役割を果たしている。本願寺は、米国社会に溶け込むために、キリスト教的な要素も取り入れ、ホノルルやヒロの寺院は一見するとギリシャ聖教會的な外観となっている。ヒロ別院では日曜日には朝 10 時から仏教講義、11 時から英語による「礼拝」が行われていた。本願寺は現在ハワイ州 37 か所に寺院があると言う⁸。また、ホノルルの旧日本人街そばにあるハワイ出雲大社も、1906 年広島県の社司、宮王勝良が、出雲大社本院の命を受けハワイに渡航、布教活動を行いつつ、大社を建立している。ハワイ島には KTA という最大のスーパーマーケットがあるが、これは広島系 2 世の谷口コウイチが 1916 年に開業したものである⁹。オバマ政権では、広島県人でハワイのカウアイ島に移住した祖父母を持つ新関（シンセキ）エリック氏が退役軍人長官に任命された。

ホノルルで宮尾ウェイン会長にお会いした。ホノルル広島県人会は高校教師や生徒の交流、インターナショナルフェスティバル開催など幅広い活動を展開している。ホノルル市と広島市は、ハワイでは最も古い 1959 年に姉妹都市関係を構築している。2015 年は被爆 70 周年に当ることから、広島平和記念資料館で展示される佐々木貞子さん¹⁰にまつわる折り鶴の紹介展示をハワイで行った。

2015 年 5 月、湯崎知事は広島県人会発足 60 周年を機に 5 月に訪布し、交流の促進と広島とハワイをつなぐ若いビジネス人材の育成での連携を確認している。

(2) 福岡県

ハワイでの福岡県人は、広島や山口、熊本ほどの比率はないが、それでも 1894 年までの官約移民のうち 7.5%、2100 人余は福岡県人であった。

そのような中で、福岡県人から 1963 年に米国日系人初の連邦議会議員となった井上（イノウエ）ダニエル上院議員¹¹、1974 年にハワイ州で最初の日系人知事となった有吉（アリヨシ）ジョージなど、ハワイひいては米国日系社会のリーダーを多く輩出している。アリヨシ知事との関係から、福岡県とハワイ州は 1981 年、他に先駆けて姉妹都市となり、2016 年には 35 周年となる。福岡県人は筑前、筑後の出身者が多かったが、アリヨシ知事のルーツである豊前はめずらしいという。

ホノルルで永井ふさよ会長にお会いした。福岡県人会には約 175 家族が集まる。毎年 3 月に開催されるホノルル・フェスティバルに県人会として参加するなど、県人会は現在も盛んな活動を展開している。

福岡県は少なくなりながらも一定の額を海外の県人会との交流に割いている。福岡県は 3 年に一度「海外福岡県人会世界大会」を開催しており、2016 年に第 9 回をメキシコで開催する。その他、県費で継続しているジュニア招へいプログラムには、ハワイからは毎年ホノルル、ヒロ、コナから各 1 名を派遣している。

福岡県国際交流センターは県人会との交流を促進しており、市町村からの派遣も盛んに行われている。調査団がヒロに赴いた時、本願寺ヒロ別院のサンガ¹²ホールでは、ハワイ島の日本人商工会議所が物産展を開催しており、そこに福岡県みやこ町の井上幸春町長を団長とし、商工会も参加した一行が物産展に参加していた。ビジネスも睨んだ交流である。国際交流センターが橋渡ししているという。

ハワイ島では能丸淳一会長にお会いした。能丸氏は国立天文台ハワイ観測所の准教授で長くハワイ島に住んでいらっしゃる。福岡県人会の会長は県系人 2 世と交代で続けているとのことだが、こ



ハワイ福岡県人会の永井ふさよ会長（中央）、関谷友行
レイモンド前会長（右）、ニッキ・トンプソン副会長

ういった新しい世代が流入し、県人会を引っ張っているのも面白い。

県人会も、九州大や九州国立博物館との関係を築いている。福岡移民展に向けて、県人会からは、かつて作成したパネルの電子情報を提供して頂くこととなった。

(3) 沖縄県

沖縄県はその歴史から、ハワイへの移民も独自の歴史をたどっている。沖縄はもともと耕す土地が少なく、人口が過剰であったのに加え、1879年の琉球処分以降経済的にも苦境となり、飢饉にも見舞われた背景があった。沖縄の移民史は、移民の父と呼ばれた當山久三が、こうした苦境を打破するために海外に活路を見出そうとしたことに始まる。1900年にハワイに27人の移民が上陸した。最初の移民は、日本語が話せず、他の日系人とコミュニケーションをとることが難しかった、と言われる。ハワイへは1万7千人余が渡航し、1940年では1万3千人余がハワイに暮らしていた。ハワイでの沖縄県人は広島、山口、熊本に次ぐ4番目であったが、1940年当時の各県の人口に対するブラジルなども含めた海外移民を比べると、沖縄は10.0%で、熊本の4.8%、広島の3.9%を大きく上回っている。現在の人口は4万人と推定される¹³。

沖縄県人会となるハワイ沖縄連合会の活動はハワイにおいて最も活発である。ハワイには沖縄県にある48の市町村や字¹⁴の会があり、これをまとめたのが連合会である。8月のオキナワン・フェスティバルは4万人を集め、5月にもエイサー・フェスティバルを開催している。1990年、沖縄移民90周年の時に、寄付金や沖縄県の支援を受けて、ホノルルから車で1時間ほど離れたワイパフに、ハワイ沖縄文化センター（以下「文化センター」とする。）を設立している。文化センターにはボールルームや茶屋、沖縄庭園、ハワイの沖縄移民史についての展示室がある。展示室には、當山久三から始まる移民史や当時の生活や文化を紹介する展示が設けられている。また、沖縄文化を次世代に受け継ぐための三線教室やウチナーグチ教室が開かれている。ハワイの沖縄県人が自らをオキナワンと呼ぶ所以である。同じワイパフにあるハワイアン・プランテーション・ビレッジでも沖縄系移民の家は日系とは別に展示されており、沖縄県人が他の日系人とは違う生活習慣があったことが認識されている。



ハワイ沖縄文化センター内の展示



沖縄移民の父と呼ばれた當山久三の碑文



ハワイ沖縄文化センター外観

文化センターでは、勢理客（セリカク）ジェーン連合会専務理事にお会いした。専務理事が強調していたのは「家族」、つまり「ゆいまーる」¹⁵である。翁長知事は沖縄文化センター設立25周年、沖縄県・ハワイ州姉妹提携30周年で、就任以来既に2回も訪布し、ビジネスセンターとなるハワイ沖縄プラザの起工式も行った。

2014年12月、ハワイ州知事に沖縄県人の伊藝（イゲ）デビッド氏が就任した。ハワイ日本人連合会の会長も2014年から沖縄系の玉城（タマシロ）サイレス氏が就任している。タマシロ会長は、

2015年10月に開催される海外日系人大会の後、那覇市とホノルル市の姉妹都市提携50周年を機に、那覇に赴き、城間市長と面会するとのことだった。他の移民送出県同様に、沖縄県人もまたハワイにおいて目覚ましい活動をしている。

5 調査を通じて得たハワイ日系社会についての気づき

(1) ホノルル

ホノルルがあるマウイ島の純粋な日系人は15万人¹⁶。現在の日系人の多くがホノルル及びその周辺に居住する。ハワイ島ヒロでサトウキビ栽培に関わってきた日本人移民は、その後高賃金を求めて、ホノルルに移り、製造業やサービス業に従事するようになった。米国本土に転航する者もいた。戦後はホノルルが日系社会の中心地となった。

ホノルルでハワイ大学の小川（オガワ）デニス教授にお会いした。オガワ教授は、日本文化をハワイの日系社会に継承するために様々な活動を展開しており、『コドモノタメニ Kodomo No Tame Ni』（1980）や『ハワイと日系アメリカ人』（1988）など多くの著作がある。オガワ教授はケーブルテレビ局「ニッポンゴールデンネットワーク」を設立しているが、これも日本文化継承とともに、高齢化する一世の娯楽を目的にしているという。

ハワイ報知社もユニークなビジネスを実践している。1912年創刊、現在はハワイ州において唯一の日刊紙で、日系社会において重要な媒体となっている。ハワイ報知社を支えたポール円福前社長は、読者がいる限り、戦後53年間新聞発行を続けてきた。円福氏も広島県人である。現在の発行部数は公称8000部。創始者の牧野金三郎が静岡県出身であり静岡新聞社と提携している。2015年から世界に3台しかない最新鋭の印刷機を導入し、朝日、読売、日経の国際版を印刷、同日販売している。ハワイの邦人企業に邦字紙と共にハワイ報知を販売する戦略で、増収となっている。他にも日系コミュニティ誌や学校誌の印刷を取り扱っており、印刷も生業としながら、日系社会を支えている。

ホノルルでは毎年3月にホノルル・フェスティバルが開催される。ハワイ日本文化センターやホノルル商工会議所、ハワイ日米協会が支え、基金を設立して運営されている。1995年から始まったフェスティバルは年々規模を大きくし、日本の各県からもフラやダンスなど多くの団体が参加し、今やハワイ最大の文化交流イベントに発展した。

(2) ヒロ

ハワイ島の人口は19.4万人。うち1.8万人が日系人であり、混血を含めると4万人と推定されている¹⁷。

20年以上前にサトウキビ栽培は中止され、多くの日系人がホノルルなど島外に出て行った。それでも日系人の活動は非常に活発で、ハワイ島日本人協会の菅弘志会長によれば、会員は約400世帯、年間15ドルの会費を徴収していると言う。文化の日と、こどもの日に合わせて隔年で行事を開催している。ハワイ島日本人商工会議所も、福岡県の章で述べたように、様々なビジネスイベントを開催している。

しかし、ハワイ州には毎年150万人以上の日本人が観光に訪れているが、ハワイ島には5000人程度しか来島せず、火山を見学し、「ピックアイランド」¹⁸でクッキーを買って帰る旅程となっており、ハワイ島の日系社会は日本との関係強化に腐心している。

ホノルルとヒロでは日本人墓地も訪問した。墓地は日系人の生活信条を体現するもので大変興味深かった。いずれの墓地も高台にあり、墓石の形は日本的であるものの様々であったが、墓石の横には必ずと言っていいほど出身県・地区が刻まれており、故郷への思いが伝わってくる。ヒロの日

本人墓地には、沖縄県人による亀甲墓がいくつも並んでいた。

(3) ハワイ日系人史の再確認

ハワイ移民史は「元年者」を抜きにしては語れない。ハワイ日本文化センターでも、布哇日系人会館でもそれは明確に示されていた。この者たちは、米国人ヴァン・リードが横浜居留地で募ったもので、1868年、明治政府の許可なく150余名がハワイに渡った。当時、ハワイ王国は白人の流入によりもたらされた疫病などが理由で人口が急激に減少していた。ポリネシア系ネイティブ



マキキ日本人墓地にある「明治元年渡航者之碑」

は1832年には13万人いたが1884年には4.4万人までに減少したとされる¹⁹。ハワイではサトウキビ栽培は重要な産業であり、中国人労働者を導入したが定着率が悪く、労働力として日本人が求められた。「元年者」は1870年に60余人が明治政府の許可を得つつ米国西海岸に出稼ぎとして「転航」したり、帰国した者が多い。しかし、ヒロやホノルルに残り、ヒロでは元年者の子供が学校の先生にまでなっている。ホノルルのマキキにある日本人墓地には、ハワイ日本人移民慰霊碑とともに、「明治元年渡航者之碑」が置かれている。この碑は1927年にハワイ在留日本人有志が、「元年者」がハワイと日本との関係をきわめて密接にした草分けであることを記念、そしてハワイに対する「報恩」のために建立された。

官約移民はそれから17年後のこととなる。しかし、その時は明治政府がハワイ王国と互惠条約を締結し送り出している。ハワイ王国は最初の官約移民から8年後に王朝が滅亡²⁰してしまうが、日本近代史において最初に移民が渡ったのは「ハワイ王国」であったという認識は重要であろう。

もう一つ着眼したいのは、イノウエ上院議員やアリヨシ知事など、ハワイから米国に影響力を及ぼす多くの人材が輩出されたことである。ここにはハワイでの日系人の市民権獲得の歴史がある。ハワイでのプランテーションは米国人など数家族により独占的に経営され、日系人の賃金は他民族に比べ見劣りするものであった。オアフ島では戦前の1909年、1920年にストライキが行われた。ストライキはいずれも敗北したが、日系移民は子供や孫の教育に力を入れ、彼らは民主主義を学び、そして権利を勝ち取ってきた。第一次世界大戦にも日系人が参戦していることはあまり知られていない。

真珠湾攻撃はハワイ日系人の安定してきた生活をどん底に落とす大事件であったが、強制収容所に収容されながらも、彼らの多くは米国に忠誠を誓い、442部隊やMISに参加し、命を落とす者も大勢いた。戦後は、多くの2世が法律などを学び、弁護士になる者が多かった。イノウエ上院議員は法律を学び、アリヨシ知事は弁護士であった。現在のハワイの日系人の多くが民主党を支持しているのは、プランテーション所有者の多くが共和党支持者であるからである。

ハワイの日系人は、150年近くにわたって、誠実かつ実直な生活と相まって、市民権、そして信頼を勝ち取ってきた。

今回の調査では、ヒロにおいて、熊本同志会の会長や福島県人会の会長にもお会いした。福島県いわき市の常磐ハワイアンセンター²¹のフラには、ハワイ島の福島県人会が関わっているという。山口県の周防大島町には日本ハワイ移民資料館が設置されている。今回の調査は、広島、福岡、沖縄にとどまったが、各県の活動には興味が尽きないところである。

移住資料館で実施する学術研究プロジェクトには、2015年ハワイ「元年者」移民から150年となることを機に、移動する人の視点から見る国際関係を切り口に、「海外移住150年を振り返る」との提案がなされ採択された。ハワイについて、新しい切り口の研究結果が期待される。

6 海外移住資料館が各国日系人社会の「ハブ」として果たしうる役割

結語として移住資料館に期待できる役割を述べたい。

今回の調査での最大の収穫は、移住資料館がハワイをはじめとする海外日系社会はもとより、広島県や福岡県など移民送出県との「ハブ」として、その役割が大いに期待されることであり、ハワイの県人会から期待されていることである。ハワイ日本文化センターや布哇日系人会館との共同企画展の開催、共同の調査研究も期待される。

例えば、移住資料館で開催している沖縄や和歌山、広島、準備中の福岡の移民展について、その巡回展を、ハワイや米国本土、カナダ、ブラジルなどで開催すれば、それぞれの日系人がその歴史や生活を知ることができるであろう。また、2014年夏に開催したララ物資展²²を開催する意義もあろう。ハワイの日系社会も戦後復興でララを通じて支援していることに加え、広島や沖縄にはそれぞれの県人会が支援している。ハワイの日系社会において、ララ物資での世界各地の日系社会の動きを知らせることもできるであろう。

島田法子委員の研究紀要での論文「ハワイ盆踊りにみられる伝統文化の継承」については、ハワイの祭りについての企画展開催、ひいては常設展示「日本の中のニッケイ 世界の中のニッケイ」コーナーのリニューアルにも結び付くであろう。上述した「元年者」についても、ハワイ日系社会との共同研究が可能である。

ハワイ日本文化センターも布哇日系人会館も日本人の価値観を伝えていくことを重要なテーマとしている。私たちの展示がいくばくなりとも日本の価値観の継承に役立つかもしれない。ハワイ日本文化センターと布哇日系人会館とのこれまで以上の協力を進めていきたい。

また、移住資料館は、ハワイやブラジルなど各国の日系社会との結びつきを強化する役割を担えるであろう。日本では毎年海外日系人大会が開催されているほか、沖縄県、福岡県、山口県は県系人の世界大会²³を定期的に開催しているが、ハワイでは各県人会がブラジルなど他国の県人会との具体的な結びつきを持っていることを確認できなかった。

移住資料館が企画展や共同研究による「ハブ」となり、各国の県人会と移民送出県との関係強化にも寄与することは、結果として日系社会支援につながることである。そこからは様々な交流やビジネスなど無限大の可能性があるかもしれない。

ハワイは日本人が好んで海外旅行先に選ぶ地であり、毎年大勢が渡航している。ホノルル空港には、イノウエ上院議員と、読売ジャイアンツの往年の名投手、与那嶺（ヨナミネ）ウォーリーのゆかりの品がかなり大きなショーケースに展示されているが、立ち止まる日本人観光客は少ない。今の日本人に、150年近くハワイ日系移民史は必ずしも知られていない。また、日本人観光客とハワイの日系社会との交流は、ハワイの日系人が満足するまでには至っていない。移住資料館は、年間7600万人が集まる横浜みなとみらい地区にある。その移住資料館で、ハワイの日系社会を歴史とともに今も伝えることにより、ハワイの日系社会に寄与することができるであろう。（玉林洋介）

註

¹ 沖縄移民企画展「雄飛 — 沖縄移民の歴史と世界のウチナーンチュ」2014年3月－5月開催。和歌山移民企画展「連れもて行こら 紀州から！ — 世界にひろがる和歌山移民 —」2015年3月－5月開催。広島企画展「広島から世界へ～移住者の歴史と現在～」広島県立文書館で2015年10月－12月開催。海外移住資料館では2017年3月に開催予定。

- ² 2016年3月から「ルーツは福岡 夢は世界へ〜世界で活躍する福岡移民〜」を開催する。
- ³ 和歌山移民は、ハワイではケンケン漁（疑似餌を使ったカツオ漁）の考案と日本への伝播などで目覚ましい活躍があったが、帰国者も多く、現在県人会は存在していない。
- ⁴ JICAの最初に設立された前身団体は1954年に設立された日本海外協会連合会。日本人の海外移住を取り扱っていた。JICAは前身団体から戦後の特に中南米を対象とした技術移住について送付と定着を支援してきた。その後何度かの統合を経て現在に至っているが、この歴史から、現在日系社会支援の実施を担う政府唯一の機関となっている。
- ⁵ 在ホノルル総領事館「ハワイ州要覧」2015年11月。
- ⁶ 林野氏は米国本土からマネジメント能力を買われ起用された。彼女をハワイ出身のスタッフが支える。現在専務理事を兼務している。専務理事は本田正文ハワイ大准教授が務めていた。センターの理事会は多くの関係者が連ねており、ビショップ博物館の日系移民資料の取り扱いなどで理事会の意見がまとまらないこともあるそうである。
- ⁷ 1905年新潟県生まれ。1924年ホノルルに移住、その後ハワイ新報記者、布哇中央学園の日本語教師になる。1928年コナに転居、コナ反響（邦字紙）、ハワイ報知などに携わる。1941年に日本人収容所に収容される。1942年軍の要請によりハワイ報知を再開。1955年ヒロタイムス創刊。1965年ハワイ島日本人移民資料館を開館。2001年逝去。（以上、中川美佐「土佐からハワイへ」から）布哇日系人会館はこの資料を引き継ぎ開館した。
- ⁸ 本願寺信者には沖縄県人も入信していると言う。沖縄は、例えば台所にヒヌカン（火の神）を祀るなど、土着の神に対する信仰が強く、沖縄県では現在でも特定宗派の仏教や神道、キリスト教は大きな広がりを見せていない。山口県移民は浄土宗の信者が多いと言う。
- ⁹ ホノルルで見かけるABCマートやジッピーズレストラン、日本人観光客が必ず買って帰るマカデミアナッツチョココレートのハワイアン・ホーストなど、日系人ゆかりのものは実に多い。
- ¹⁰ 2歳で被爆し12才で白血病で亡くなる。闘病中に折り鶴が贈られ、本人もおおようになる。その後「原爆の子の像」の建立へとつながり、今でも全国から折り鶴が届けられている。
http://www.pcf.city.hiroshima.jp/virtual/VirtualMuseum_j/exhibit/exh0107/exh01071.html
- ¹¹ 母方は広島県人である。
- ¹² 「サンガ」とは仏教用語で集いという意味。
- ¹³ 文中の統計数字は沖縄県教育委員会『沖縄県史』から。現在の沖縄県人の推定数は、勢理客専務理事に拠る。
- ¹⁴ 沖縄県は字（部落）の結びつきが強い。例えば、浦添市（うらそえ）ではその字で生まれ育った者をウラシーンチュと呼ぶ。
- ¹⁵ 結まーる。ウチナーグチ（沖縄語）で絆。
- ¹⁶ 在ホノルル総領事館「ハワイ州要覧」2015年11月。
- ¹⁷ 同上。4万人の推定は本田准教授に拠る。
- ¹⁸ Big Island Candies。今ハワイで人気のクッキー。ハワイ島の熊本3世が創業した。
- ¹⁹ B・P・ビショップ博物館『図説ハワイ日本人史 1885-1924』
- ²⁰ 米国に併合されたのは1898年。
- ²¹ 1990年にスパリゾートハワイアンズに変更。
- ²² 「ララってなあに？日本を助けたおくりもの」（2014年8月－10月まで開催）。ララは、Licensed Agencies for Relief in Asia アジア救済公認団体。ララ物資のうち2割は、米国、ハワイ、ブラジルなどの日系人からの支援物資であった。

²³ 沖縄県は5年に一度の「世界のウチナーンチュ大会」を那覇で開催しており、2016年に第6回を開催する。

引用文献リスト

- JICA横浜海外移住資料館編 2004 『海外移住資料館展示案内』 横浜：JICA横浜。
- JICA横浜海外移住資料館編 2013 『海外移住資料館の10年』 横浜：JICA横浜海外移住資料館。
- 島田法子 2015 「ハワイ盆踊りにみられる伝統文化の継承」『JICA横浜海外移住資料館研究紀要』 9、1-19。
- 「おかげさまで」ハワイ日系移民の物語 ハワイ日本文化センター
- 「ハワイの日系人」ハワイ日本文化センター
- “KACHIKAN VALUES” Japanese Cultural Center of Hawaii 2001
- 「ハワイ・ジャパニーズ・センター」
- 「ハワイ沖縄連合会・ハワイ沖縄センター」
- 後藤明・松原好次ほか編著 2004 『ハワイ研究への招待』 西宮：関西学院大学出版会。
- ハワイ報知社編 2008 『アロハ年鑑』 ホノルル：ハワイ報知社。
- 広島県編 1991 『広島県移住史』（資料編） 広島：広島県。
- 沖縄県教育委員会編 1974 『沖縄県史』（第7巻 各論編.6 移民）沖縄：沖縄県教育委員会。
- 石川友紀ほか編 2000 『當山久三小伝』 金武：金武町役場。
- 石川友紀 2001 「沖縄移民展開の背景と足跡」『沖縄国際大学 南島文化研究所 紀要』 23。
- フラクリン王堂・篠遠和子共著 1985 『図説ハワイ日本人史1885-1924』 ホノルル：B・P・ビショップ博物館。
- 「ハワイ州要覧」在ホノルル総領事館 2015
- 中鉢奈津子 2007 「ハワイ日系人社会の特徴」『外務省調査月報』 4。

引用 WEB 情報

Discover Nikkei

<http://www.discovernikkei.org/ja/>

【上記以外の海外移住資料館ハワイ関連特別（企画）展】

2005 ヨコハマ・ハワイ歴史展示 アロハシャツと日本人移民の歴史

2012 ハワイに生きる日系人 受け継がれる日本の心

“Strengthening the Relationship between the Japanese Overseas Migration Museum and Nikkei Communities in Hawaii” — Report on the Research Trip Visiting Nikkei Communities in Hawaii (October 15-21, 2015) —

Masako Iino (Tsuda College / Chair, Academic Advisory Committee, JOMM)
Yosuke Tamabayashi (Japan International Cooperation Agency)

The Japanese Overseas Migration Museum at JICA Yokohama aims to “increase knowledge about overseas migration and Nikkei communities” and to “administer and provide materials and information on migration”. In October 2015, the Museum sent a research team, headed by Prof. Masako Iino, Academic Chair of the Japanese Overseas Migration Museum, to Honolulu and Hilo, with the purpose of promoting closer relations between the Museum and Nikkei communities in Hawaii. Hawaii is the place where the first Japanese emigrants landed, and, today, many Nikkei people play active roles there, as well as in other parts of the US. This article summarizes the findings and achievements of this research team.

In order to achieve the purpose of the trip, the research team visited such places as the museums and the reference libraries, Ken-jin Kai (associations of people from the same prefecture), and a Japanese newspaper company, having meetings with over 40 Nikkei. By doing so, it was hoped that the Museum would establish closer relationship with Nikkei communities in Hawaii. Through these meetings with Nikkei leaders, it was confirmed that the activities of the Federation of Japanese Societies of Hawaii and associations of people from Hiroshima, Okinawa, and Fukuoka prefectures are very active and that Nikkei are playing active roles in various sectors of the society. You can find there have been some Nikkei US Congressmen and Nikkei Governors in Hawaii.

It was confirmed that the Overseas Migration Museum should play a role of “hub” for the immigration museums and the reference libraries in Nikkei communities in Hawaii as well as in other countries. It would expand possibilities of various exchanges and businesses of the Museum and, as a result, the Museum will lead to support all the Nikkei communities in the world.

学術研究プロジェクト一覧

■ 2006 年度～ 2008 年度

1. JICA アーカイブズ・プロジェクト（移民史料研究会・JICA 所蔵資料研究会）

プロジェクトメンバー

代表 石川友紀（琉球大学名誉教授）
兒玉正昭（鈴峯女子短期大学学長）
原口邦紘（元外務省外交史料館副館長）
木村健二（下関市立大学教授）
糸井輝子（白百合女子大学教授）
柳田利夫（慶應義塾大学教授）

2. 二つの国の絆を結んで ―「移民」の日本への貢献を探る

プロジェクトメンバー

代表 糸井輝子（白百合女子大学教授）
飯野正子（津田塾大学学長）
水野剛也（東洋大学助教授）
小澤智子（白百合女子大学非常勤講師）
長谷川寿美（東海大学非常勤講師）
増田直子（日本女子大学非常勤講師）

3. 海を渡った花嫁たち ― 日本人女性移民の研究

プロジェクトメンバー

代表 島田法子（日本女子大学教授）
安富成良（嘉悦大学教授）
柳澤幾美（名古屋外国語大学非常勤講師）
土屋智子（カリフォルニア大学（UCSD）博士課程）

4. 海外移住資料館を活用した学習支援プログラムと教材の開発

プロジェクトメンバー

代表 森茂岳雄（中央大学教授）
中山京子（京都ノートルダム女子大学専任講師）
田尻信壹（富山大学教授）
小林茂子（中央大学非常勤講師）

■ 2009 年度～ 2011 年度

1. 海外移住資料館所蔵文献資料の拡充と学術的活用の探究

プロジェクトメンバー

代表 桑井輝子（白百合女子大学教授）
飯野正子（津田塾大学学長）
島田法子（日本女子大学教授）
柳田利夫（慶應義塾大学教授）

2. ブラジル日系人日本語学習者のための移民学習教材の開発と実践

プロジェクトメンバー

代表 森茂岳雄（中央大学教授）
中牧弘允（国立民族学博物館教授）
中山京子（帝京大学准教授）
服部圭子（近畿大学専任講師）
大船ちさと（国際交流基金マニラ日本文化センター日本語教育アドバイザー）
スエナガ サンドラ テルミ（群馬県太田市立太田小学校バイリンガル教員）
福山文子（お茶の水女子大学博士課程）
斉木直美（ブラジル・ロンドリーナモデル校教員）

3. 経済不況下における在日日系ブラジル人の実態および社会統合への課題

プロジェクトメンバー

代表 山本かほり（愛知県立大学准教授）
松宮 朝（愛知県立大学准教授）
近藤敏夫（佛教大学准教授）
山口博史（名古屋大学特任講師）
大谷かがり（中部大学助手）

■ 2012 年度～ 2014 年度

1. ニッポンの伝統、ニッケイの祭りー日本文化の伝承と変容と女性の役割を基軸に

プロジェクトメンバー

代表 桑井輝子（白百合女子大学教授）
飯野正子（津田塾大学学長）
島田法子（日本女子大学教授）
柳田利夫（慶應義塾大学教授）

2. 移住資料ネットワーク化プロジェクトの充実と拡張

プロジェクトメンバー

- 代表 柳田利夫（慶應義塾大学教授）
高山正也（国立公文書館館長）
柳下宙子（外務省外交史料館閲覧室長）
赤木妙子（目白大学准教授）

■ 2015 年度～ 2017 年度

1. 第二次世界大戦直後に日本に『送還』された日系カナダ人（約 4000 人）のその後

プロジェクトメンバー

- 代表 飯野正子（津田塾大学名誉教授）
高村宏子（元東洋学園大学教授）
原口邦紘（元外務省外交史料館副館長）

2. 移住資料ネットワーク化プロジェクトの充実と拡張（第二期）

プロジェクトメンバー

- 代表 柳田利夫（慶應義塾大学教授）
高山正也（元国立公文書館館長）
糸井輝子（白百合女子大学教授）
柳下宙子（外務省外交史料館課長代理）

3. 海外移住 150 年を振り返る：移動する人の視点からみる国際関係

プロジェクトメンバー

- 代表 菅 美弥（東京学芸大学准教授）
飯野朋美（津田塾大学ライティングセンター特任助教）
飯野正子（津田塾大学名誉教授）
小澤智子（武蔵野美術大学准教授）
北脇実千代（日本大学准教授）
糸井輝子（白百合女子大学教授）
長谷川寿美（東海大学非常勤講師）

4. 在日ラテン系二世の多角的分析

プロジェクトメンバー

- 代表 赤木妙子（目白大学教授）
アナ スエヨシ（宇都宮大学准教授）
ロクサーナ シンタニ（早稲田大学助教）
拝野寿美子（神奈川大学非常勤講師）
柳田利夫（慶應義塾大学教授）

『研究紀要』 目次一覧

研究紀要

<目次>

『研究紀要の創刊に寄せて』

国立民族学博物館教授・海外移住資料館運営委員
中牧 弘允

I. 特別講演

海外移住資料館 開館1周年記念特別講演会 1
「日本人と新世界」

講演者
国立民族学博物館名誉教授・顧問、JICA横浜海外移住資料館特別監修者
梅棹 忠夫

II. 論文

マルチメディア情報展示システムの構築 17
—国際協力機構海外移住資料館統合情報展示システムを例として—
国立民族学博物館先端人類科学研究部助手、海外移住資料館運営委員 山本 匡
徳島大学総合科学部助手、海外移住資料館元研究員 福田 直毅
海外移住資料館を活用した国際理解教育の授業づくり 35
—教師研修を通してみた移民学習の可能性—
中央大学教授 森茂 岳雄
京都ノートルダム女子大学専任講師 中山 京子

III. 研究ノート

北米タイコの新時代 61
—第二世代の登場と新しいコミュニティの広がり—
JICA 横浜海外移住資料館研究員 小嶋 茂
海外移住資料館の写真 67
—「六世が誕生したハワイのビッグ・ファミリー」にあるマルチ・エスニック化する家族模様—
大分県立芸術文化短期大学国際文化学専攻講師、海外移住資料館元研究員 城田 愛

Bulletin of the Japanese Overseas Migration Museum No.1, 2004-2006

Preface to the Research Report

Hirochika NAKAMAKI, Steering Committee Member, Japanese Overseas Migration Museum; Professor, National Museum of Ethnology

I. Special Lecture

Commemorating the First Anniversary of the Japanese Overseas Migration Museum

"Japanese and the New World"

Tadao UMESAO, Professor Emeritus, Special Advisor, National Museum of Ethnology; Special Advisor, Japanese Overseas Migration Museum

II. Articles

Developing Multimedia Information Exhibition System: Focus on the Computer Integrated Information Exhibition System Implemented at the JOMM

Tadashi YAMAMOTO, National Museum of Ethnology
Naoki FUKUDA, The University of Tokushima

Development of Learning Programs and Materials for International Education in the Japanese Overseas Migration Museum: Using the Teacher Training Workshops for Migration Studies
Takeo MORIMO, Chuo University
Kyoko NAKAYAMA, Kyoto Notre Dame University

III. Notes on Research

The New Era of North American *Taiko*: Arrival of the Second Generation and Spread of a New Community
Shigeru KOJIMA, Japanese Overseas Migration Museum

Hawaii's Sixth Generation of Japanese Migrants and Multi-Ethnic Family on the Photo at Japanese Overseas Migration Museum
Chika SHIROTA, Oita Prefectural College of Arts and Culture

研究紀要

(目 次)

『研究紀要』第2号の発刊によせて

津田塾大学学長・海外移住資料館学術委員会委員長 飯野 正子

海外移住資料の保存・整理の基礎 1
—記録管理原則の適用可能性—

独立行政法人国立公文書館 理事 高山 正也

「慰問品うれしく受けて」 11
—戦時交換船救恤品からララ物質へつなぐ感謝の連鎖—

白百合女子大学文学部 教授 桑井 輝子

MISとして占領下の日本に駐在した
二世の体験談を聞く 25

東海大学 非常勤講師 長谷川寿美
武蔵野美術大学 専任講師 小澤 智子

「救済された敵国の女性達」 37
—沈黙が語る結婚の記憶—

カリフォルニア大学サンディエゴ校 エスニックスタディーズ学博士課程在籍 土屋 智子

山本喜譽司の「ブラジル人観」 53
—「農場で見た一九三二年護憲運動記」を通じて—

慶應義塾大学文学部 教授 柳田 利夫

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface

Masako Iino

(Academic Committee and Steering Committee, JOMM, JICA Yokohama; Tsuda College)

Introduction to Collection Management in the Japanese Overseas Migration Museum: Applicability of the Principles of Records Management to the Documents on Overseas Migration in Japan.

Masaya Takayama (National Archives of Japan)

Bonds of Gratitude: from Japanese Wartime Relief Goods to LARA
Teruko Kumei (Shirayuri College)

Asking the Nisei about Their Experiences as Military Intelligence Servicemen in Occupied Japan

Hisami Hasegawa (Tokai University)

Tomoko Ozawa (Musashino Art University)

"Liberated Enemy Women": Memories about their Marriages Told in Silence

Tomoko Tsuchiya

(University of California, San Diego, Ph.D. Program in the Ethnic Studies Department)

Kiyoshi Yamamoto y su interpretación sobre los brasileños
Una lectura de "Memoria del movimiento constitucionalista visto desde la hacienda"

Toshio Yanagida (Universidad Keio)

研究紀要

〈目次〉

「研究紀要」第3号の発刊によせて

飯野 正子

論文

日本における出移民研究史概観 — 1990年代以降 — 1

石川 友紀

在アメリカ日本語新聞と「ララ」

—シアトルの「北米報知」による日本救済報道 1946～1947— 15

水野 剛也

Nisei Interpreters/Translators of the U.S. Military 37

Tomoko OZAWA

研究ノート

日系アメリカ人と日本との絆

— MISとして占領下の日本に駐留した二世— 51

増田 直子

資料紹介

「写真花嫁」たちのオーラル・ヒストリー

—カリフォルニア州立大学サクラメント校一世オーラル・ヒストリー・プロジェクトより— 61

柳澤 幾美

史料翻刻

「農場日誌」を通じて見たサンパウロ州護憲革命運動

—カンピーナス東山農場所蔵「農場日誌」の紹介— 75

柳田 利夫

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface

Masako IINO

Articles

A Historical General Survey of the Immigration Studies
in Japan after the 1990s 1

Tomonori ISHIKAWA

The Japanese-Language Press in the United States and LARA :

The Seattle *Hokubei Hochi*'s Coverage of Relief in Post-War Japan,
1946-1947 15

Takeya MIZUNO

Nisei Interpreters / Translators of the U.S. Military 37

Tomoko OZAWA

Research Notes

The Ties between Japanese Americans and Japan: MIS Nisei Who

Were Stationed in Occupied Japan 51

Naoko MASUDA

Oral History Notes

Oral Histories of "Picture Brides":

From the Issei Oral History Project, Japanese American Archival
Collection, at California State University, Sacramento 61

Ikumi T.YANAGISAWA

Research Document Reprints

"Diario da Fazenda Monte d'Este" y el movimiento constitucionalista

de 1932 75

Toshio YANAGIDA

研究紀要

〈目次〉

「研究紀要」第4号発刊によせて

飯野 正子

論文

友情と友好を結んで — 敵之館からラヂオプレスへ — 1

桑井 輝子

再定住期の日米交流 — 1949年全米水上選手権大会を中心に — 13

増田 直子

研究ノート

九州福岡・佐賀・長崎・熊本4県の移民資料調査報告 31

石川 友紀

移民研究と史料 — 鹿児島県の場合 — 39

原口 邦敏

広島県の戦後復興支援 — 南広島県人会の活動を中心に — 53

長谷川 寿美

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface

Masako Iino

Articles

Listen to the World : Nisei Founders of Radio Press 1

Teruko Kumei

Japanese American Involvement in the Relationship between the U.S. and
Japan during the Resettlement Period : The National Amateur Athletic
Union Swimming Championship in 1949 as a Symbol of the U.S.-Japan
Friendship 13

Naoko Masuda

Research Notes

Research Report on the Collection of Immigration Data about

Fukuoka, Saga, Nagasaki, Kumamoto Prefectures in Kyushu 31

Tomonori Ishikawa

Emigration Studies and Historical Documents in Kagoshima Prefecture

..... 39

Kunihiro Haraguchi

Recovery Aid for Hiroshima after World War II :

The Activities of Nanka Hiroshima Kenjin-kai 53

Hisami Hasegawa

研究紀要

〈目次〉

はじめに	吉浦 伸二
『研究紀要』第5号発刊によせて	飯野 正子

論文

宮城県国際交流協会旧蔵資料について — 移住申込書整理作業と関係資料調査の一事例 —	1 柳田 利夫
アメリカ本土の戦争花嫁と日系コミュニティ — 学術研究プロジェクト「海を渡った花嫁たち」での聞き取り調査を中心に —	17 安富 成良
「多文化共生施策」が見落としてきたもの — 経済不況下におけるブラジル人 —	33 山本がほり

研究ノート

日系ブラジル人の家族構成と定住化傾向 — 滋賀県長浜市 2005 年調査と 2010 年調査の比較 —	45 近藤 敏夫
占領期の日本に相対する日系アメリカ人 — 新たな日米関係の秋間で —	61 増田 直子

資料紹介

短歌・俳句・川柳が詠むアメリカ抑留所 — JICA 横浜海外移住資料館所蔵短詩型文学資料紹介 —	71 桑井 輝子
小田原市立図書館地域資料室所蔵・海外移住関係史料について	91 赤木 妙子
伊藤一男関連資料整理状況について（中間報告）	101 岡野 伸治

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface	Shinji Yoshiura
On Publishing the Journal of the JOMM	Masako Iino

Articles

Old Documents of the Miyagi International Association: An Example of Organizing Migration Applications and Related Document Investigations	1 Toshio Yanagida
--	----------------------

War Brides in Mainland USA and the Japanese-American Community: With a Focus on the Oral History of Japanese War Brides	17 Shigeyoshi Yasutomi
--	---------------------------

Nikkei Brazilians in Japan during the Recession since 2008: Reconsidering Local Government Policies Regarding Foreign Residents	33 Kaori Yamamoto
--	----------------------

Research Notes

Family Structure of Japanese Brazilians and Their Tendency to Settle: A Comparison of Questionnaire Surveys between 2005 and 2010 in Nagahama City, Shiga Prefecture	45 Toshio Kondo
--	--------------------

Attitudes of Japanese Americans toward Occupied Japan: Under the New US-Japan Relations	61 Naoko Masuda
--	--------------------

Review on Scholarly Materials

A Report on the Collection of Japanese Short Poetry Documents at JOMM: Tanka, Haiku, and Senryu Poetry Written in U.S. Internment Camps	71 Teruko Kumei
--	--------------------

Historical Manuscript Related to Overseas Migration in the Regional Archives at the Odawara City Library	91 Taeko Akagi
---	-------------------

An Interim Report Concerning the Filing of Kazuo Ito's Materials	101 Shinji Okano
--	---------------------

研究紀要

〈目次〉

はじめに	吉浦 伸二
『研究紀要』第6号の発刊によせて	飯野 正子

論文

ハワイ島ヒロ銀雨詩社に展開した日本人移民の文芸活動 — 移民の同化とアイデンティティ形成に関する一考察 —	1 島田 法子
経済不況下におけるブラジル人の生活状況と今後の展望 — A 社調査、長浜市調査の比較から —	21 松宮 朝

日系南米人支援活動の「射程」 — リーマンショック後の経済不況下におけるブラジル人の状況 —	35 山口 博史
---	-------------

資料紹介

下山逸書資料について	49 桑井 輝子
海外移住資料館の収蔵する戦後海外移住実務機関作成業務資料等の紹介	67 岡野 伸治 渡邊由紀子

史料翻刻

菅野武雄「最後の手記」(一) — 日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想 —	82 柳田 利夫
--	-------------

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface	Shinji Yoshiura
On Publishing the Journal of the JOMM	Masako Iino

Articles

Japanese Immigrants in Hilo, Hawaii: Their Literary Activities at Gin-u Shisha Tanka Poetry Club	1 Noriko Shimada
---	---------------------

Comparative Studies of Brazilian Workers: Their Living Conditions and Future Perspectives	21 Ashita Matsumiya
--	------------------------

The "Range" of Support for Japanese South Americans: The Situation of Brazilians under Economic Recession	35 Hiroshi Yamaguchi
--	-------------------------

Review on Scholarly Materials

A Report on the Documents of Issu Shimoyama, an Issei Haiku Poet	49 Teruko Kumei
--	--------------------

Introducing the Operational Documents and Other Materials Prepared by Working Agencies in Charge of Postwar Japanese Overseas Migration and Stored in the Japanese Overseas Migration Museum	67 Shinji Okano Yukiko Watanabe
--	---------------------------------------

Research Document Reprints

"Last Notes" by Takeo Sugano (1): The Life and Thoughts of a Second- Generation Japanese-American Who Has Become "Japanese" in Japan	82 Toshio Yanagida
---	-----------------------

研究紀要

(目次)

はじめに	吉浦 伸二
『研究紀要』第7号の発刊によせて	飯野 正子
論 文	
ホノルル潮音詩社にみる日本人移民社会と移民の生活史 — 1920年代から太平洋戦争開戦まで —	1 島田 法子
ペルー日系二世の短歌と戦前期の日本語教育 — 里馬実科高等女学校と日系婦人会文芸部「椰子の実短歌会」 —	21 柳田 利夫
日系移民学習の教材開発と実践 (I) — 移民学習教材としての「日本-ブラジル移民カルタ」の開発 —	43 森茂 岳雄・中山 京子・福山 文子
日系移民学習の教材開発と実践 (II) — 「日本-ブラジル移民カルタ」を用いた実践 —	63 服部 圭子・大船ちさと・中山 京子・スエナガ サンドラ テルミ
研究ノート	
愛媛県海外移民史研究の現状と資料状況	91 木村 健二
リーマンショックによってブラジル人はどのようなことに困難を感じているのか — 豊田市保見団地でのフィールドワークから —	105 大谷かがり

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface	Shinji Yoshiura
On Publishing the Journal of the JOMM	Masako Iino
Articles	
The Honolulu Cho-on Shisha Poetry Club: Japanese Immigrants' Life as Reflected in Tanka Poems	1 Noriko Shimada
Tanka Poetry for Nisei (Second-Generation) Japanese-Peruvians and Prewar Japanese-language Education: The Lima Women's Vocational High School and the Tanka Poetry Circle "Yashi no Mi" of the Peruvian Japanese Women's Association	21 Toshio Yanagida
Development of Teaching Material for Japanese Migration Studies and its Practical Application (I): Development of "Nihon-Burajiru Imin Karuta" as a Teaching Material for Migration Studies	43 Takeo Morino・Kyoko Nakayama・Ayako Fukuyama
Development of Teaching Material for Japanese Migration Studies and its Practical Application (II): Practical Reports on Application of "Nihon-Burajiru Imin Karuta"	63 Keiko Hattori・Chisato Ofune・Kyoko Nakayama・Sandra Terumi Suenaga
Research Notes	
History of emigration studies and historical materials in Ehime prefecture	91 Kenji Kimura
Difficulties experienced by Brazilian from 2009 to 2011: From field work in Toyota City, Homi Complex	105 Kagari Otani

研究紀要

(目次)

はじめに	北中 真人
『研究紀要』第8号の発刊によせて	飯野 正子
論 文	
ペルー日系社会における「和食」とアイデンティティ — 「日系食」、「ニッケイ料理」、「ニッケイ・フュージョン料理」 —	1 柳田 利夫
研究ノート	
ニッポンの伝統、ニッケイの祭り — 日本文化の伝承と変容：トロント仏教会のお正月行事・料理 —	29 飯野 正子
旧カフェパウリスタ箕面店が提起する問題	37 中牧 弘允
「在米同胞の歌」考	49 桑井 輝子

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface	Makoto Kitanaka
On Publishing the Journal of the JOMM	Masako Iino
Articles	
"Japanese Food" and Identity in Japanese-Peruvian Society: "Japanese-Peruvian Food," "Nikkei Cuisine," "Nikkei Fusion Cuisine"	1 Toshio Yanagida
Research Notes	
"How Japanese Traditional Ways of Celebration Have Been Passed Down and Transformed in Nikkei Community: Case of "O-Shogatsu" in the Toronto Buddhist Community"	29 Masako Iino
Some Problems Raised by the Former Minoo Shop of Café Paulista	37 Hirochika Nakamaki
A Study on a "Song of the Brethren in the U.S." 「在米同胞之歌」考	49 Teruko Kumei

研究紀要

〈目 次〉

はじめに	小幡 俊弘
『研究紀要』第9号の発行によせて	飯野 正子

論 文

ハワイ盆踊りにみられる伝統文化の継承— 岩国音頭のケースを中心に —	1
	島田 法子

研究ノート

サンパウロ市における日本料理（店）の位置・イメージ・受容のかたち	21
	森 幸一
ブラジルからの移住第2世代とバイリンガル絵本プロジェクト — 浜松市における静岡文化芸術大学の試み —	59
	池上 重弘・上田 ナンシー 直美

資料紹介

ブラジル東山農場所蔵「酒造工場沿革誌」から見るブラジル産（日本酒）事始め	71
	赤木 妙子
アメリカ合衆国戦時強制収容所内俳句集覚書	95
	桑井 輝子
菅野武雄「最後の手記」（三） — 日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想 —	116
	柳田 利夫

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface	Toshihiro Obata
On Publishing the Journal of the JOMM	Masako Iino

Articles

Cultural Continuity Seen in Hawaii's Traditional Bon Dance: The Case Study of Iwakuni Ono	1
	Noriko Shimada

Research Notes

The position, image, and form of acceptance of Japanese dishes (restaurants) in São Paulo	21
	Koichi Mori

Second-generation migrants of Brazilian origin and the bilingual illustrated book project:

Report on an approach by the Shizuoka University of Art and Culture in Hamamatsu	59
	Shigehiro Ikegami Nancy Naomi Ueda

Review on Scholarly Materials

The first Japanese sake produced in Brazil, as recorded in <i>Shuzo-kafo Enkaku-shi</i> ("history of a sake brewery") owned by <i>Fazenda Monte d'Este do Brasil</i>	71
	Taeko Akagi

A Study on Japanese Immigrant Haiku Collections in WRA Camps in the US	95
	Teruko Kumei

"Last Notes" by Takeo Sugano (3): The Life and Thoughts of a Second-Generation Japanese-American Who Has Become "Japanese" in Japan.	116
	Toshio Yanagida

“Last Notes” by Takeo Sugano (4): The Life and Thoughts of a Second-Generation Japanese-American Who Has Become “Japanese” in Japan.

Toshio Yanagida (Keio University)

In 1943, Tekeo Sugano left Seidai-ryo, started living in a lodging house in Kashiwagi and continued his student life, setting Waseda University's Mental Science Study Society as one of his bases. While the Society was forced to “come to natural end” shortly, in the part presented this time, Sugano introduced the understanding he had reached, reading the works of Shoichiro Kurokami and Koshi Mitsui deeply in his own way, which he learned in his time at Student Association of Japan, based on his own experience in actual life in both Japan and the US. Although his notes appears to have just traced the trail of Kurokami and Mitsui's thoughts at a glance, they had been created from the actual experience in social life in both Japan and the US and one can see the formation of unique thoughts of second generation Japanese descendants.

Keywords: Student Association of Japan, Waseda University's Mental Science Study Society, Do Shin(the same faith), Second generation Japanese descendants

り国民的な歌となっていた。

47 黒上、一九八〇～一九九頁。

48 黒上、二〇〇頁。

49 黒上、二〇三～六頁。

50 黒上、二〇六～二〇八頁。

51 本文中では「羅候羅」とあるが、「正誤表」で「羅喉羅」と訂正されておき、菅野もそれに依拠しているようである。

52 黒上、二六八～二六九頁。

53 以下、六首が省略されている。

54 黒上、二七〇～二七一頁。

55 黒上、二七二頁。

56 黒上、二〇九～二一一頁。

57 小林五郎『国民評論』第一五卷第二号、一九四三年二月、二～七頁。なお、小林による『国民評論』による記事、同号一、一六～一七頁、第一五卷第三号、一九四三年三月、二二、四一～四五頁など参照。また、水野正次『精神科学研究所の凶逆性——田所廣泰一派の陰謀を撃つ』国民評論社、一九四三年、が同じ二月に刊行されている。

58 『国民評論』第一五卷第二号、二頁。

59 欄外に「反軍反戦敗戦的現状維持」とある。

60 『国民評論』第一五卷第二号、六頁。

61 拙稿「菅野武雄『最後の手記』(三)」二八頁。

62 『国民評論』第一五卷第二号、四頁。

63 メディアの世界で生きてきた水野は、別の著作で、蓼田の著作を引用しつつ「滅私奉公」などの、国民と思いを共有できない総動員体制下のスローガンについて、厳しく糾弾しており、その意味では菅野の批判は正当性を著しく欠くように思われる。むしろ、西教寺合宿で同じ班で生活、議論を重ねながらも、水野のプロパガンダ論について、菅野は知る事がなかったようである。水野正次『大東亜戦

争の思想戦略—思想戦要綱—」霞ヶ関書房、一九四二年、「スローガンの功罪とその世界観」一七〇～二〇八頁等参照。

64 拙稿「菅野武雄『最後の手記』(二)」一三三頁及び注(7)参照。

65 一九三二年四月、日本社会主義研究所、社会民衆党、日本ファシズム連盟などを中心に発足した日本国家社会主義学盟の結成時の代表者の一人。同学盟顧問を勤めた。社会政策論。『JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:A04010458600』社会運動の状況(昭和7年下)(国立公文書館)一八五～八二〇頁。

66 黒上、六ページ。なお注6参照。

67 存覚「聖徳太子講式一首」、大屋徳城編『聖徳太子講式集』法隆寺、一九二一年、五一頁。黒上は「真俗二諦化道並生」の「化道」を落としている。また、引用箇所は「因茲三韓慕徳兮頻来朝四夷帰仁兮偏恭敬」と続いている。

68 「御両親の貯金通帳再可附致し使用致せし事は幾重にも御託申上候はゞ、何卒御許し被下度候 小生学資、病氣と本田姉妹の生活費の為万止むを得なく右の事情は國分様正兼叔父様に御尋ね被下度候」一九四四年一月五日付、両親宛書翰(JICA横浜海外移住資料館所蔵「菅野家史料」)

69 菅野の本宮時代の親友で、一九三六年四月五日、菅野が米国に帰国するに際しては、他の七人の友人とともに本宮駅で見送っており、それ以来の再会となる。(日記抄)

70 「八重子清子の学資、特に八重子の結婚一切は、國分様の御骨折に御座候はゞ、何卒右様本田の叔父上叔母上様、明君にも御話し被下度候」前掲、一九四四年一月五日付両親宛書翰。

いかと思う。拙稿「ペルー移民と俳句―創る俳句と想う俳句」『國文學』五〇巻九号（通巻七二七）二〇〇五年九月、一一―一八頁、参照。

12 黒上、四頁。

13 黒上、四―五頁。

14 黒上、六頁。

15 「外的政策の」は菅野の単純な誤記と想われる。

16 黒上、六―八頁。

17 黒上、八―九頁。

18 原文「同信師友の協力」。

19 黒上、一一頁。なお、三井甲之は、黒上の著書の「附記」の冒頭に、「研究は研究対象を決定し、研究方法を確立するを要するのであるが、特に精神科学的研究に於いては研究者の人生観の客観的依拠となるべき人生の体験と芸術的表現とによってその研究作業を支持し、これに生命を与えねばならぬのである」としてヴァントに言及し、黒上がその研究方法を聖徳太子研究に応用したと述べている。黒上、附記一―三頁。また、「精神科学的研究は研究者の知識よりもその体験に依拠するところ多く、その知識的分析の作業も研究者の体験に基くものなるが故に、おのづから知識的研究に踟躕せずして、円融無礙の、常倫を超出したる活動を示すべきであった、ここに概念的認識の知的作業が芸術的創作に接触しようとして、それと同時に研究者の体験を暗示しようとするのである。故にその研究は宗教的義礼の厳肅と熱情とをもって従事せらるべきである。人生研究は発心求道の活動となつて、自然科学的研究者の人生に対する態度は異つたところの態度を要求するのである（大正十四年）」とも自著に記している。三井、まえがき、二頁。

20 黒上、一五―一六頁。

21 三井の原文は「身分地位所有等」であり、菅野の付加した「能力」は、

前段の「身分地位職業所有能力等」という三井の言葉に引きずられた錯誤によるものと思われる。

22 三井、本文二八―三二頁。

23 黒上、二〇頁。

24 黒上では「民族制度」。五二頁。

25 黒上では「要諦」。五二頁。

26 黒上、五一―五二頁。

27 黒上、五三頁。

28 黒上、五七頁。

29 黒上、六五頁。

30 黒上、六六―六七頁。

31 黒上、六七―六八頁。

32 黒上、六八頁。

33 黒上、六八―六九頁。

34 三井、一九九頁。

35 三井、八一―八二頁。

36 黒上、一六六頁。

37 黒上、一六七頁。

38 黒上、一六八頁。

39 黒上、一六九頁。

40 黒上、一七〇頁。

41 黒上、一七〇―一七一頁。

42 三井、八二頁。

43 黒上、一八四―一八五頁。

44 黒上、一八六頁。

45 黒上、一八七―一八九頁。

46 「万葉集」巻六所載の「海大養宿禰岡麻呂の詔に応ふる歌一首」は、当時『小学国語読本』巻十の最終章冒頭に掲載されており、文字通

八月二十八日依り九月八日に亘る第二学年最後の試験を終了。茲に第二学年の修了課程を経て、十月一日第三学年〔p.36〕に進級したのであった。

だが時勢は刻々と進展し来つゝあり、我々学徒のみ果して安^マ暇として銃後に生活し居る事を得るや。我々学徒の起つべき時近きにあるを予期しつゝ、ありし九月二十三日、学生徴兵猶予の特典全面的に撤廃、茲に法文科系学徒総出陣となる。最後学園生活、第三学年在学中決然ペンを捨て起つべき秋は来たり。今こそ何の躊躇^{モウ}が入らう。たゞ戦ふのみ。思想戦士、文化の戦士としての学術闘争を放抛擲して前線へ、前線へ、銃をとつて起つべき秋が来たのである。

註

1 黒上正一郎『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』昭信会、一九三五年。

2 三井甲之『明治天皇御集研究』東京堂書店、一九二八年。

3 JICA 横浜海外移住資料館架蔵・菅野家史料。

4 拙稿「菅野武雄『最後の手記』(一)」JICA 横浜海外移住資料館研究紀要9、二〇一五年三月、一四五～一四六頁。

5 拙稿「菅野武雄『最後の手記』(二)」『史学』第八二巻第三号、二〇一三年九月、一三〇頁。

6 「菅野武雄『最後の手記』(三)」一二二頁。「(二二月)下旬三一日冬期休暇を故山にて過す。大東亜戦勃発以來滿一週^マ年は戦勝の内に過ぎたり。我がたちねの親は何処にて捕はれ居ますか。夢にても会ひたきものを。昭和十八年(二六〇三年)二五才。一月一日本宮にて新年を迎ふ(二十三、十一ヶ月)。一月九日 上京す。(淀橋区柏木五ノ一、二三〇田中方) 一月十日 新年度学期開始。」(二日

記抄)

7 この章以降、菅野は赤鉛筆と定規を使って、几帳面に多くの傍線を引いている。

8 菅野が一七条憲法を引用するにあたり依拠したテキストについては不詳。

9 菅野は一七条の内、「我等の最も遵守すべき道」として自ら赤鉛筆で傍線を付した条項を簡潔にまとめているが、第二条「篤敬三寶。三寶者仏法僧也」と第一七条「夫事不可独断。必與衆宜論」については言及していない。学生協会や正大寮生活の中で彼が感じていたある種の閉塞感を考え併せるとき、このことは極めて示唆的であるように思われる。

10 黒上、四頁。

11 黒上、二～三頁。菅野は、最初の数行について、全体の文意を損なわない範囲で、「東西両文化融合の為尽くして来つた事は熟知の事であり」「然らば其の偉人天才とは如何なる人物を持^マつて言ふのであるか」など、意図的に自分自身の言葉を挿入している。また、最後の一文では、黒上のテキストの一部を削除した結果、文法的に齟齬を来し、文意が不鮮明になっている。「太子一代の内政改革、又我が国際的地位の確立の如きは、共にこれ等の御著作に現はれたる大陸文化批判綜合の内的事業にその基調を置かれたのである」。傍線部が菅野が削除した部分である。以後の引用では、ほぼ忠実に黒上の文面をそのまま写すようになっている。しかしながら、菅野の意図はあくまでも、黒上の著作から「言葉を引用して、自己の思ひを述べたい」というところにあることに留意して読み取つてゆく必要があるだろう。こういった他者の作品の消費のあり方を、単なる他者の作品の引き写し、と理解するのではなく、個々の人間の生活の営みの中に据えて丁寧に見て行くことが、創作活動に自ら関わる事の少ない近代大衆の文化とその思想を分析する上では有効ではな

茲にたゞ原理をのみ記述し政策論に就いては省略する。

第八項 最後の学生園生活

今迄述べ来たった如き、家庭生活、国家生活、社会生活的思想生活を通じての余の学生生活は決して単純なものにはあらずして、真に内的苦悶が継続して居った事は、全く余の尊き体験と信ずるのである。

再度経済的に閑経済的に余裕を得た余にとって、学園生活に對し【p.358】専心する事が出来た事は幸であつたのである⁶⁸。銃剣剣に野外教練に、猛訓練を重ねた事は決して余にとつては一時的なる感激にはあらずして、止むに止まれぬ欲求依り発したる余自身の学生生活体験を通して感得し得られる事と思ふ。

軽井沢野外教練にて読める歌（田中氏に） 十八、七、十一

我も又男子と生まし果ぞある御国を守りて死すと思へば

今の今南に北に友ど^{カヒ}の華と散り行く人ぞ偲ばゆ

朝まだき起き出勅諭をろがめばかしこさに涙こぼるゝつたなき身にも
若人は今ぞ征で行く国の為捨て、碎けて身尽きるとも

七月十日依り十五日に至る野外教練を終へ、八月下旬行はれる学年末試験に没頭することゝなつた。

八月八日、中学卒業以来七年振りに第十戦ビルマの戦線依り体休暇にて帰省せる親友陸軍中尉遠藤立身君^{トモ}と廻回顧^{マタ}、十一月初旬に至る三月間に亘る交りは余にとつて実に嬉しい事であつた。

【p.359】

九月従妹八重子の結婚の事決定、彼女にとつて最善の途たる事と信じ参成す^{マタ}。余に對する結婚の話、屢々ありたるも、今出陣にあたり、男子生還を期せず。妻子に不ピンを見せる事を欲せずとの理由にて中止す。

従妹高橋正子、運命の悲劇、苦悶の後去る。余の『まこと』足ら^{マタ}はざるか。惜しまむらくは幸あれと祈るなり。

八月九月本宮に帰省。国分氏夫妻に宅に偶す^{マタ}。近隣の人の厚情深謝に堪へず。多他日此等の人に御恩を報いん。
満州に於ける叔父叔母星多重郎御夫妻には、屢々激励の御手紙賜り辱く思ひます。御厚意の程生涯忘却致さぬ所存、他日御礼を返さむ。本年旅行せず。



図5 「軽井沢野外教練（昭和十八年七月）」

今年去る九月二十六日、学生の在学徴集^レ余猶予停止と共に早大猶太研究会も又後継者に托すること、なった。

茲に於いて反り見るに自己の意志、研究、何一つ就成する事果あたはず堪えざる苦闘、苦悶の中に、総べては中絶^レし、思ひ残す事も無く、思ひの俣戦ふ事を得た事を嬉しく実感せしめられるのである。「まこと」とあるところに永久に我が進路は不変たる事を信ずると共に、益々自己の苦しみが加はらん事を切望して居るのである。何も出来得なかつたが、然し空虚な孤独感、淋しさは微塵もなく、強く雄々しく、我が行く道を【p.356】戦つて行けるのである。自分余は斯く信じ斯く強く念じて居るのである。

第七項 最後の学生生活社会問題

早大教授林癸未夫氏⁶⁵は社会問題は資本主義と無産階級の対立依り発生するところの現象であると言ふが、勿論階級闘争対立^レによりに原因する諸問題あることは否定出来ない。

不可測に開展し行く実人生、人間社会に於いては、予測し得ぬ諸問題が発生し得る事は自然とも云ふべく、茲に於いて現今各国に於いても社会問題解決にはあらゆる手段、方法を考察実現し居る事は事実なのである。

其の社会問題解決の諸方法として、社会革命主義、社会改良主義として、前者は社会民主主義、共産主義、国家社会主義、後者に於いては、労働組合、農民組合、産業組合、社会事業、社会政策、全般に亘る諸方法が具現され【p.355】つゝ、あり、又戦時下に於ける労働問題として、賃銀、労働時間、又国民生活全般に亘る種々の方途が日夜深重に議会に、法令に、呈出され、施行し居る事を見る時、決して単なる階級対立の原因依り現はれたる結果としては見る事は出来難いのである。

だが茲に、其の治療方法としての具体的な社会政策に論及する事は避けるが、余の言はんとするところは「社会問題解決の要諦」として、

社会革命主義社会の如き、機構制度主義的形式主義のみではなく、又社会改良主義的精神主義、独善、非人道的、センチメンタリズム的な特徴を長を廢し、我々が今迄拙たない小論説に見た如き、真諦俗諦の相依の体现者として、生々發展の国家永久社会に存続すべき国民的宗教的信仰社会、即ちこゝに真諦俗諦の相依といふ、その真諦とは宗教的真理を、また俗諦とは政治、経済生活を指すのである⁶⁶が、親鸞上人は、真諦俗諦の相依を具現したまひし現理想の宗教的体现者として聖徳太子を仰いでいるのである⁶⁷がある。その門流をして永へに「蓋しこれ王法を以て仏法を弘め、真諦を以て【p.356】俗諦を守る。真俗二諦並び生ず」⁶⁸といふ言葉を以て讃仰せしめて居るのである。然して、国民的信仰宗教思想の中政治活動の体験は統一せられ、現実生活との一致融化を実現せられる事を信じて疑はないのである。

同こゝに如何にして国民的信仰生活が実現せられるかは、この論紙の中心の内容として述べ来たところであり、会へて贅言を要しないと思ふ。それは決して資本主義と無産階級との階級対立的な意識ではなく、身分地位所有等を機制的に平等化しようとするのではなく、歴史的伝統と現実的能力とに順応すべき生活形式の差別を認めつゝ、それを公正化するところの原理を国民全体主義の同胞感としての内的平等感激、すなはち個体生活の全体生活への没入感に求めようとするのである。

かゝる国民的信仰思想生活に依つて生命を与へられ得るものは、政策そのもの、対称たるべき、人心であり、内的生命威力依り発する国民的生々發展過程には、非人道的空虚な、無生命的センチメンタリズム【p.357】的な弱者に対する救済は自ら社会改良として優秀民族としての自覚、独立意識の国民精神が覚醒される事を信んずるのである。単なる同情意識は救済は決して社会事業にはあらず。寧ろ弱体化する恐れ多きを思へば、社会事業、社会政策家を以て真に国民的生活にのぞむもの、真諦俗諦の意義大いに信知すべきを望むのである。



図4 「自然消滅」した早稲田大学精神科学研究会主催、
「山川・日岡・金森三兄杜行会（昭和十八年七月 本郷菊そばにて）」

けた事を思へば、全く嚴重なことのこの上もなかったのである。
今茲に早大精神科学研究会の解散に會ひ、集英館に集ふ十名の同志並に會員を如何に指導すべきか、茲に於いて余の着眼せるは猶太研究会⁶⁴であらう。

創立せし唯学園に於ける唯一の猶太研究会こそ我々の集ふ場合となつたのである。然して我が國に於ける唯一にして最高の猶太研究会学会、政経学会との連絡もなり、猶太問題の重要性と相關連し、大東亞戦争の思想戦としての一性格たる、猶太の世界的陰謀に対する研讀と共に、憶々我々の信を強個にすべく研究を重ねることとなしたたのである。

高木、大庭、宮下の諸兄と共に其の基礎を作るべく、ヒットラー著『マイン・カンフ研究』に其の主眼点を於いたのも決して、猶太研究家に兎角あり勝なる其の歴史、民族性、宗教【p.357】等の一方的研究、並に彼等の世界的陰謀に対する恐怖又は撲滅を意圖すべく、概念的形式依りも、吾々学生運動を通じての『神州不滅』『國体の信』への信

念の強個たるべき思想的批判力の力を養ふ事に努めたのである。

猶太研究家独自の反猶、親猶的見解から離れて、大東西洋文化の摂取、綜合、統一に、大御心を悩ませられた太子の御体驗信念告白、それは皇室中心の世界皇化の大御稜威の具現せられむことを意圖せられたまひし事を拝察し奉ると共に、猶太的思想、種々の外交政治、經濟に於ける陰謀に対する包摂的綜合威力の我が國にある事を信知すると共に、單に猶太研究家自身の落ち入り易き、無批判的反猶、單なる反駁依り進んで東西兩洋文化の摂取、統一、綜合的威力の我が國体存する事を信知せしめむとしての臣民一人々々としての國体の信の確証に力を注【p.362】いだ事は全く例外的、我々独自の研究方法とも言へる。

猶太の陰謀を余りに好く知る余にとつては、單に其の專伝に迷はされることなく、依り以上の國民一人々々の國体に対する信の確信に依つて發する内的生命力に依つて、統一され行く國民生活に眞の戦争の重大意義ある事を痛感せしめられたからである。

産業組合會館に於ける、七月の三日間の講習會も、只單に初步に於ける猶太の知識を國民に其の研究の重要性を説くにとゞまり、何等其処に原理的猶太問題に対する講師自身の信を感得出来なかつた事は、遺憾とするところであつた。だが日本思想原理と猶太思想原理を根本的に相異ある思想戦の解決こそ最も困難なる解決方途にして、今次の大東亞戦争の現れもその一原因として見なければならぬ、武力戦に依つて、其の優劣的地位、強弱を決するが先決問題であり、斷個としてその膺懲に銃をとつて【p.363】立たねばならぬのである。だが、茲に又思想戦、文化戦に於いて考へなばならぬ重要問題ある事を痛感し、その綜合□原理を研究すべく着手しつゝ、も時間足らず、今出陣せんとするにあたり、十切を放棄□他を反り見ず、己が本分を尽くさんとし、時間の許限りに於いて今後、他日機期機會あらば再度研究したいと思ふのである。

不可側^{マヤ}に開展し行く人生の動乱の悲喜劇は、「滅私奉公」の概念的標語によつては解する事が出来ない事を知らざる⁶³彼等、聖徳太子のたませられる「背私向公」のその理念は上下和諧の道である。人間の本能たる衣食住の満足を如何にして公共生活に向はしめるか、政治である。思想である。

かゝる意義に於ける信知を解する事を得ず、形式的語釈たる自由主義、資本主義云々は全く盲断も甚だしい。

依然たる時代の混乱者たるに過ぎないのである。

たゞ我等の信の確証され行くのみである。

【p347】 第六項——猶太問題

憲兵問題も歴史的価値判断は未解決の俟であると思ふ。我々に対する徹底的批判を求めつゝ、も何等確証を得られなかった。去る九月、平生八前文武部大臣たりし平生氏鑠^{マヤ}王宅に居つた、現在海軍予備学生たる田久保貞之兄の言に依れば「我憲兵当は吾等の団体を以つて姦妙巧妙な組織思想方法を有する共產主義団体と見做して居ると説き、その方法手段を講じたと」云ふ。何を以てか、かゝる正反対たる思想運動として取扱はれたるか、今の余に信知する方法もない。弁明する事も許されない。

先輩の言葉を聞く事を得ない。だが余は余自信^{マヤ}の信念を信じて居る。我等の何処に欠陥あり、疑問あり、『神州不滅』の確信の下、我等の恐るべきもの、何かある。何を以てか反団体思想と云ふ。何を以てか現状維持と云ふ。何を以てか反余自信^{マヤ}の弁明を聞かぜして訊問せんか。歴史は確証せん。楠公の孤忠、光圀公に依り三百年の後世の世に始めて其の真価値を知る。

【p348】

維新の志士、斃れて後認めらる。我等又此の聖戦下無言の征徒に上らん。我等の意志、我等の思ひ、果して否定さるや。我等は現在の価

値に求めず、永遠の国家生命、国家生活にその意義を確証されむ事を待つのみ。

吾又、聖愈黙して戦に征かむ!!

第六項——猶太問題研究

吾等の運動の先鋒たりし東大江頭俊一兄満州に帰省の途次病魔に倒れ、北九州に同志に守られ去る六月二十日時代の確証待たず花と散る。その辞世 十八、六、二十

『現そみの命絶ゆとも益良夫の悲しき願永久に生きなむ』（不確定）この一学生の最後の歌の何処に反団体意志ありや。

今は多言を要せぬ。君の仇はきつとうってやる、との同志一々々々の思ひこそ、君の死に報ゆる最善の道たることを信んずるのである。

亡き江頭俊一兄の逝去を偲びまつりて 十八、六、二十
亡き友の御心つぎて吾も又守りゆかなむ祖国の命を

【p350】

今は亡き君の面影偲びては在りし日の君ひたに偲ばゆ
現そみの命たゆとも国守る心は永久に祖国に生きなむ
斯く歌ひ、斯く信ずるのである。

第六項 猶太問題研究

人間逆境にある程、生への意識が強烈なる事はない。逆境圧迫に加ふに断崖、そして又しても早大学院に於ける精神科学研究会の解散も余議なくされたのである。

去る五月、早大^{早大}戸塚警察署特高課依りの呼出しに付、出頭、種々早大精神科学研究会に対する實質問の結果、自然消滅との理由を以つて、解散を応ぜざるを得なく、解散を約して帰つたのである。

全国的に我等に対する断崖は加はり、先輩の家托搜索^{マヤ}は勿論、各個一人々々の家托搜索^{マヤ}が行はれたのである。

故郷に於いて静養中の人と言ども、当局依りの来訪を【p350】受

思ふのである。

自己第十の学生運動特に学生協会に所属して後、全面的に運動方向、思想的価値判断に対し、肯定し得ざる点もなきにしもあらざるも、全く完全なる運動とは現実に【p343】見出す事は困難にして、如何なる運動にも欠陥を見出す事は止むを得ぬ事と相知るのである。

だが思想上に於ける、誤謬は飽く迄指摘するのが臣君に使へる同じ臣民としては当然の理であり、茲に思想戦闘綱要を通じて、然して又『国民評論』なる小林氏の盲断につき付言したいと思ふのである。

第十章運動の性格

第九十六項「我正しきが故に、敵は敗北しくれるであらうと考へるのは何某公爵と等しい。敵を支持する階層を離反せしむるは兵站線の中斷と同じである。今日はことに軍部の信用を失はしむることが捷徑である」

第百五項に『(前略)軍人と官僚との間に久しく醸成された形式主義は、幸いにも今日マルキシズムの影響下にその極弊を露出しようとしてゐる。当面の敵はこの両者と、その師たる帝大教授、評論家、学者である。詳細をこゝに記す余裕はない。』

この二項は共に小林国民評論に於いて小林五郎氏の指摘したる個所にて、こゝに誰れもが不審を感じ、異様の感に打たれる事は否定しない。余自身も又この言葉の真義を解する事が出来ぬ点である。

【p344】

だが田所大兄、自身の日常生活、特に学習院にて修得せられ、蒙疆にて戦死遊ばされたまうた、北白川宮永久王殿下の御学友として奉仕過された家塾に於いて、軍隊生活、官僚主義の何ものなるかを熟知せられた、事共より言はれた言葉であると思はれるが、真義は分らぬ。故に率直に其の非を認めてよからう。

だがそれを以て反軍、反戦、敗戦の現状維持者と見做す、右翼と自称する、自己独善的、暴傲慢意志に対しては、又政治を解せぬ、思

想を解せぬ、自称自ら『世界思想研究所長』と称する、自惚れの程には全く、嫌悪を感じざるを得ないのである。

最も人非寄生虫的、無確信の傀儡として精神科学研究所所員として半年余り我等と行を共にした前名古屋新聞に勤務せし永野正次氏の売名的存在に対し、全絶対的信頼の念を置き、去る八月以来西教寺合宿に於ける吾が五班の所員⁶¹として、概念的言葉を以て、如何に我々同志依り不信され居つたに拘らず、得々として、自弁し居るかは全く笑止の外はなく、當時に於いて【p345】典型的なジャナリストたる同氏の裏切的行為には我等にとつて、何等の全く問題されざりしを知るならば、実に、小林氏なる者の人物格的、思想的内容もこの小論文を通じても推察する事が出来るのである。

戦思想戦は末梢的言語の繰りにあらず。人聞生の生の悲痛なる信念体験告白の合宿を理解し得なかつた、永野氏にとっては全く思想戦を云々する価値なきと相知るのである。

又特に、『日本歴史的使命と共に進展してやまぬ「革新」を阻止し、敗戦的平和の招来をも意識しつ、専ら現状維持』⁶²と云ふ小林氏の言葉に至つては何を以てか、る言語を操るか不可解な存在である。歴史的國家生命、あるがまゝ、の生活に随順し行く事の意義を解せざる、幼稚なる思想的見解こそ、敢て問題にする必要はないのであるが、当局の問題となりし故、敢て一言し置くのである。

彼の云ふ「革新」とは果して如何、飽く迄概念的、思想、弁証的解釈を以て、我々の運動を解せんか。

政策、革新、資本主義云々と云ふ、飽く迄も自称右翼特【p346】有の盲断を以て得々とし居る事の愚かさよ。

政治今次余にも多き固定的概念形式を以て価値判断し行く之等の一派の人達の有する、私利私欲といふ自由主義の解釈、自由主義、個人主義とは如何なる意味を以て云ふのであるか。

余はこの小論文を通じて全く解する事を得ぬのである。

界観大学講座、雑誌「新指導者」及びその背後に潜める反軍反戦の秘密結社がこれである。」⁵⁸との書き出しを以って、其の□□目的として内容⁵⁹（1）反軍思想（2）自由主義、個人主義、私利私慾肯定思想、（3）日本の歴史的使命と共に進展してやまぬ「革新」を阻止し、敗戦的平和の招来をも意識しつゝ、専ら現状維持（4）軍官民離間の言動との理由を以って、恐るべき凶逆、国賊的思想と見做し猛烈なる反駁をなして居るのである。茲に余の所信を述べ、田所廣泰大兄を先輩と仰ぐと共に、行動を共にして居る事に於いて大いに国民評論の盲断に対し憤激を禁じ得ない事を一言して居く。

彼等は我々を以って、反国体、反軍思想と見做し、当局に対し吾々わに対する断乎たる措置と、解散を以て命ぜんと事を強要し、此の推理の盲目的判断依り、我等不幸にして、去る二月以来、半年に互る同志師友の憲兵隊に検挙、訊問に会ふ。

【p.340】

全く盲断と云ふべき外はないのである。

然し、今に於いて其の経過は公表されざる為、余にとつて其の内部的、思想的価値判断の如何は許されざるも、余の所信に於いては、今征で行くに際し、一言遣し置きたいと思ふのである。

特に問題とならなりし『思想戦闘綱要』に関しては、明らかに反軍を目的とせる秘密政治結社であると独断し居る事は笑止の外はない。

余も又六月上旬、三日間に互る訊問に会ひ、中西軍曹九段下憲兵隊本部に出頭、中西軍曹に、本部の階下の薄暗き、嚴重なる格子窓の一室にて種々、学生運動、思想運動に関し、入会の由来より、運動目的、合宿、組織、内容、十思『た、かひ』そして最も重要危険視されたる『思想戦闘綱要』について審問せられたのであるが、其の真相について余自信の思ひを述べく事に依つて歴史的価値は後世明確に価値判断致し呉れる事を確信し、一言付言して居きたいのである。

【p.341】

只惜しむらくは、我々同志に対する一方的訊問たりし為、我々の思想所信に対する個々の盲断多き事に対し、憂憤を禁じ得ざりしも、如吾等依りの応答を許さざりし為、如何んとも仕難く、思ひを披瀝する事を得ず、調書原稿用紙数十枚に及ぶ調書に対し、署名と納印し來った事は、全く我々の心外とするところなのである。

去る九月二十六日『学生徴兵猶予停止』の法令と共に、学徒総出陣を予期される現在、余にとつて最後の弁明も許さるゝ事と信んずるのである。

『た、かひ』『思想戦闘綱要』に関しては、余の病靜養中にて故郷入院中との理由に依り、不明、不知、焼却と返答する以外、全く一方的訊問の為、答へざるを得なく、只、余にとつては少しも自己の信念を曲げる事を欲せざるものであった。

今茲に小林氏の云ふ『今日敢て軍官民の間を離間せしめ、以て敗戦も亦やむを得ずとの氣風を国民の間に馴致せしめ、一方、数万の学生獲得を目ざし、その獲得せる学生等を彼等の所謂「新指導者」と見、彼等が数年後、日本の各部門に漸く破損^{（破損）}枢要なる地歩^{（破損）}及び【p.342】田所一派が自ら政權を獲得すべきであ（破損）ものの如く破損^{（破損）}される』⁶⁰と述べて居るのであるが、この事に関し、『当面の敵は、軍部と官僚である』といふ綱目を引用して居るのである。

只、一言其れの前に付言して置きたい事は、この『思想戦闘綱要』は余の武蔵野寮園に入院中、受託請け取ったものであり、当時行はれた全国同志代表会議が正大寮で行はれた際、その席上、読合せが行はれた由なるも、余は参加し居らざる為、其の内容の解釈については省細に知る事を知ず単に、文字の解自己の信念を体験を通しての字句の解釈に止まる事は止むを得ぬ事である。

茲に更めて菊半裁判五五頁より成る、全項第百八条について疑問とする点、又田所大兄の音所信を解せざる点を明白に期して見たいと

つて結ばれ来たった日本人としてこの栄えゆく時に会ふ事を得て、大君に召されて征く日待つも、心に残る我を育くみし父母、今は遠き敵国に捕はれ、兄弟【p.336】も又十人として悲運の下に、呻吟する事を思へば、言ひ得ぬ苦るしみにもだえつゝ、幾年か過し、茲に残れる唯一の道、一身一家諸共に大東亜戦争の捨石たるべき捨身の覚悟で戦ひ抜くべき事が定まったのである。奮野我が家の乳眚血尽きるとも、我が家の柱倒るとも、尽忠報国の至誠に斃れ行く事の本望を実感するのである。

米國運命の下に敵国米國に生を享けた、『二世』としての価値批判は歴史はは確証し、人は信ずるであらう。年末だ若く、異郷に生を受け、批判的見地に見られるこの我々の価値判断は歴史に問はん。余茲に弁明する言葉を持たず。父の郷土に愛國の至誠を貫く大和魂の確証、又誰にか言はむ。

総べては聖戰完遂に！

最後にもう少しく黒上先生の言葉を引用したいと思ふのである。

『此の日本民族の精神が世界文化の潮流に接し、いかに開展するかは正しく民族永遠の運命に関する問題であつた。これを解決せられたものは実に 聖徳太子の信仰思想と大業に外ならぬのである。当代大陸の【p.337】思想學術を究明せさせ給ふといへども、常に空虚の抽象理論と個人的理想の形式を排し、み國を治らしまし、大御心は生ある者の思ひををさめ給ひ、邪正の外的差別の打破を説きたる大陸仏教の空觀の哲理を、共にこれ凡夫と同じき生の融合の信に生命化し給ひ、無我の教義を内的化して団体精神の体験を示し、又大乗教徒の理想なる大乘菩薩の向下的教化を群生と其の苦樂を共にする内的平等の同胞精神に純化し給ひし如きその数々の御表現に、国民生活の痛苦を大御心に荷ひて外来文化を批判綜合し、東方日本に世界文化を統一すべき根柢を確立したまひし雄大悲痛の御精神を示したまふのは、常に地上の現實を愛し、波瀾と転化の生を戦ひ来りし神々祖先の生命の威力を

開発したまひし大御心を顕はすのである。維摩經（方便品）に居士が大徳を讀し「心大如海」をあるを大陸諸師が何れも其の心境の廣大といふがとなせるに對し「万機に達して遍照せざることなしと明かす」とある如きも、人生の大海に心をそゝぎて群生の情意に徹入し、大悲の勞苦をさゝぐる生を暗示せさせ給ふ如きの御表現は又以上に仰ぎ来りし大御心と照して、こゝに現實の悲喜を共にし、切實の愛情と憶念のまことをうたひし記紀万葉の祖先の生の綜合表現者にましまし、大御心の影を偲ばしむるのである。片岡山の御うた、また御臨終にして愛妃をいたましまし、御うたの如き、一つに連るいのちは【p.338】日本の情意を示すかなしき御いのちの御表現である。太子は世界に出づべき日本民族の表現者として永遠にわれらが上にのぞみますのである。』（二〇九—二一〇）⁵⁶

今國民の一人々々がこの悲劇的人生の中に、悲壯なる決意のもとに、あらゆる積難難辛苦に堪へつゝ、生きて行く事に依つて、眞の日本民族の世界民族に對する指導的地位を確保する事を確信せしめられ、茲に八紘為宇の現實化も決して遠き将来にあらざる事を予感せしめらるゝと共に、太子の御思想、信仰生活を仰ぐ事の重大意義と、吾々一人々々のありのまゝの体験告白こそ重要なものである事を思はせられるのである。長文には長文に互つて黒上正一郎先生の御言葉を引用しこゝに、現在政治思想生活に對する、批判、検討を根本的意義を述べたのである。

第五項 猶太問題『國民評論』を駁す。

昭和十八年二月号に右翼のともくされて居る機関雑誌『國民評論』に「田所廣泰一派の思想的陰謀を撃つ」⁵⁷と題して特に赤字を以つて記載しあるを知った。

【p.339】

「大東亜戦争決戦下、一個の妖怪が皇国の内部に徘徊する。田戸廣泰なる白面の一書生の主宰する精神科学研究所、日本学生協會、日本世

此の太子の御悲劇的御信念告白、御体験的生活の中に生涯を国家永久生命に托せられた人生観こそ真に我々の範とせねばならぬところであると拝察するのである。

一身一家を反り見ず公共生活、国家生活に随順し奉れる尊き御悲痛の思の裡に、蒼生としての聖戦下に明示し居らる、事を常日頃偲び奉ると共に、苦闘濁乱の短き生涯に生の歓喜を味ふ事の尽きせぬ歎びに国民精神生活の最高の意義を実感せしめらる、のである。

一身は云はずもがな、一家諸共にこの悲劇的大東亜戦争下に、共に祖国永久生命に没入し行く事の重大意義を真知せしめられつ、【p.334】思ひも尽せぬ父母の愛情に堪え切れぬ思ひをいだきつ、兄弟、姉妹、同胞の身の上偲びつ、「まこと」の人生道に生き行く事の思ひを「うた」に歌ひつ、生き行く外道はないのである。

十億同胞の十人

天長の佳節に読める歌 十八、四、二九 柏木にて

(病ひの床に読める)

大御稜威光りあまねき大御代に会ひし喜び我は忘れじ

天皇の御勅拝み幾度か辱なさに涙こぼる、

今日よりは命の限り天皇に仕へ奉らむ臣の正道

男子やと生れし身なれば死際を花とかざりて散りたきものぞ

世界無敵の空軍の飛ぶ音きけば病ひの身をも忘らる、かな

友余多戦の庭に斃れ又傷き行きし事の偲はる

我一人召集令を受けずして内地に残る事の口惜しさ

大君の辺にこそ死なめと古人は伝へ来たりしあ、我は又

天皇の生れきまし、日を寿ぎて兵士等も南に北に拝み居るらむ

今も尚限りなく続く爆音に無敵の強さ覚えしめらる

天皇に仕へ奉らむ学舎に学ぶ友どちあまた集ひて

【p.335】

日の本に生れし事の喜びは南に北に土と化してむ



図3 「日本学生協会元幹部、吉田・手塚大兄の出征（昭和十八年一月 上野駅前にて）」

捕はれのたらちね達も胸内にて今日の佳き日を寿ぎ居るらむ
いたつくも親は居はせず妻はなく一人悲しむ床辺に起きて
様々の想出湧きて一人寝のまくらぬらしぬ弱き心か

たらちねは死きて居るやら死せる身か風の便りに聞きまかまほしきに
幾度か飯りねの夢にたらちねの老ひし姿を見まがほしきと

我は病妹は田舎に人待ちつ淋しく暮すか人の世の常

栄えゆく御代に生れて初旅に生で行く人のひたに偲ばゆ（太田一二三
大兄に）

二十有五年の悲
喜動乱の最中に静
かに銃をとって行
く事の出来る喜び
の気持に様々の尽
せぬ思ひを秘めて
統べて国家生家に
没入する事の出来
る事は生をこの
国土に受けたも
の、最も喜ばしい
思ひである。

思へば、宿命と
は言ひ乍ら、現在
の敵国アメリカに
生を享け、二重国
籍の矛盾に悩み
つ、今茲に生地
依りも同十血と青
葉国語と民族に依

(朝倉益人)

彼等は専門の歌人ではなかった。けれどもその生活は悲喜動乱のあ
るがまゝ、の現実^ニに没し切実の衷情と歓喜を共にせし情意生活の弾力
は、すなほにて、雄々しき言葉の節奏に伝はるのである。そこには又
我が国の家族的生活の微妙の情調を漂はしむるのである。(二〇四—
二〇八) ⁵⁰

深刻現今次の昭和十二年依りひきつゞく現今に至る六年に互る聖戦
下に、幾多の皇軍の忠良優良なる将兵の出征行く蔭には、家庭的情
愛の中に愛しき妻人又は妹子を家に残して後髪引かる、切なき情愛の
中に戦場に征で行きし事か。詩的愛情に通ふ国民的家庭宗教は又次の
親子の愛情の中に又切々と胸うつものがあるのである。

《永久生命の道が家族的情意に生き、同胞全体の生を思ふ真実の精
神が又この裡に開展する国民的家庭宗教は、正に太子の信念体験によ
つて国民に教へられたのである。又山上憶良が【p331】

子等を思ふ歌一首並に序

釈迦如来、金口に正しく説き給はく、等しく衆生を思ふこと、羅睺
羅⁵¹の如しと。又説き給はく、愛は子に過ぎたるはなしと。至極の大
聖すら尚子を愛む心あり。況して世間の蒼生誰か子を愛まざらんや。
瓜食めば子ども思ほゆ栗食めばましてしぬばゆ何処より来りしもの
ぞ 眼交にもとなかゝりて 安寝し為さぬ

反歌

銀も金も玉も何せむまされる宝子にしかめやも
とうたひて釈迦如来も、又そのみ子をうつしむ心を以て、一切衆生を
思ひたまひしことを説き、うつし世の人々の子を思ふ心に自ら仏のく
もりなき慈悲の光明をも思ひしこゝろは、又太子の御精神と何処かに
通ふいのちを偲ばしむるのである。太子の御精神は常に個人家庭より
も寧ろ、国家の公に、蒼生の全体にかゝりたまふけれども、その根本
に流る、広大の大悲心は、痛感の切の家庭的情意をひそむるのであ

る。それはまた憶良によつて表現されし如き日本家族生活の情調を内
にたゝふるのである。 ⁵²

《万葉集に防人がその家庭を離れて遠く任に赴くときによめりし歌
【p332】

忘らむと野ゆき山ゆきわれ来れどわが父母はわすれせぬかも
父母がかしらかきなで幸くあれていひし言葉ぞわすれかねつる
わが母の袖もちなで、わがからに泣きしこゝろを忘らえぬかも
蘆垣の隅所にたちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ
おほきみのみことかしこみ出でくれば吾ぬとりつきていひし子なほ
も

松の木^{マツ}の並みたるみれば家人のわれを見おくと立たりし如⁵³
津の国の海のなぎさに船よせひ發出も時に母が目もがも

彼等は歌よむがための歌人ではなかった。しかしその内心のまことが
自ら表現せられて歌となると、悠久に人の心に徹する言の葉をと
めたのである。そこに目にうかぶものはあるがまゝ、の人生に戦ひ生く
る悲喜の情意である。その巧まぬすなほなる表現に、遠海はるかに親
を思ひ家を思ふ痛切の心の、既に切実恩愛のまことのうちに没せられ
てあるを見るのである。彼らの「うた」が個人的特異性を止めぬほど
に、切実の人生的感情をうたひあげたるは、その没我的感情に現実悲
喜の動乱そのまゝ、をやがて宗教的解脱に誘ふべき安慰のひかりすらも
【p333】 偲ばしむるのである。それは概念理論を以てはあらはしが
たき痛切感情である。やまとの歌の生命はこのまことの生の脈搏をつ
たふところにあるのである。この実人生に対する真実の感情、家庭
生活を貫く「まこと」は、やがて宗教教化の理想をも現実化するもとの
力である。太子もまた家庭の歓喜と悲哀と愛情とを味はせ給うたの
である。 ⁵⁴ 《太子の解脱の精神は現実人生の恩愛に背くのではなく
なかつた。それは国家と家庭とに共なる生を生くる我ならぬ内心の「ま
こと」の実現である。》(二六八—二七二) ⁵⁵

て海に入りまし、后弟橘比売命の御最後^(期)、又命が神あがりまして后たちみ子たちがもろもろ下り来たまひ、その地の那豆岐田にはらばひもとほりて器泣^(器)し給ひつ、「なづきの 田の稻幹に 稻幹に 這ひもとほるふ ところづら」とうたはせたまひ、又命のみたまが白鳥となつて飛びいますのを追ひては小竹の荻杣に御足切り破れども痛きを忘れて哭くく追ひ出でましきといふ悲壯の物語は、また 仲哀天皇が熊曾の国をうち給はんとし筑紫の訶志比宮にいまし神明の怒りにふれて崩御したまはんとせし時、「や、そ御琴^(あひ)をとりて、なま／＼に弾きましけるに、いくだもあらず、御琴のねきこえずなりぬ。かれ火をあげて見まつれば、はや崩りましにき」といふ如き表現と共に生死問題の瞑想の余裕もなき急迫緊張の生命を示すのである。古事記に現はる、我が民族の生は外なる戦と内なる睦びの錯綜する明暗の交代である。太子が「国家の事業を煩となす」と現生の悲哀に徹したまひ、而も之を同じく其群生に察して大悲息むなしと告白したまひ、同胞憶念の永久苦闘に【p328】随順して、其の切実体験に大陸の学説教義を生命化したまひし総合的御精神は、この民族生活の劇的生命を辿つてはじめて理解し得るのである。概念理念に内容をあたへ、抽象教義を生命化せるものは常に現実人生の波瀾に生くる若き民族の情意であつた。

わが祖先の内生活の表現はこの生々無息の開展力とまた内心に徹する情勢熱の緊張を湛へたのである。記紀万葉の幾多の恋愛歌にもその姿は示されてゐる。》⁴⁹《我が祖先のあるが俣の悲喜の表現は切実の情緒に永久の節奏を渡うたすのである。古事記（下巻）黒日壳の仁徳天皇にさ、げまつりたる、

倭べににしふきあげて雲はなれ離^ワき居りとも我忘れめや
大和べに往くは誰がつま隠水^{コモリツ}の下よ延へつ、往くは誰がつま
といふ別離の衷情を示す御歌、また 天皇の御弟速総別の王が 天
皇のためましし女鳥の王を愛して、 天皇の御軍に追はれたまひ、梯

立の倉椅山にのがれて、

梯立の倉椅山を嶮^{サカ}しみと岩搔きかねて我手とらすも
また、

【p329】

梯立の倉椅山はさがしけど妹と登ればさがしくもあらず

とうたはしし深痛の愛情に現世の苦難を忘る、かなしきいのちの表現はまた允恭天皇が井の傍の桜をみそなはして衣通姫を偲^{おも}はせたまひ、花ぐはし桜の愛では既^{スナ}くは愛でずわが愛づる子はらとうたはせ給ひ、又衣通姫が河内国の茅渟宮に 天皇を慕はせましては、

常へに君もあへやもいさなとり海の浜藻の寄るとき／＼を（允恭天皇記）

とうたはしまし、ごとき、自然にそ、ぐみ心と人間の愛の切実と、その渾融を示す精微の情緒は、また短き現実の生の愛情にとこしへのいのちを偲^{おも}はしむる御歌と共に、すべて痛切の情意にみづる生の力を表現するのである。我が国は此の人間内心に徹入する叙情詩的精神を全国民が体得^(感)し、古事記、万葉の如きは、特殊の天才的作者の個人的創作ではなく、其のうたは全国民に個々の作者を有し、それが一貫せる心理的脈絡に連るのはわが民族の芸術的天稟を示すものである。

万葉集（巻廿）防人のうたひし歌

津の国の海の渚に船よそひ発出^{アゲ}も時に母が目もがも（文部足人）

わが門^{カド}の五津株柳^{イツモトヤナギ}いつもいつも母が恋すな産業^{オモ}ましつ、も（矢作部真長）

国々の社の神に幣^ハまつり贖^{アガ}祈すなむ妹がかなしき（忍海部五百磨）

【p330】

天地のいづれの神を祈らばかうつくし母にまたこと、はむ（大伴部麻與佐）

わが妹子がしぬびにせよとつけし紐糸になるともわはとかじとよ

皇室の下万民一体の国家的生命を發現して「群生と其の苦樂を同じうす」と宣ひ、和合協力の教化精神を中外に弘宣し給ひし御精神は正しく「乾靈の國を授けまし、徳に答へん」とつたへられし葦原の宮のおきてに依りて、國民を治らし給うたのである。これまことに「世はいかに開けゆくともいにしへの國のおきてはたがへざらなむ」を示し給ひ、**【p324】**又「虎のすむてふのべのはて」までも人の世の正しき道を開けよと宣ひし 明治天皇の大御心に連らせ給ふのである。広く外國の文明を撰取せらるゝとも、民族共同の祖先に対する信仰が其の中を貫通し、國民協力の統一的生命を開展して、一切を此の綜合的信念に融化する國民的威力は 聖德太子の御精神に於いて世界的日本の曙光として輝き出でしめられ、畏くも 明治天皇の大御稜威に依つて現世界文化の上に發現せられたのである。(一八四—一八九)⁴⁵

此の皇室の大御稜威による、八紘為宇の大理想の具現こそ、現今に於ける大東亜戦争下に於ける、大東亜皇化、ひいては世界皇化の理想の現れであると仰ぎ感せしめうるのである。西洋文化の輸入以後に於ける東西洋文化の批判撰取の内的苦悶の中より、悲劇的生への戦が行はれつゝ、偉大なる撰取、綜合、統一を 畏くも我が日の本の 皇室に仰ぎがしめらるゝ事はみ民我ら誠に恐懼歎激に堪えぬ思ひがあるのである。

み民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば⁴⁶

【p325】
万葉の防人達の祖先の教、今こそ真に実感せしめられつゝ、生きしめらるゝのである。又、下國民に対する大御心は次の如く拝察し奉るのである。

《上、天皇に仕へさせたまひて、下國民の勞苦を荷はしまし、大御心は、常に 皇室無窮の憶念のうちに全國民の上に連らしめられ、苦惱悲痛の人生事實を洞察して生きとし生けるものの心をさめたまうたのである。国家永久のため尽しまし、大御心のうちに全國民の心は

生きしめられ、この博大綜合の御精神は、君と臣と、天と地と、如来と衆生と、親と友と、其の自然の秩序と対照の融合とを貫く、無限生命を唯一の大御身に體現せられたのである。

聖德太子はこの大御心にを以て大陸文化批判綜合の大業のうちに、國民永遠の帰趨の大道を開闡し給うたのである。新しき國民生活はこの綜合的人格に精神原理を求めてこそ、國民は永久生命の信を内に体し、國家生活は無窮の進展を成就すべしと信するのである。《(一九九)⁴⁷

《凡そ我が國に於いては民族共通の祖神に対する信仰が常に団体生活の統一的生命として貫通し、祖神の正統にまします 皇室を宗教として、同一血脈に連る同一國語民族が、世界に比類なき家族**【p326】**的國家を形成し來つたのである。故に國家統治は個人能力に基く英雄支配を原則とするのではなく、全國民生活の歴史的生命を具現せさせ給ふところの 皇統を仰いで、こゝに全体生活が等しく融合せしめらるべき伝統威力を伝へ來つたのである。(二〇〇)⁴⁸

《我らの祖先の描きし神々英雄はすべて隱遁超脱の聖者ではなく、動亂の生に隨順せし情意的人格である。

速須佐之男命は「よさしたまへる國を治らさずして」妣の國根之堅州國に罷らんとおもふが故に「青山を枯山なす泣き枯らし、海河は悉に泣き乾しき」といふ悲劇的運命を荷はせ給ふ荒神にましましたのであるが、又出雲の肥の河上に八保遠呂知を退治して乙女を救はせ給ひ、現実の地上に降り立たして出雲八重垣の歌に家庭の歡喜と愛情をうたはせ給うたのである。神武天皇の久米の御歌に「みつゝし久米の子らが」とうたはしし同胞愛とまた「うちてしやまむ」といふ征服の雄たけびは、又御兄君五瀬命が登美毘古が矢に当り給ひて「賤奴が手を負ひてやいのちすぎなむ」とをたけびて神あがりましぬる**【p327】**る御最後と共に動亂の生のかなしき緊張を示すものである。

倭建命の御生涯が英雄的人格の悲壯の運命をつたへることはいふまでもないが、「さねさしさがむの小野に」の御歌をのこして命に代り

明治天皇が

折にふれて

おのづから仇のこゝろも靡くまで誠の道をふめや国民 (三八)^(三八年)

仁

いつくしみあまねかりせばもろこしの野にふす虎もなつかざらめや

(四三)^(四三年)

【p321】

教育

いかならむときにあふとも人はみな誠の道をふめとをしへよ (三九)^(三九年)

道

人の世のたゞしき道をひらかなむ虎のすむてふのべのはてまで

(四五)^(四五年)

鏡

世の中の人のかゝみとなる人のおほくいでなむわが日の本に (四三)^(四三年)
と宣らせ給ひし大御心に通ひますのである。世界人道の理想を生命化する我が皇室の御精神に此にうつしく仰ぎまつると共に、また東西文化統一の大業は常にこの広大博綜の御精神によりて仰ぎまわ啓導せられたるを憶念するのである。

かくて個我を全体に没し、悪魔をも董化すべき真実の信を共にする大乘の流通は、之を「世城の王道よく通するに同じ」と宣ひ、又同じ維摩経義疏（仏国品）には三宝紹隆は王道流通とも仰せられ、こゝに平等の慈を以て一切群生海を済ふべき真実の宗教教化は、これ日本天皇の大御心に外ならぬことを反映せしめ、大乘流通の根柢を我が皇室の教化精神に置かせ給ふのである。これ正しく世界宗教の教化【p322】理想を固有神道の内的意義に融合して、我が日本の世界的使命を宣揚し給うたのである。⁴³

《天皇は「みおや」の神のくもりなき大御心に基きて国民を治らせたまひ、政治は即ち神を祈り給ふみ心によりて、こゝに「神ながらの

みち」は現実の政治、又国民の内心とを統ぶる大道として、祭政一致の精神は、つねに世界文化の理想を摂取して開展せしむべき生命をつたへ弘め来つたのである。

太子の御精神はこの我が皇室本来の大御心を世界的文化の上に発現し給うたのである。⁴⁴

《これまことに 明治天皇の大御歌に、

をりにふれて

聞くべき道はひらきてかみつ代の国のすがたを忘れざらなむ (四五)^(四五年)

述懐

千早ぶる神のかためしわが国を民と共に守らざらめや (三六)^(三六年)

道

千早ぶる神のひらきし道をまたひらくは人のちからなりけり (三六)^(三六年)

神祇

いつはらぬ神のこゝろをうつせみの世の人みなにうつしてしがな (四四)^(四四年)

【p323】

寄国祝

かしの実のひとつ心に万民まもるがうれし芦原のくに (三七)^(三七年)
橿原の宮のおきてにもとづきてわが日本の国をたまたむ (同)

国

天つ神定めたまひし国なればわが国ながらたふとかりけり (四四)^(四四年)
世はいかに開けゆくともいにしへの国のおきてはたがへざらなむ (同)
と示させ給ひし大御心に通はせ給ふのである。

聖徳太子がひろく大陸の思想、文化を総撰せさせたまひ、之を国家生活の体験に統一して、日本の人道的使命を発現したまひし大業は、まことに「開くべき道をひらきて」而も古への国の姿を忘れ給はざりし大御心を仰ぎまつるのである。世界的日本の創開せられんとするあらた代に建国の古を憶念して国史を光闡し、神祇を敬ひたまひ、

の法母とならむと誓はせ給ひ、あまねき「いつくしみ」を以て同胞協力の生を養育し給ひし大御心はこの事実を偲びまづることに依りて更に切実に我らが胸に仰がしめらるゝのである。これ即ち仏の「まこと」を以て御一族共に家庭的情意を国民の上にそゝがせ給ひ、み国のためにみいのちを捧げさせ給ひし厳肅悲痛の体験事実を内容とするのである。自らのために解脱を求めず、永遠に衆生救済に労苦する大乘菩薩の宗教は、この偉大なる人格の捨身の大業【p.317】に依つてこそ、真に生きたる人生宗教として日本国土に興隆せしめられたのである。

(二六六—二七四) ⁴¹

此の家庭内に於ける自他を分たぬ「いつくしみ」「まこと」の情意の生活に通ふ意志に依つて肉身のみならず、自他を分たぬ同胞協力の世界が具現され行く事を太子はのたまはせられて居るのである。

此の「いつくしみ」大乘的精神に依つて、自己を覚醒せられゆく時、自己の孤独なる悲壮なる気持も、温い家庭的情愛に依つて救はれてゆくかを真に実感せしめられたのであった。仇国に捕はれの両親、兄弟、同胞を憂へ、自己の責任をも遂行出来ぬ逆境をなげく気持も、偉大な本《全人生事実の制約的具現は『すまひ』であり、住居感情が安堵感情の主要内容であり、そこに個人の生命財産の安全と国家社会の安寧秩序とがその現実的始源^(源)を見出すのである》⁴²と云ふ三井先生の言葉を実感せしめられたのである。

【p.318】

この肉身を超越した自他を分たぬ家庭的情意の世界をこの柏木の田中家に具現する事を得た機事によつて、真に国家公共の生に開発せしむべき、総合的統一を見出すべく努力する事に依つて、此の『まこと』に通ふ人間情意の世界に誠の精神交流の世界ある事を信知したのである。肉身の親縁、同胞の国家に対する随順的行動意志に対する情意に唯物世界を超越するものはこの情意的交流の生活である。

思ひわづらひし二年の生活的煩悶依りの解脱は単なる個人的解脱に

終止する事なく、公共生活に対する没我的随順意志こそ尊きものと信じたのである。

些細なる隣組組織を通じて防空訓練、個人的關係を通じて、国民的生活への没入感こそ余にとつて「いつくしみ」「まこと」の発露としての自発的行動たらねばならなかったのである。

【p.319】

反省 一八、七月

子を思ふ親の心をかへり見て今の我が身の恥じらるゝ、かな人の為心を碎く時の間も人の人たる心を忘るゝな

幾度か我が行を省り見て人に恥じざる人とこそなれ生死のけじめあらず人は皆み国の命守り行かなむ戦ひの雄叫びあげて益良夫は悲しき命捧げまつらむ

斯く反り見ては「作三不請之友」。為「世法母」との情意の気持とはれずはなれて自他の区別にとらはれる内的生活を反省する事が幾度かあったのである。

様々の家庭生活の情意の総合的精神的統一の中より公共生活への生の実現を見出す事は、内的苦悶、まこと多き「まこと」の人の心であると信ずるのである。人の心を治めるこそまことの政治であると思はれるのである。

【p.320】

思ひも尽きせぬ苦悶の中に統一を見出し行く人の『まこと』に通ふ情意生活、家庭生活に又余の生き行くべき道を見出したのである。

第四章項 国家生活

《国民が共に永遠の大道を体得し、天魔波旬をも動かしぬべき誠といわくしみに融合して、一切衆生に通ふべき真実の信を実現すると、此茲^此に国家生活は団体協力に守られ、世界人道の使命を發揚して、一切外敵外悪と雖も侵すこと能はじと宣ふのである。これまことに

とよませ給ひたる大御心を、すなはちたゞ道德律のひとむきの理論としてにはあらずして、人間生活、国民歴史の現実心理的開展のまゝに随順する人生事実としての『孝』のみちをかく表現せさせ給ひしとあふがしめらるゝのである。

故郷に対する思慕の感情は、それはやがて生活そのものに対する断ちがたききづなであり、生活の根本条件の一つとしての住居に対する憶念より発源するのである。『人の住むこと』は最も本源的生活事実である。それは生活事実の分析ではなくして、生活そのものの、提示である。それを直観的に内心に味はせ給ひて大御歌によませ給ひしことには、はかりがたき大御心によませ給ひしことにはかりをあふぎまつるべきである。そこにこそ『社会主義』の提出したる問題の解決せしめらるべき原理【p.33】をあふがしめらるゝのである。「一般人生問題は全人生事実によつてのみ解決せしめらるべきであり、全人生事実の制約的具現は『すまひ』であり、住居感情が安堵感情の主要内容であり、そこに個人の生命財産の安全と国家社会の安寧秩序とがその現実的始原を見出すのである。(昭明治天皇御集研究による)」³⁵

その心を『世間虚仮唯仏是真』とは太子が時に自ら御夫人にのらしまし、ところであつて、又家庭の御生活に王子王女にもこの信を教へたまひしを偲びまつるのである。第一王子山背大兄王が推古天皇崩後幾度か 皇位継承問題の過中に立たせ給ひ、王の嗣位を阻止し奉れる蘇我氏がつひに軍兵を以て王を襲ひまつりし時、「一身の故を以て豈万民を勞せむや」「夫れ身を捨て、国を固くせむは亦丈夫者ならざらむ歟」とのたまひて、御一族悉く共に自刃して神あがりまし、上宮王家滅亡の悲劇は、その国民生活を荷はせ給ひ、唯仏是真の見【p.314】えざる誠に大御心を捧げまし、父聖王の大御心の正しき示現であつたのである。」³⁶

『子の心を洞察するは親に過ぐるなく、臣の意を照知するは君王に如くことなるべきである。』³⁷

《真実の信を行ふ道は唯肉身父子の間にのみ止まるべきではない。自他を別たず親子の情を以て教へあひ、又まもりあふべきを宣ふのである。されば、現生活家庭の生活も個人的肉身の情愛にのみ安んぜず、私なき真実の大道を具現して共に公に奉ずべきことを示したまふのである。太子はこのみに、王が「勝鬘是我之女」と言ひし言葉をよませ給ひ、「勝鬘は既に己が子なり」とその父子の親縁を思はせ給ひつゝ、而も「且つ明德ありて応に勝道を聞くべきが故に亦自ら我が子と称するなり」と示して、そが教への道の親子たりし事実を回想して、こゝに家庭生活の真義を窮めさせ給うたのである。」³⁸

《太子は「我が子の称は自他を別たず、唯善に在り」と宣らせ給ひ【p.316】 自他を分たぬ全体生活にまことの道を実現して、親子家庭の情意を国家公共の生に開発せしむべき総合的教育精神を示させ給ふ」³⁹ たのむたのである。《現生家庭の芳縁にくもりなき永久生命の信を具現したまひ、個人肉親の恩愛に国家生活憶念の至誠を貫かせ給うたのである。これまことに世の虚仮なるにめざめて、唯仏の「まこと」を念じ給ひつゝ、国と民とのために、一代の労苦をさげまし、偉大なる悲壮の生命のうつしき真証である。》⁴⁰ 《太子は解脱の精神を家庭と国家との生きたる現実に純化したまひ、恩愛思慕の人生を捨てさせたまはずして、そこに永遠の信を、又没我奉公の至心を実現させ給うたのである。記紀万葉の歌にあらはれしわが祖先の人生愛と、み国のために死を念ずる吾が武士道精神は、こゝに人生宗教の信念のうちに綜合具現されたのである。

勝鬘經義疏に經典撰受正法章に菩薩が衆生【p.316】教化の精神を示して「作不請之友(中略) 為世父母」とあるを釋して、

「友は是れ相救ふを義とす。然れども請ひて後に救ふは真の友に非ず。故に不請の友を作ると云ふ。菩薩の物を化するは茲父母の嬰兒に就くが如し。故に世の法母となると云ふ」

と宣ひ、国民教化の念願を開示して民のため不請の友とならむ、大悲

第二項 同信協力

この現実生活への没入感、この中に真に我々国民生活への真路を見出し得るのである。学生生活のみにのみ局限されず、普遍的国民生活の中に己が生命を没入すべく、苦闘し行く事の真意義を太子の大御言葉の中に仰ぎしめらる【p.308】、のである。学生直接的なる学生運動から離れて、国民生活に於ける国民的指導的の立場人格たるべきには己の行ひを正すこそ唯一の道であるのである。

大東亜戦争下に於ける複雑なる国民組織、統制経済の不統一化、政治・経済道德の倫理化を強調される反面、何等其等に人格的指導者を見出す事を得ない事は、最も此の戦争遂行に於いて考ふべき重大問題なのである。政治とは人の心を治むる事なりとのたまはせられた太子の大御言葉の中に人心統一の無限の御苦闘、悲劇の御体験過程を仰ぎしめられるのである。

強権政治、特に学生運動時代に於いて最も恐れて居た概念的形式的固定的組織制度こそ、此の際一掃されざれば、国民の精神生活こそ益々報国の至誠、一億一心の赤誠から離れ、たゞ固定的、形式的外殻のみその残存を【p.309】のみ存する事を憂慮するのである。

隣保関係、配給給組織の些細な問題に於いて、閑却され易き国民の生精神生活の実体は現在にとつて最も関心を持たざるを得ぬ事と信知するのである。

『明治天皇御製拝誦集研究』『聖徳太子の信仰思想と日本文化の創業』の二大著書を中心に学生運動の根本原理として仰いで来た我々にとつて、此の具現者としての実生活に総合的統一性を見出す事は、同信協力の世界を離れては苦難の道と云へ様。だが、真の協力の姿とは果して如何なるものか。これについて、三井甲之氏の言葉を借り様。

『協力』は人間社会生活の道德原理であるが、此の協力を実現すべく民衆を指導するものは孤独の悲哀を痛感して、奮闘せねばならぬのである。多数の人々に観賞せらる、芸術が創作者の悲壮なる孤独聳生活か

ら生る、のも此の【p.310】故である。鋭敏なる予感と誠実なる憶意とを有する人格の精神生活のうちに超個人的永久生命の流れ入れ溢れ出づる律動と波瀾とより真の芸術が生る、のである。『先天下之憂而憂、後天下楽而楽』といふのは此間の消息を道德的見地より修辭的に誇張していつたものである。』(明治天皇御集研究より)³⁴

今学生協会の同志、特に先輩同全国的師友を離れて、東京柏木の一隅に住む余にとつて、此の孤独なる悲哀を十分に味ふ事が出来るのである。だがこの孤独なる悲哀の中より生み出すべき真の国民生精神生活こそ、学生思想運動の延長であつて、祖国随順への一貫せる臣民としての大道である事は、全国の師友の思ひに通ふものである事を確信するのである。

時勢の流れに抗せず、一時我等の運動の全面的解散は余【p.311】儀なくせられ、国民の脳裡依り次第に「全国的合宿」「世界観大学」のはなばなしき運動の展開せられた事も消え行くも、四国の生んだ吾等の師と仰ぐ黒上正一郎先生の御教が、十数年の後、忽然として全国的学生運動を展開し、当に政治運動に入らんとする際に、時勢の流れに抗するを得ず、一部の反対者の為に暗に暗に葬らんとしてゐる。だが此の芽の出た麦の苗が果して嚴冬を越すを得ずして、枯失し又は地下に埋没し去るであらうか。吾等の苦闘は今茲に国民の指導たるべき生への闘ひを戦ひつゝ居る事を果して人は知らざるや。悲劇的人生への深刻なる生への闘に、正月、二月、三月を過したのであった。同志との連絡は絶えた今、只同信協の具現に向つて突入すべく。

第三項 家庭生活

【p.312】

明治天皇御製

『孝』

たらちねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり(四〇〇)

五三〇》²⁷

《殊に自ら

「信は是れ義の本なり。事毎に信あるべし。其れ善悪成敗要ず信にあり。群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信無きときは万事悉く敗る」
 (憲法第九条)

と仰せられ外的施設の形式に依憑すべからざる動乱無極の人生を照徹照して、上下同胞融合の信念が外界の困苦を制御するに至って国民生活は威力あらしめらるべきを宣ひし御精神【p.305】と照応して、この内的生命の威厳を体したまひし大御心に依つてこそ、真に国内民心の統一と、対外的威力の発揚とは成就せられむたるを仰ぎまつるのである。(五七)》²⁸

《国家重大の転機に国民生活の運命を荷はせ給ひし大御心は、時代の痛苦濁乱を啗に客観視し給はずして、先づ自らを省みさせ給ひ、全体生活の開導教化を念じて求導精神し給うたのである》²⁹ 然し乍ら《實際政治の革新は太子に於いてはつねに国民精神生活の内的改革に基かねばならなかつたことを信知し給うたのである。一代の内治外交が三宝興隆の教化事業と表裏せしめられ、憲法第二条に「篤く三宝を敬へ」と仰せられ、これを「人尤だ悪しきもの鮮し。能く教ふれば之に従ふ。其れ三宝に帰せずんば、何を以てか枉れるを直さむ」と結び給ひたるは、実にわが国民の靈性を信ぜさせ給ひ、教育教化に依つて国家生活の内的根柢を確立せんとし給ひし大御心を顕【p.306】すのである。けれどもこの内的改革は太子に於いては先づ之を自らの大御心に実現せられねばならぬものであった。太子がこゝに「天下の道理を論ぜば」と宣ふのは、その求道精進が豈に自らの解脱のためにあらずして、国民の共に帰趨すべき大道の実現にあったことを示すのである。而も「悪を遣り善を取るは必ず己に始まりて方に能く人を勧む。若し自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得む」との事き御言葉は、実にこの内的改革を先づ自らの大御心に具現するに非ざれば、真に国

民同胞を救済すること能はじと信知せさせたまひたる、内心の生の戦の深刻なりし事実を偲はしむるのである。(六三二)》³⁰

《人生の痛苦無常を觀じ生死の解脱を願ふ心はこれを否定すべきではない。而も彼らが解脱を一我の天地に願求して他と共なる人生を顧みざる思想は、つひに現実生死の裡の苦闘を厭ひ、理想を現実生活の外に求むるに至るのである。

【p.307】

太子はこの個人的超脱の人生觀を排し給ふのである。》³¹

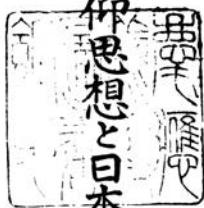
《心つねに衆生救済の慈悲を抱くが故に生死動乱の間に処して厭はず、永久生命の信を念ずるが故に、発心求道の願を相續するもの、これまことに太子の示させ給ひし道であ》³²。

《蒼生と共なる生の故に解脱を自らの為に求め給はず、而も眞実生命の信に基きて国民の教化救済を先にと念じ給ふこの大きいつくしみの裡にこそ、天下の道理は具現せられ、国民文化の根柢は確立せられたるを仰ぎまつるのである。

けれどもこの教化救済の御精神は更に全体生活に浸透するところの偉大なる人格の求道苦闘によつて表現せられたのである。(六八九)》³³

黒上正一郎著

聖徳太子の信仰思想と日本文化創業



第一高等學校昭信會

図2 昭信会の根本テキスト、黒上正一郎『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』

久生命のために、国民生活のために、個人生命をさぐるときに個人の『死』は永久生命に没入し人は神となる。正岡子規が『弔戦死者、匹夫にして神と祭られ雲の峯』と詠じたのは明治二十七八年戦役に従軍した彼が、当時の国民的感激を表現したものである。

湊川懷古

あた波をふせぎ人人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ (三五)

【301】

の大御歌は、戦死者及び一般祖国のために忠義を尽した祖先と同胞との霊の現実生活によびめさましめらるべきを『神となりて世を守る』とこそよませ給うたのである。(明三井甲之先生著、明治天皇御集研究三〇)²²

この聖徳太子の仰せられ給ふ内的平等観にともなふ同信協力の具現こそ、大東亜戦争下に於ける国民全体の行ふべき道であると余は確信し、又最も重大なる責務であると痛感するのである。

太子が『將に他を化せんと欲せば、要^{かな}ず先づ己^{みづか}が身を正しくすべし。所以に先づ自行を受く(撰律儀戒を指す)太^み太^み大^み士^みの己れを正しくするは物を化せんがためなり。故に撰衆生戒あり』(十大受章)

と仰せられ、常に他との関連に於ける自らの生を自覚して、自ら正すことに依つて他の救済を成就する所に自行の意義のあることを示し給ふのである。

【p.302】

この自行化他に関する戒律の表裏する所以を斯の如く明かし給ふところに、大乘道德思想を真に体験化し給ひし一代の御精神を仰ぎまつるのである。(二一〇)²³

《太子が憲法第十条に「共に是れ凡夫」と示されし如き深刻の人生観を以て其の心理を洞等察し給ひ、之を同胞協力に導くべき精神原理を開示せられたるものは正しく憲法の「和」の思想であった。太子に於いてはこの上下和睦の思想は常に、皇室の下万民一体の国家精神に

基かれたものである。即ち、憲法第十二条に、

「国司、国造、百姓、に斂^{はら}ふこと勿れ。国に二君なく民に両主なし。卒土の兆民王を以て主となす。任ずる所の官吏は皆是れ王臣なり。何ぞ敢て公と與に百姓に賦斂せむ。」

と仰せられ、全国民は等しく天皇の臣民たることを照明し給ひ、此の国体の本義に基きて豪族私有の土地人民が朝廷に帰属【p.303】せしめらるべきを明かし、王政統一の根本精神を闡明すると共に、こゝに大化改革の実現せらるべき素地を作らせ給うたのである。太子はこの精神を以て、当代氏族制度²⁴の積弊に対して不断改革の労苦を捧げられ、常に制度政策の外的施設に止まらせ給はずして更に之を統一して生命あらしむべき「人」の問題を重んぜさせ給ひ憲法第七条には「事に大小なく、人を得て必ず治まる。時に急緩なく賢に遇へば自ら寛なり。此に因つて国家永久にして社稷危きこと勿し。故に古の聖王は官のために以て人を求め、人のために官を求めず。」と示したまうたのである。即ち政治の根本は人の心を治めることであると常に太子の御精神の存するところである。こゝに憲法第十五条に「私に背きて公に向ふは是れ臣の道なり」と宣ひしも没我奉公の至誠の人格にして始めて真実の統治が行はるべきことを示すのであつて、第十四条に政治の要諦²⁵は聖賢を得るにあることを宣へるものもまたこの精神をあらはすのである。こゝに正しく政治生活【p.304】の根柢に国民教化の事業を伴はせ給ひたる大御心を思ひまつるのである。²⁶

《而も其の一貫せる思想は即ち皇室を中心とする国民協力の精神を国家組織に実現して、全体生活の開発進展を成就すべき根柢の確立に存するのである。太子は自らこの精神を具現して常に「大士は苦を忍びて物を度す」(維摩經義疏菩薩行品)と宣ひ、国民救済のため一切の労苦を忍びまして、其の生涯を尽させ給うたのである。(五一—

作に心を勞させ給ひ無窮の国民生活を念じて永遠の信に基く教化の大願を、また世界的日本の進むべき大道を開示し、永く教育教化を以て国家国民を護らんとし給ひし事實は、今更に限りなき大御心を仰ぎ俾ばしむるのである。』¹⁷

『凡そ精神科学的研究は人生そのものを対称とするが故に、冷静なる学術的研究もまたそれが研究者の体験に統一せられて【p.277】生命を得るのである。殊に悠久の国民生活を照したまふ大御心の表現に対しては、研究そのものも亦現実生活に於ける憶念の信の実現を念とし、同信協力¹⁸によって無窮に相続せらるべきと共に、又それは大御心によって開發せしめられたる研究者の信念告白を内容たらしむべしと信ずるのである。』¹⁹

(黒上正一郎先生著、聖徳太子の信仰思想と日本文化創業序説に説による。)

『即ち真実の信仰に基く実行は、南無仏と一称するところにも存することを示させ給ひ、匹夫の信仰と修繕もこれが真実ならば必ず至徳の仏心になふべく、吾人の日常の実生活もそこに真実の善を修するとき、その俚に永遠の仏意の具現となることを宣ふのである。仏心を体現すべき唯一大道は即ち「善」を根本的内容として始めて全人生の体験に活くる真実の意義を生ずるのである。万善同帰の思想をかくの如き精神を以て融化したまひたる大御心は、これ国民生活には其の知力、富財、地位、【p.298】等無限の差別は存するとするも、同胞は内に同一宗教的生命を共にして、同じく永遠の信に基く道徳的実行の生に徹入し、俱に融合協力を實現すべき広大の道を照明し給ふのであって、こゝに平等教化の原理を徹鑒したまうたのである。』²⁰

茲に畏くも明治天皇御製を拝誦し奉り、三井甲之先生の「戦死者の生ける霊」の言葉を引用したいと思ふのである。

《折にふれて

戦のにはたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ (三七)

凱旋の時

外国にかばねざらし、ますらをの魂も都にけふかへるらむ (三八)

をりにふれて

国の為いのちをすてしもの、ふの魂や鏡にいまうつるらむ (三八)

【p.299】

をりにふれて

国の為いのちをすてしますらをのたま祭るべき時ちかづきぬ (三九)

杜頭紅葉

もみぢばの赤き心を靖国の神のみたまもめで、みるらむ (四二)

これらの大御歌はすべて、戦のにはに於いて国のためたふれし兵士の「たま」をしぬばせ給ふ太御心をうたはせ給うたものである。祖国防護のためにその身をさ²¹、げた人々を、みをやのみたまとともに、生き残りたる国民がその心をしぬぶ時、亡き人々の霊は、生ける人々の心によびおこされ、生きてはたらかしめらるゝのである。こゝに永久生命は、同一国民の全体的協力生活のうちに、うけつぎつたへらるゝのである。こゝに個我は全国民生活のうちに没入せしめらるゝのである。此の全体生活に帰依没入することが、『入信』である。こゝに個体意志は全体意志とつながしめられ、現実的責務生活は歴史的精神生活と結合せしめらるゝのである。こゝに各人の身分地位職業所有能力等によって分た²²る生活諸様式を総撰するところの全国民的信仰生活が【p.300】実現せらるゝのである。

それは身分地位所有能力等²¹を機制的に平等化しようとするのではなく、歴史的伝統と現実的能力とに順応すべき生活形式の差別を認めつゝ、それを公正化するところの原理を国民全体主義の同胞感としての内的平等感激、すなはち個体生活の全体生活への没入感に求めようとするのである。

此の全体生活への没入感は、戦死者を追憶することによって直ちに実現せられ、われらの現実生活の穢れが浄めらるゝのである。祖国永

られたる 聖徳太子を憶念しまつるのである。

聖徳太子は我が国民生活の未曾有の転機に出現せさせ給ひ、当代大陸の思想學術を博綜し給うたのである。即ち太子は国民教化の理想に於いては大乗仏教を融化し給ひ、また現実国家の治道に就いては儒家、法家の思想をも採択せられたのである。けれどもこれらを統一して生命あらしめたのは、実に我が日の本の皇子として生れさせ給ひ国民を治らし給ひし信念体験であつた。(中略) 太子一代の内政改革、又我が国際的地位の確立の如きは、共にこれ等の大陸文化批判綜合の内の事業を置かれたのである。』¹¹

【p.293】

『一代の外的功業も、更に其依つて来るところの内的自覺に之が意義を窮めたる史的洞察は、今太子を憶ひまつる者のふかく回顧すべきところである。』¹²

『太子は実に其の政治的施設に於いて国家生活の進展を確保すべき用意を組成せられたるのみならず、更に之を支持すべき精神的事業に於いて、世界を指導すべき国民的信念を顕現し給ひ、我が日本の永久的基礎を確立し給うたのである。太子は偉大なる政治家にましまし、と同時に、また衆生永遠の教育的人格にましますのである。千三百年に互る日本文化開展の歴史は、この偉大の御精神に依つて正しくその根基を建設せられたのである。』

聖徳太子の三宝興隆は、この国民的信念の下に行はれたる衆生教化の大業であつた。されば我が教化史上、国民は太子を奉讃するに屢々真諦俗諦の相依を具現したまひし理想の宗教的体现者を以てしたのであつた。』¹³

【p.294】

『(一)、に真諦俗諦の相依といふ、その真諦とは宗教的真理を、また俗諦とは政治経済生活を指すものと見てよい。即ち仏教も太子に依つて単に専門僧侶の特殊教団生活にのみ依るものではなく、それが政治

活動の体験に生きしめられ、こゝに信仰思想と现实生活との一致融化を実現せられたることを奉讃せるものである。』¹⁴

『太子が我が文明の源流に立つて御身親ら真俗相依の範を示させ給ひ、大乗仏教を国民的信念に統一して、政治道德活動を内容とする人生宗教を广泛宣传し給ひし大御心は、永く国民の仰ぎまつらねばならぬところである。こゝに外来の宗教教義は国民文化の開展要素として融合せられ、同時に大陸仏教の理想そのものも、また現実国土の道德活動にその生命化の郷土を見出したのである。東亜億兆の宗教心を代表する仏教がすでに本国に於いて衰頹せるに拘らず 【p.295】 日本国土に其の生命を開展せしめられ、永く世界文化の上に其の意義を保持せしめられつゝ、あることは、正しくこの偉大の御精神に依つて之が統攝され、遺教としへに国民教化活動の進路を支配せしがためである。太子の信仰思想の裡には既に我が国の世界人道的使命が発現せられてあつたのである。』

われらはかくの如き御精神の表現をうつつしく三経義疏の内容に仰ぎまつるのである。

この三経義疏に示されたる思想信仰は、すべて「群生と苦樂を共にす」(文殊問疾品)と宣ひし平等大悲の教育精神に帰結せしめられたのである。凡そ国家生活が単に制度政策の外的政策の¹⁵外的形式にのみ向ふときは、之を支持すべき内的生命の源泉を枯渇するに至るのである。こゝに太子が一代施設の根底に常に教化の大業を伴はせ給ひ、国民を等しく永久生命の大道に和融して、信に基く同胞協力を実現せんと尽させ 【p.296】 給ひし大御心は、一切の政治的建設に生命をあたへ給うたのである。儒家、法家の文献に現はれたる支那民族の政治道德思想も、又この御精神に批判統御せられ、此にその選択摂取の内的規範が明示せられたのである。』¹⁶『この現実的施設に国民永遠の大道を貫かせたまひし大御心に依つて以後に於ける国民文化開展の素地は作られたのである。殊に内外多事の御生涯に自ら三経義疏の御述

十一に曰く、明らかに功過を察し賞罰必ず当てよ。(後略)

【p.288】

十二に曰く、国司、国造、百姓に斂ること勿れ。国に二君なし、民に両主無し。卒土の兆民王を以て主と為す。任ずる所の官司は皆是れ王臣なり。何ぞ敢て公と與に百姓に賦斂せむ。

十三に曰く、諸の官に任ずる者、同じく職掌を知れ。或は病し、或は使して事に欠くこと有らむ。然れども之を知るを得む日は、和すること曾て識れるが如くせよ。其れ與り聞くに非ざるを以て公務を防ぐこと勿れ。

十四に曰く、群卿百寮、嫉妬有ること勿れ。(後略)

十五に曰く、私に背きて公に向ふは是れ臣の道なり。凡そ人私有れば必ず恨みあり。憾あれば必ず同ぜず。同ぜざれば則ち私を以て公を妨ぐ。憾起れば則ち制に違ひ法を害す。故に初章に云く、上下和諧せよと。其れ亦是の情なるか。

【p.289】

十六に曰く、民を使ふに時を以てするは、古の良典なり。(後略)

十七に曰く、夫れ事は独り断ずべからず。必ず衆と與に論ふべし。少事は是れ輕し、必ずしも衆とすべからず。唯大事を論ふに速んでは、若しくは失あらむことを疑ふ。故に衆と相弁すれば辞則ち理を得む。⁸以上

此の太子の仰せられた「上下和諧」「信は是れ義の本なり」「詔承諾必謹」「背私公向」の御精神こそ、我等の最も遵守すべき道であると日夜拝誦するのである。

茲に於いて我々同志に依の日夜拝誦する「明治天皇御集研究」と共に、常に自己の体験を統一すべき根本的テキストとして戴く、黒上正一郎先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の中依り言葉を引用して、自己の思ひを述べたいと思ふのである。

【p.290】

《太子が常に皇化を全国民に遍ねからしむべき大御心の下に「和を以て貴しと為す」といふ同胞協力の信を具現し給ひ、こゝに「群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信なきときは万事悉く敗る」と仰せられ、くもりなき誠に国民が一致融合するとき、国家生活の生命は一切の波瀾を打破して開展し得べきを示され給ひたるは、正にこの国民的信念の内容を偲はしむるのである。而も三経義疏には到るところ苦を忍びてひろく衆生を済度すべしといふ大悲教化の精神を宣説し給ひ、この平和協力の信を以て、更に一切群生を開化すべき広大な念願を顕示せさせ給ふのである。(同書、四頁)¹⁰

【p.291】

然し乍らこの国民文化の史的開展は背後に偉大なる偉人天才の努力と指導ありしことを顧みねなければならぬのである。然らば其の偉人天才とは如何なる人物を持つて言ふのであるか。それは決して単なる英雄偉人を指すのではなく、それは真に苦悩濁乱の人生に徹し、蒼生の共に帰趨すべき大道を体得して之を実生活の複雑関連と不斷転化の裡に実現せられたる総合的指導精神の具現者をいふのである。

我が国民生活は外来文化との接触によって前後二回の重大転機に遭遇したのである。先に東洋文化を受容せし推古朝と、後に西洋文化を輸入せる明治時代とは、正にこの二大転機に外ならぬのである。而も国民はこの重大時機に当って、かくの如き指導的人格を国民生活の核心たる 皇室に仰ぎまつたのである。

近く、明治天皇の大御稜威の下に、わが民族が内、平等【p.292】に皇化に浴せしめられ、外、世界文化に有力なる地位を確立したることとは、われら国民の等しく仰ぎまつところである。この心は又遡って推古朝の時代に大陸文化を批判綜合し給ひ、わが国民を哀愍教化せ

の体験を基礎に、大衆や実生活というものの上に、何とか自らの思想を手作りで組み上げてゆこうとした菅野の理解と思想の到達とにむしろ注目してみたいと思う。菅野のような疑似インテリこそがまさに日本ファシズムの温床であったと喝破する戦後インテリ層そのものについて、菅野はどのような想いを抱いていたのか、残念ながら彼の残した史料のなかには何も記述されてはいない。様々な立ち位置から、戦後知識人が軽快に日本近代の後進性や封建遺制を糾弾していたときに、日本で生まれた三人の子供達に、それぞれ誠・道（子）・渡と名付け、学生時代の思想遍歴を沈黙の内に封印した彼の生きかたに、その一つの答えを見いだせるのかも知れない。

【翻刻】

【p284】

第十一章 柏木時代

第一項 同信協力聖徳太子の信仰思想と日本文化創業

二十五歳の春を似へ、正月を故郷の町に過した余は、新学期への授業開始と共に上記前記柏木の一隅に生活する事となった。

同信協力の信と誠との統十国民的統一的実感、現実生活の不可側なる展開、そこに余自信の信を貫く、不動の意志こそ又の誠の国民協力の姿以外なのである。

思ふも尽きせぬ世の中の様は、誠に聖徳太子の憲法【p285】拾七条に御示し遊ばされし大御言葉に御教示されて居る事を日夜拝誦する事に依つて具現され行く事を思はせられるのである。

一に曰く、和を以て貴しと為し、忤ふ事無きを宗とす。人皆党あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。然れども上和ぎ、下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事かならざらむ。

二に曰く、篤く三宝を敬へ。三宝とは仏法僧なり。則ち四生の終帰万国の極宗なり。何れの世、何れの人か、是の法を貴ばざる。人尤だ悪しきもの蘇し。能く教ふれば之に従ふ。其れ三法に帰せずんば、何を以てか枉れるを直さむ。

三に曰く、詔を承りては必ず謹め。君をば則ち天とし、臣をば則ち地とす。天覆ひ地載せて、四時順行し、万氣通ふ【p286】、ことを得。地天を覆はむと欲するときは、則ち壞る、ことを致さむのみ。是を以て君言ふときは臣承る。上行へば、下靡く。故に詔を承りては必ず謹め。謹まざれば自ら敗れむ。

四に曰く、群卿百寮、礼を以て本と為よ。それ民を治むるの本は要ず礼にあり。（後略）

五に曰く、餐を絶ち、欲を棄て、明かに訴訟を弁ぜよ。其れ百姓の訴、一日千事あり。一日すら尚爾り況や歳を累ねてをや。（後略）

六、悪を懲し善を勸むるは古の良典なり。是を以て人の善を匿す無く、悪を見ては必らず匡せ。（前後略）

七に曰く、人各任掌あり。宜しく濫れざるべし。其れ賢哲官に任ずるときは頌音則ち起り、奸者官を有もつときは禍乱則ち繁し。（中略）故に古の聖王は官の為に以て【p287】人を求め、人の為に官を求めず。八に曰く、群卿百寮早く朝して晏く退け。（後略）

九に曰く、信は是れ義の本なり。事毎に信あるべし。其れ善悪成敗要ず信に在り。群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信無きときは、万事悉く敗る。

十に曰く、忿を絶ち、瞋を棄て人の違ふを怒らざれ。人皆心有り。心各執有り。彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること鑑の端の如し。是を以て彼の人瞋ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙へ。

しているにもかかわらず、手記を通じて、彼がどのような形で市井の生活に身を投じていたのかを具体的に知ることが出来る記述はほとんどない。彼が正大寮を離れ、独自の道を模索した挙げ句の、彼の思想の、一つの到達点がまとめられてはいるが、本手記では、柏木時代の「時代」そのものが語られることはほとんどない。

集団での学生思想運動を彼自身の生活原理としては放棄した上で、柏木での下宿生活を始めた菅野は、幼年時代を除いて、アメリカでも、日本でも、家庭生活の空間を持つ事ができなかった。柏木での下宿生活を通じて、初めて自分の居るべき場所を菅野は得る事ができたかのように見える。下宿のおばさんや、隣組での関わり合いは、手記の記述を丁寧に読んでゆけば透けて見ることが出来るだろう。それが、彼の生活そのものであり、文字通り彼の日常であつたはずで、それを通じて「同信」を信知したはずであつた。にもかかわらず、いや、むしろそうであつたが故に、手記の中にそれが「記録」されてゆくことはなかった。

平穏な市民生活を展開していた菅野は、九月二日の夜の東條首相によるラジオ放送、翌日の新聞記事などによって、法文経学生の徴兵猶予停止を知ることになる。既に猶予年令を超えており、前年、昭和一七年四月一三日に中野区役所で行われた徴兵検査で、第三乙種第二補充兵という事実上徴兵不適格者とされていた菅野にとっては、それが即、彼の入営を意味するわけではなかったものの、戦況の悪化と学徒出陣が具体化してゆく中で、応召に備え身辺整理をすすめて、一方で、結婚話しも進められてゆくことになった。逡巡の末、彼は後顧の憂い無く入営し国家に身をささげるという決意のもと、婚姻話を破談としたことは、本文中に言及があるとおりでである。

この年、昭和一八年は、正大寮から離れ、比較的平穏な学生生活を始めた菅野にとって、自分自身を含めた親族・知人の結婚や人生問題

が表面化する一方で、戦局の悪化とともに、学徒出陣が現実のものとなってゆくという、大きな人生の過渡期となった時期であつた。本手記そのものが、徴兵猶予廃止という政府の決定による自らの応召の可能性を前に、執筆が開始されたものであることはくり返すまでもない。

しかしながらその一方で、手記に具体的に記述されることはほとんどなかったが、正大寮を離れた菅野は、一般の市民の中での生活を重ねその生活を通じて、自らの「信」のありように、一つの確信に近いものを熟成させてゆくことになった。黒上の著作から彼が引き出したものは、一見、黒上自身の思い、あるいは昭信会の正式メンバーによる公式理解をなぞるようなものであつたが、その実、同じ言葉を使いながら、一義的には個々人の家庭生活の情愛、体験にその根拠を置きつつ、それが国家生活へと予定調和的に繋がることへの確信こそ、「信」の本来の姿であり、聖徳太子や神話時代の皇祖皇宗の思いもまた、それぞれの家庭生活と国家生活の重なりの中に見いだされるという黒上や蓑田の議論を、自らの日本と北米での実生活・経験に根底をおいて、菅野なりに読み替えていったものであつたと言えるだろう。

既に、述べたように、菅野は日本学生協会の思想や理念について、一度たりとも批判的な言説を弄したことはない。しかし、実生活の体験に欠け、観念的な信の世界にとどまっていた日本学生協会のリーダーたちに対して、自らの生を、大衆そのものに軸足をおきつつ生き、人々を導いてゆくべき「指導者」、実践的な「政治家」として立つことを宣言した菅野が、「かなしい」視線を投げかけていたことは本手記を理解、評価する上で、忘れてはならない点であろう。その意味で、黒上の著作を、写経でもするかのようにひたすら書き写した菅野の営為や、多分に浄土真宗の信仰の反映を「手記」の中に読み込み、自らの言葉で自らの思想を作り上げてゆくことのできない、疑似インテリ

生活という市井の生活を体験してゆくことを通じて信知したという、社会との「同信」の確信である。また、自分自身の体験に思考の基礎を置くという彼の考えからすれば、手記本文中にも記述があるが、「減私奉公」といったスローガンは、無意味な標語以外の何物でもなかった。総動員体制のスローガンとしての「減私奉公」と聖徳太子の家庭的情愛を基礎におきつつ志向される「背私向公」という言葉の間に、本質的な違いを読み取る立ち位置から、菅野は自分自身の生活、家庭生活、家族への情愛といったものを減ずるところから議論を立てることを峻拒するのである。ロジックの上では、糞田胸喜、黒上正一郎の議論をなぞるような菅野の理解は、アメリカでの生活体験、戦時下の下宿生活を通しての市井の体験というところに基礎を置き、生活体験そのものがほぼ唯一の社会的資本である庶民にとって、「同信」という幻想は、現実存在する様々な具体的不平等に起因する社会問題を思想的に乗り越えるには、国民平等の共和の世界を志向する限りでは、有効な議論であったと言えよう。

同じく、本稿で繰り返し返される、黒上の著書の引用にかかる、「真俗二諦相依」という言葉もまた、彼は、信仰上の真実と、社会的政治経済的施策との相依というレベルで議論しているが、その裡に彼自身の生活、体験と家庭的情愛に対する人間的な誠実さを持った向き合い方が志向されており、それと予定調和すべき国家生活のありかたを模索していたと言える。そこには公か私かといった二者択一的な状況に追い込まれつつも、菅野の存在そのものと繋がるそれまでの自分の体験・自己の現実生活を基本にしつつ、それが突き抜けて全体と繋がってゆくという思考は、ナイーブで、ある意味反知性的であるという批判は否めないが、そこに庶民的バランス感覚をうかがい知ることができよう。その限りでは一挙に大御心に一方的に回収されてゆく類いの思考ではなく、言葉のほとんどの部分を三井甲之、糞田胸喜、黒上正一郎の言説を借りつつも、その単なる反覆ではなく、菅野なりの読み替

えが行われていると言って良いように思われる。

『国民評論』の記事に対する議論では、日本学生協会の内情を知悉する離脱者からの「不当な」告発に対して、一見、憤りを以て猛然と反駁を組み立てているように見える。しかしながら、彼の文章から読み取れるものは、厳しく言えば、当時の特高や、憲兵隊からの弾圧に抵抗する術なく、彼の表現を借りれば「弁明する機会も与えられず」、彼が学生生活の軸と頼んでいた日本学生協会、正大寮、そして早稲田大学精神文化研究会、いずれもが自主的に解散、ないし、自然解散という形を取ることを受け入れたことに対する弁解が、論駁という形を取っていると言う外ない。菅野は、学生思想運動に対する共産主義の容疑という全く不当で運動の本質とは「正反對」の嫌疑について弁駁をしているが、自分たちの活動そのものへの「弾圧」に対し、有効な反論を試みることはなく、自主的に解散するという道を選び取った自分たちの思想運動についての消極的な自己弁護のみがいささか空ろに響く。

戸塚警察署に拘引され、「思想戦闘綱領」について糾弾された時にも、自分は病氣療養中でその経緯を知らず、同綱領も既に焼却したと弁明に終始している。確かに菅野はその時に武蔵野療園に入院していた。同書も問題になったときに焼却処分を協会上層部から命ぜられたのかも知れない。しかし、彼の文章を読む限り、そこに自分達の思想の独自性を体制に抗しても突き詰めてゆくという意志も、学生運動の思想を正當に裏付けようとする姿勢も見ることはいささかできない。共産主義運動のように「転向」を強いられた分、総動員体制や軍国主義に押され「転進」した観念右翼や学生思想運動は、戦後の華々しい名誉回復も活動再開もなかったが、見えづらいまま自省の機を持つことなく伏在してゆくことになった。

他方、大変に興味深く、かつ、極めて重要な点であるが、彼自身が現実社会の、生活の中で「信」を融合、没入することが出来たと宣言



図1 「昭和十八年五月 浦和市郊外にて」

母親名義の郵便貯金通帳再下付の為の事務処理などを行って過ごした。二六日には東京に戻り、四月一日には第二学年の二期が始まっている。四月一〇日になってようやく貯金通帳の下付を受けた菅野は、早々に百円の授業料の納入を済ませる。その後、四月末ころに一時的に下宿先で病床に伏していたようであるが、日記抄にそのことについて特別な記述は見られない。

彼が残した早稲田時代のアルバム³には、この年の五月、学生仲間との武蔵野での散策の様子や、七月一〇日から一五日にかけて、軽井沢での第二学年の野外教練に参加したときの写真などが少なからず貼られている。その穏やかな表情から、日本学生協会の直接的な活動から離れた菅野が、これまでとは少し違った生活を始めている様子が窺えるかのようである。

夏期休暇を挟み、九月には、それまで彼が物心両面から支えとなってきた叔父本田夫婦の二世の娘達のうち、長女八重子の結婚話が、本宮の国分夫妻の仲介で具体化し、一〇月の挙式が決まるとともに、菅野自身にも見合い話が持ち上がったきていた。これら

の家庭的な出来事にかかわる諸事もあってか、大学の長期休暇期間以外にも、五月、九月と何度か本宮に短期の帰省を菅野は繰り返している。八月には「手記」の本文中にもあるように、福島時代の友人である遠藤立身がビルマから一時帰還し、七年ぶりの再会を果たし、一月に戦地に戻るまで何度か旧交を温めてもいる。

福岡県人原安子との結婚話はその後現実味を帯びてゆきつつあった。しかし、その一方で、帰国以来、菅野との間に何度も出会いを重ね、特別な感情が芽生えていたと思われる横須賀在住の従姉妹高橋正子との別離も経験することになる。観念論的な議論が繰り返されている手記の中で、「運命の悲劇。苦悶の後去る。余の『まこと』足らざるか。」という菅野の言葉の真意を読み取るのは難しい。しかしながら、この時期、正大寮を出た菅野の前に、戦時下とは言え処々に見られたであろう市民生活の空間が広がっており、彼はその中で一人の学生としての実体験を重ねていったことは間違いないであろう。

このような柏木における下宿生活を続ける中で、彼が自らの思考の根底に据えたものは、日本とアメリカの双方で人生を重ねて来たという事実立脚した、個人としての生活体験であった。菅野の特殊で個別具体的な、日本人になった「二世」としての生活経験を基礎にして、それがどのように国民の「信」へと融合没入してゆくことができるのかを、生活実践により試みるところに、今回引用した手記における彼の議論の重心が置かれている。前稿で既に述べたように、大きな方向性を議論する綱領作成者ではなく、現実問題を解決してゆく政治家への道を宣言していた菅野の思いに沿った思考であるとも言えようか。

彼もまた、当時の原理主義的学生思想運動の仲間たちと同様に、その国家的「同信」が、天皇の大稜威と大御心を仰ぐ事により、予定調和的に担保されるという、文字通り原理主義的、楽天的確信を持つべく努めていたが、それにも増して、彼の場合に強調されるのは、下宿

〈資料紹介〉

菅野武雄「最後の手記」(四)

―日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想―

柳田利夫(慶應義塾大学・教授)

〈目次〉

解説

本文

キーワード…日本学生協会、早大精神科学研究会、同信、日系二世、ユダヤ研究

【解説】

前稿に引き続き、今回は、菅野が正大寮の自主解散に伴い同寮を離れ、柏木で下宿生活を開始した昭和一八年一月から、本手記執筆の直接の契機となった法文系学生に対する徴兵猶予が廃止となる九月末までの時期に関わる手記を翻刻する。

菅野自身の章立てによれば、「第十一章柏木時代」の第一項から第八項となるもので、原稿用紙八〇枚に、これまで同様、マス目や行を全く無視して、細かな字でびっしりと書き連ねられている。各項目に付せられたタイトルを列記すれば、

第一項 聖徳太子の信仰思想と日本文化創業

第二項 同信協力

第三項 家庭生活

第四項 国家生活

第五項 『国民評論』を駁す

第六項 猶太問題研究

第七項 社会問題

第八項 最後の学園生活

となる。第一項から第四項までは、ごく僅かな接続詞的な字句を除けば、昭信会のバイブルとも言うべき黒上正一郎の著作『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』¹を写経の様にそっくり抜き書きしたと言っても良いほどのものである。この四項だけで、今回翻字した部分の三分の二を占めている。続く第五項から第七項も、彼自身の言葉による「手記」に戻ってはいるものの、やはり、黒上正一郎や三井甲之の著作、明治天皇御製、万葉集といった、昭信会・日本学生協会の正典を基礎に、思想的な議論が展開されており、最後の第八項でようやく、それまでの時系列的な記述へと戻っている。そこで、菅野の「日記抄」などの史料を利用して、まずこの時期の菅野の行動を簡単に年表的に整理しておくことにしよう。

日本学生協会の理念や思想に強く引かれながらも、実際の正大寮での生活や合宿などの経験を重ねるなかで、実社会での経験を欠く帝大出身者の自己満足・優越感、寮内の階級的な組織などに素朴な疑問を懷くようになった菅野は、当局による弾圧に何等抗することなく、「自主的に」進められていった日本学生協会の解散、正大寮の廃止という流れの中で、早大精神文化研究会に活動の軸足を移しつつ、集団での寮生活から、一人の学生として社会の中で生活を実践してゆくことを通じて、自己の「信」を国民としての「同信」に融和・没入すべく、柏木での下宿生活を送って行くことになった。

昭和一八年、本宮で新年を迎えた菅野は、翌日からの新学期開始に備え、九日には柏木の下宿に戻った。二月末に学期末の試験を終えると、三月一五日には再び本宮に帰省し、そこで二〇日に満二四才の誕生日を迎えている。この帰省の際に、菅野は針道の郵便局に出向き、

執筆者一覧 Authors

二宮正人（サンパウロ大学・教授）
Masato Ninomiya (University of São Paulo)

島田法子（日本女子大学・名誉教授）
Noriko Shimada (Japan Women's University)

森茂岳雄（中央大学・教授）
津山直樹（中央大学大学院博士後期課程）
Takeo Morimo (Chuo University)
Naoki Tsuyama (Graduate Student, Chuo University)

東悦子（和歌山大学・教授）
Etsuko Higashi (Wakayama University)

小林茂子（中央大学・非常勤講師）
Shigeko Kobayashi (Chuo University)

柳田利夫（慶應義塾大学・教授）
Toshio Yanagida (Keio University)

飯野正子（津田塾大学・名誉教授／海外移住資料館学術委員会委員長）
玉林洋介（国際協力機構横浜国際センター・次長）
Masako Iino (Tsuda College / Chair, Academic Advisory Committee, JOMM)
Yosuke Tamabayashi (JICA)

JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要 10

2015 年度

発 行：国際協力機構横浜国際センター
Japanese Overseas Migration Museum
海外移住資料館

発行年月：2016 年 3 月

問い合わせ先

JICA 横浜 海外移住資料館

〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港 2-3-1 JICA 横浜

Tel 045-663-3257 / Fax 045-211-1781

Web:<http://www.jomm.jp/> E-mail:info@jomm.jp

本研究紀要は、海外移住資料館『研究紀要』執筆要領に則り編集を行っています。
ただし、原稿の特質、執筆者の意向等を尊重し、一部異なった体裁・表記の部分が
あります。